

浅科村文化財調査報告 第14集

# 海戸田A遺跡

—— 保健センター建設事業にかかる発掘調査 ——

2002

浅科村教育委員会

浅科村文化財調査報告 第14集

# 海戸田A遺跡

—— 保健センター建設事業にかかる発掘調査 ——

2002

浅科村教育委員会

## 序にかえて

本書は、平成10年浅科村保健センター建設に伴う、海戸田A遺跡の発掘調査をした報告書であります。

海戸田A遺跡は、北佐久郡浅科村塩名田の千曲川右岸段丘に位置する遺跡です。平成10年浅科村保健センターが遺跡内に建設されることになり、浅科村教育委員会では記録保存を行うことになりました。その頃、県単農道整備事業に伴う桑山の駒込遺跡発掘調査が、長野県埋蔵文化財センターと長野県教育委員会文化財・生涯学習課で実施されていたので、海戸田遺跡の調査指導をお願いしたところ、心よくお受けいただき、御指導の下で、発掘調査が行われることになりました。

検出された遺構は、縄文時代（4,000年前前後）・古墳時代（約1,700年前）・平安時代（約1,100年前）の大きく3時期に分かれるとのことです。

縄文時代の遺構は、土坑墓群、敷石住居群等が検出されています。特に検出されたすべてが敷石住居跡というのは珍しい例だそうです。古墳時代の竪穴住居跡・平安時代の竪穴住居跡・掘立建物等貴重な遺構が検出されています。

今回の調査成果が教育資料・地域史研究等に充分活用されますことを願ってやみません。

終わりに御指導賜りました長野県埋蔵文化財センター・長野県教育委員会文化財・生涯学習課の皆さん、また発掘作業、資料作業に従事された方がたに心から敬意と感謝を表します。

平成14年3月12日

浅科村教育委員会

# 目 次

## 序

1	調査の経過と方法	1
2	遺跡の環境	2
3	調査結果	3
(1)	縄文時代	3
(2)	古墳時代	27
(3)	平安時代	35
(4)	時期不明	39
4	結 語	40
	写真図版	41
	抄 録	

## 挿 図 目 次

図 1	海戸田 A 遺跡の位置	2
図 2	遺構配置図等	3
図 3 ~ 図 19	縄文時代関係	4 ~ 22
図 20 ~ 図 25	古墳時代関係	27 ~ 32
図 26 ~ 図 29	平安時代関係	36 ~ 38
図 30 ~ 図 31	時期不明	39 ~ 40

## 表 目 次

表 1	遺構別石器一覧	23 ~ 26
表 2	平安時代土器観察表	36

## 写真図版目次

P L 1	遺跡全景
P L 2 ~ P L 8	縄文時代の遺構
P L 9 ~ P L 10	古墳時代の遺構
P L 10 ~ P L 11	平安時代の遺構
P L 12 ~ P L 21	縄文時代の石器
P L 22 ~ P L 23	縄文時代の土器
P L 24	古墳時代の土器



# 1 調査の経過と方法

〔事業計画〕 北佐久郡浅科村では、地域保険法・介護保険法に対応する浅科村地域福祉総合センター「保健センター」（建築面積1,631㎡・鉄筋コンクリート造り、平屋建）の建設を計画した。

〔遺跡保護協議〕 保健センター建設予定地には海戸田A遺跡が存在することが知られており、その保護については浅科村・浅科村教育委員会・文化財保護委員会の三者において協議し、試掘調査を実施することとした。浅科村教育委員会には専門職員はおらず、独力での調査実施は困難だった為、小諸市教育委員会の専門職員の援助を得ることとした。

〔試掘調査〕 は、平成9年12月24日に実施した。その結果、建設予定地の一部に遺構・遺物の存在が確認され、建物建設予定地の記録保存が必要と判断された。記録保存は試掘調査のような応急的な調査体制では困難な事が明白だった為、長野県教育委員会との協議の結果、長野県埋蔵文化財センターに調査指導委託し、その指導下で村教育委員会が調査を実施する事とした。また、後日の協議で、調査指導委託は翌11年度に実施する整理作業も対象とする事とした。以上のような経過で、以下の調査体制を組んだ。

事務局：教育長 柳澤哲郎 係長 有賀喜二 書記 高野吉章

調査指導：長野県埋蔵文化財センター調査研究員上田真、（協力：青木一男、石原州一、徳永哲秀、西 香子、西嶋洋子、広瀬昭弘、百瀬長秀）

協力者：金井 靖、丸山 博、村田 明、佐藤昭子、青木忠人、山浦 昇、井出きく子、依田とも江、林 光治、依田キクヨ、小平しづか、依田幸江、橋本みさ子、碓氷隆子、篠原浜子、宮沢志ゆく、井出春江、工藤松子、土屋なおい、小泉とも江、峯村袈裟雄、小泉政志、木村清美、小林八千代、丑山和江、近藤久子、鳥羽徳子、中川麻由美、中村るり子、半田純子、柳沢るり子

〔記録保存〕 発掘調査は平成10年6月22日から8月12日にかけて実施された。調査区域全面の表土を重機を使用して剥ぎ、以後は作業協力者の手作業で遺構を検出し、調査・精査した。表土剥ぎ中に礫が露出した場所は敷石住居などの可能性があるためそのまま残し、人力で掘り下げた。また大規模な攪乱溝は重機で掘り抜いた。実測は国家座標に基づき40mの大グリッドとそれを分割した8mメッシュを設定し、水準測量と合わせて基準を設定した上で、手作業で記録した。縄文時代の石を使用した遺構については、空中写真測量を行い、手作業の実測図を組み込んだ。国家座標は第Ⅷ系である。写真記録は、カメラはニコンを使用し、上田真ほかが撮影した。全景写真はラジコンヘリで撮影した。手作業以外の測量と全景撮影は㈱東京航業研究所に委託した。

〔整理作業〕 遺物の水洗いは10年度の発掘作業と並行して実施、遺物の注記は協力者、藤田正子・佐藤成子・大熊京子・木村清美・吉田愛子により、平成10年10月12日から11月8日にかけて実施した。以後の整理作業は長野県埋蔵文化財センターの指導の下に12年3月末まで実施した。遺構図の整理・トレース・製版、遺構写真の整理・製版、遺物復元・実測・トレース・製版は手作業で実施し、遺物写真撮影・焼き付けは、(有)ルックスに委託した。報告書の執筆は、1章は事務局・上田真・百瀬長秀、第2章は上田・百瀬、第3章(1)は百瀬、(2)の遺物を青木一男、それ以外を上田・百瀬が担当した。遺構図遺物図の縮尺はそれぞれの図面に付記したが、竪穴住居跡は1：60、住居の施設は1：30、土器実測図は1：4、土製品実測図は1：2、拓影は1：3を原則とした。古代の土器実測図で網目のスクリーンを掛けたのは黒色土器である。土器の写真はおおむね1：3、小形石器は1：1、石斧類は1：3、石皿など大形石器は1：4とした。

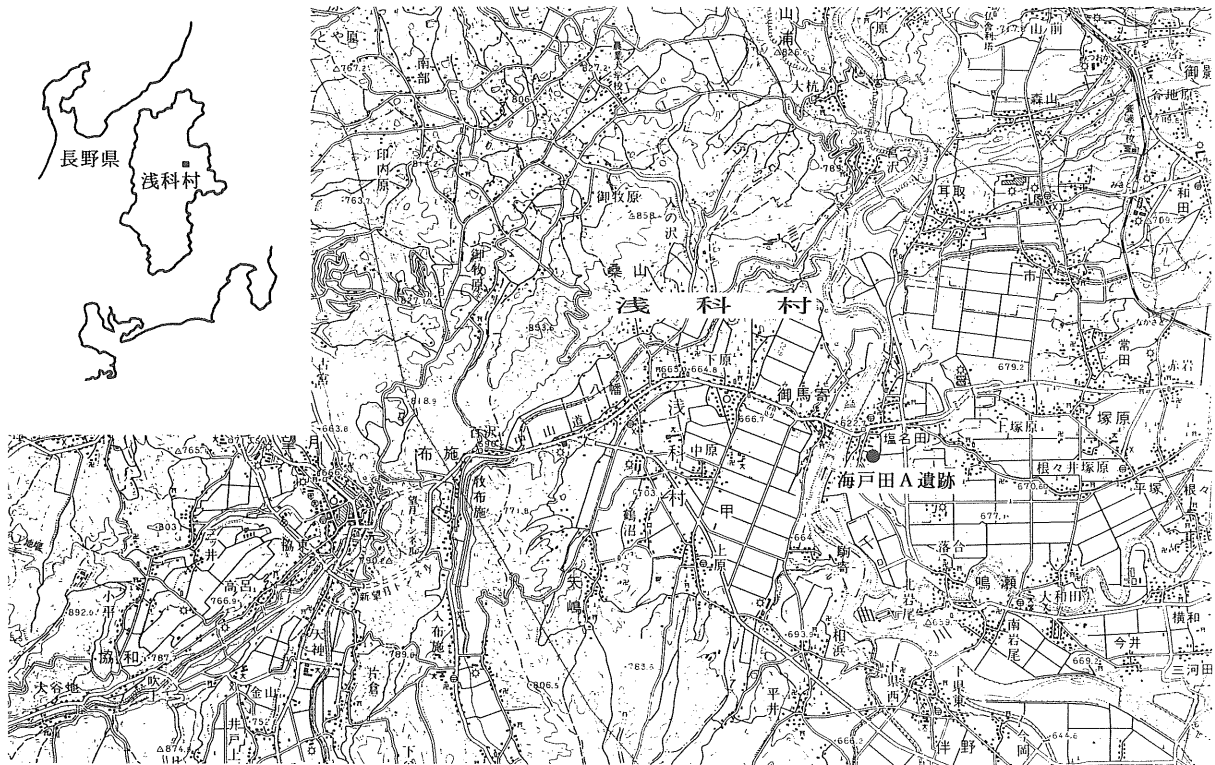


図1 海戸田A遺跡の位置(1:33,333) 国土地理院発行5万分の1地形図「小諸」

## 2 遺跡の環境

海戸田A遺跡は北佐久郡浅科村大字塩名田字海戸田に所在する。東経138°26′、北緯36°16′、海拔634mである。佐久盆地西縁に位置し、盆地を北西に流下する千曲川右岸の河岸段丘上に立地する。残丘状の丘陵の裾北側に幅100mほどの平坦面が開け、その末端は千曲川に向かって緩やかに傾斜して段丘崖に至る。遺跡はこの平坦面から緩傾斜面にかけて立地する。千曲川までの直線距離は300mほど、比高差は20m程度である。現況は水田だが周囲の緩斜面は畑や住宅となる。遺跡の基盤層は不明だが、千曲川に運搬された黄灰褐色の中粒砂層(VII層)が最上位に乗る。VII層の表面は土壌化し、黒褐色砂質土層(III層)や黒褐色粘質土層(IV層)となって、遺跡付近に広く分布する。遺構はこの黒褐色土層中に営まれていたと推測される。敷石住居はIII・IV層中に構築されていたが、堀方のある遺構はVII層上面まで下げないと確実に検出できなかった。昭和50年の「県営ほ場整備事業」で遺跡の一部が損なわれた可能性がある。

浅科村内には『長野県史考古資料編(-)遺跡地名表』で63の遺跡がある。明治32年に発掘調査され、昭和44年に再調査された土合1号古墳を除いては調査例はなかったが、昭和59年以降、中世・矢鳴城跡で数回の調査が為されたのを始め、平成に入ってからには砂原遺跡、寺田遺跡、御馬寄遺跡、入の沢遺跡、大平遺跡などの各遺跡が村教育委員会によって調査され、各々、古墳時代前期の集落跡、平安時代の集落跡、中世城跡、縄文土器とピット2基、奈良・平安時代の集落などが検出された。平成6年までには北陸新幹線の村内通過に伴って、県埋蔵文化財センターによって、砂原遺跡、中平・田中島遺跡、土合遺跡が相次いで調査され、縄文時代中期の竪穴住居跡、古墳時代前期の集落や方形周溝墓群、古墳時代後期や平安時代の集落跡などが発見されている。また海戸田A遺跡の調査の直前には、県単農道整備事業関連で駒込遺跡が県埋蔵文化財センターによって調査され、平安時代の竪穴住居跡2棟と中世の集落跡、多量の縄文時代遺物が発見されている。

# 3 調査結果

## (1) 縄文時代

縄文時代の遺構は調査区域の東端に偏在する。地形上からは、千曲川に向かって下る微段丘の斜面にか

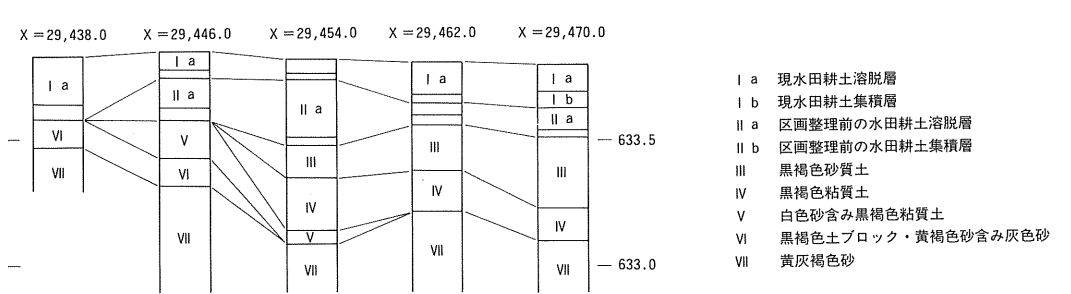
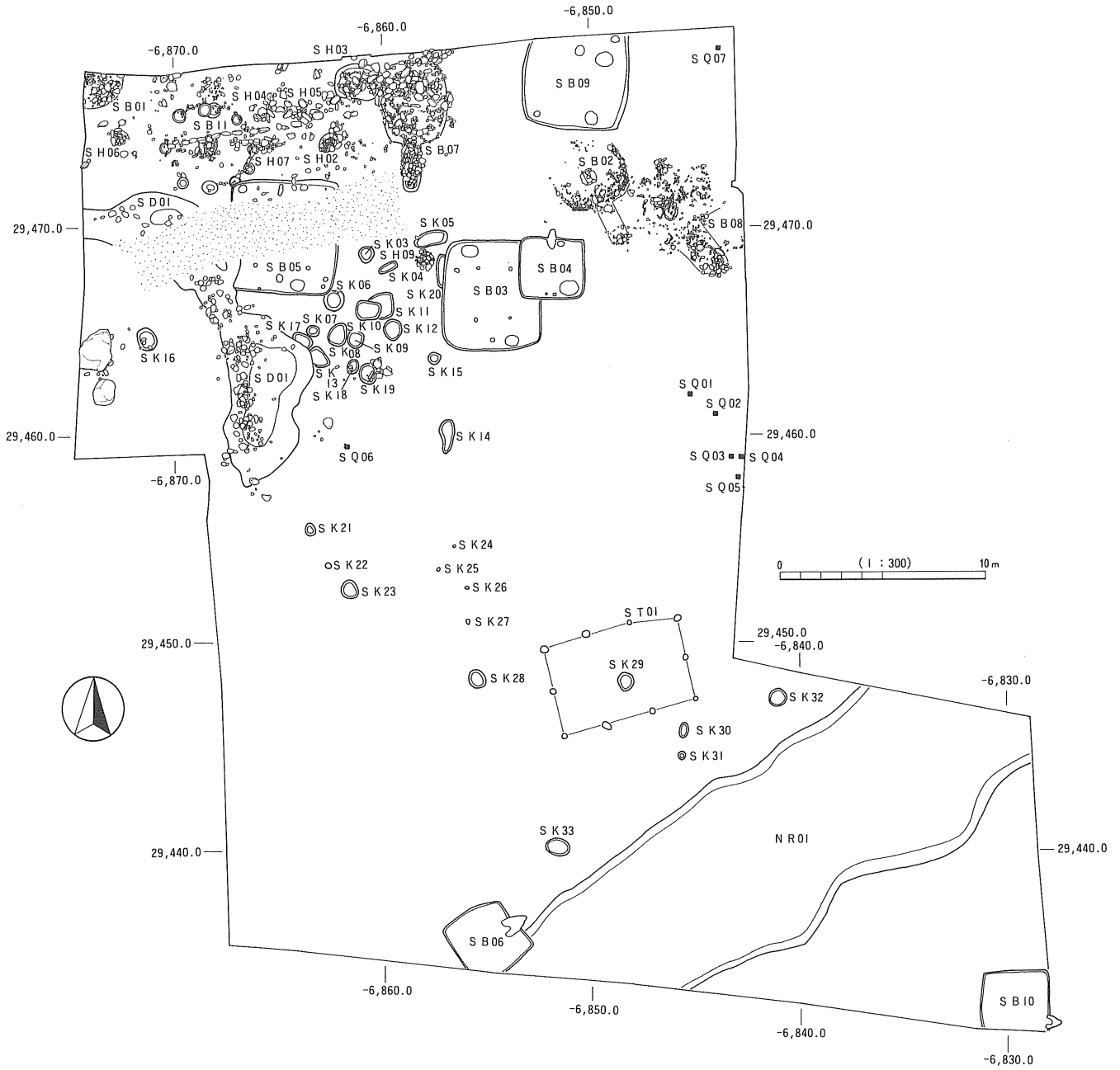


図2 遺構配置図 (1:300), 土層柱状図 (1:60)

かる辺りである。遺構は柄鏡形敷石住居 (SB) 5 棟、配石遺構 (SH) 8 基、土坑 (SK) 20 基程度、単独出土土器 (SQ) 7 基などである。調査区域の中心を占める段丘平坦面上は、縄文遺構の空白域である。敷石住居と配石遺構は千曲川に向かって下がる微段丘の斜面にかかる辺りに位置し、土坑は平坦面の外れ辺りに集中する。土坑が土坑墓なら、中央の空白域に隣接した墓域とその外側の居住域といった構成が推測され、環状構成とは言い切れないが、地形に沿った規則性が看取されることになろう。確認できる柄鏡形敷石住居の柄部はすべて段丘平坦面を向いており、平坦面は中央広場に代わる役割を持っていたのかもしれない。

### SB01 図3、写真PL2

X=29477.000、Y=-6874.000付近に位置する敷石住居で、約3/4は調査範囲外。盛土層を除いた時点で床面の敷石を検出、住居を認定した。黒色砂層中に構築され、埋土も同一の黒色砂層である。黒色砂層直下の黄色砂層上面で掘り方検出を試みたが、発見できなかった。南側に隣接するSH06はこの住居の柄鏡部分に該当する可能性があるが、両者の中間には構築物の痕跡がないので、別遺構と判断した。

平面形・規模は不明。構造は石囲炉の南西側に若干空白を置いて敷石が設置される。材料はいわゆる鉄平石の割石と偏平円礫を併用し、隙間には小円礫を詰めている。石敷きの表面は平坦とは言えない。壁の掘り方は見つからず、礫堤の痕跡も判明しなかった。炉は浅い掘方を持ち、方形に配置された石囲い炉で

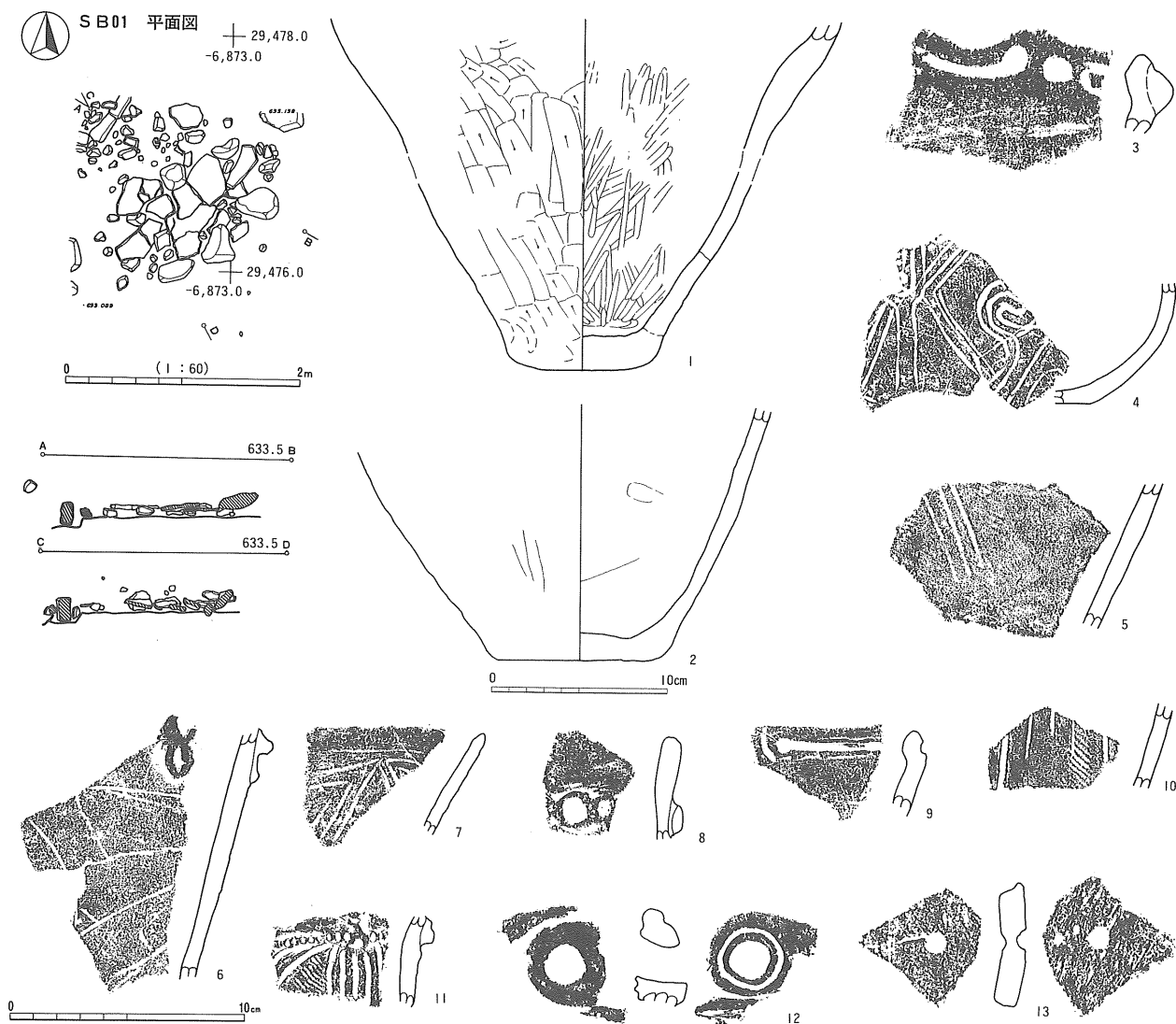


図3 SB01実測図 (1:60), 出土土器実測図 (1:4), 拓影 (1:3)

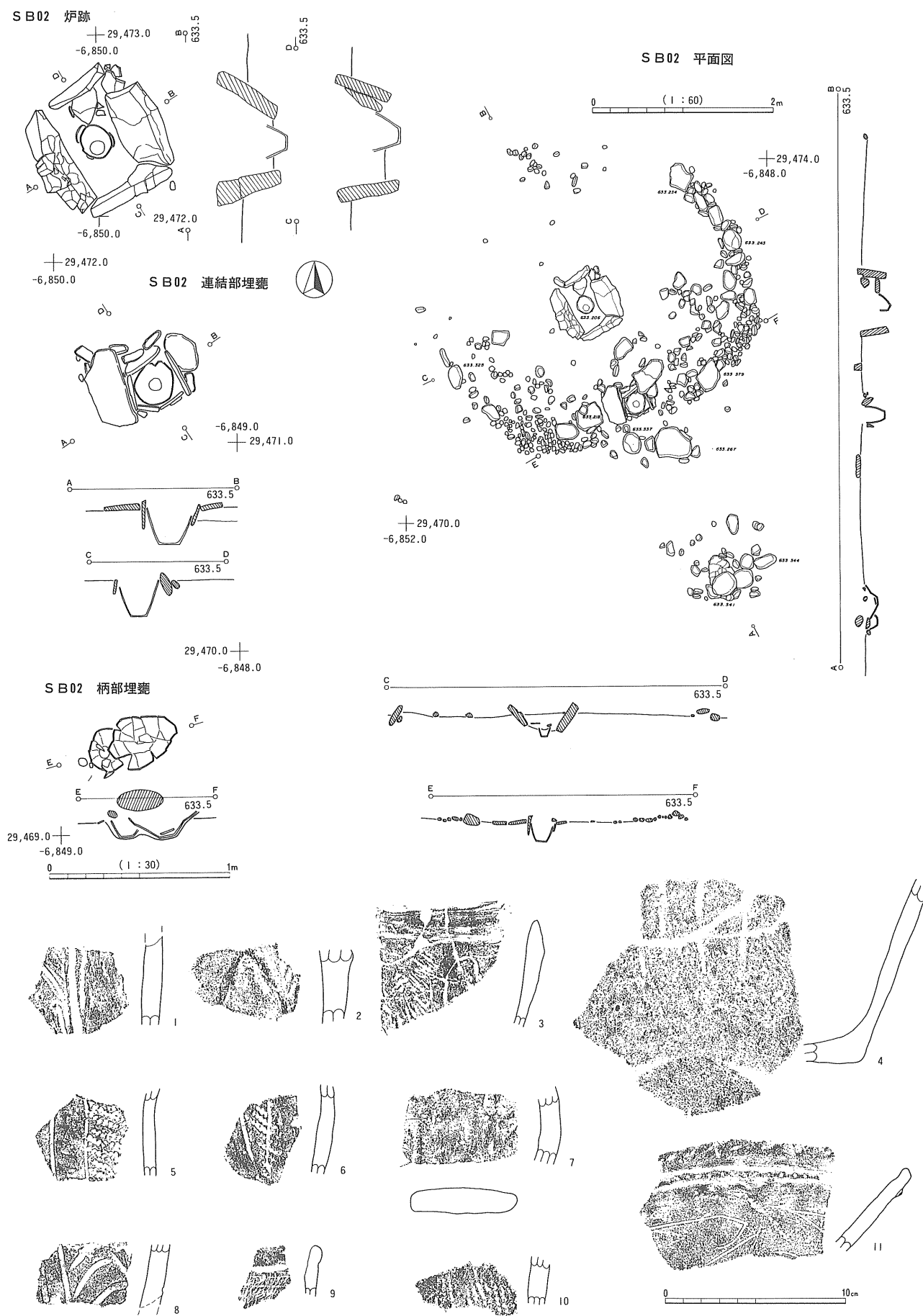


図4 SB02実測図(1:60, 1:30), 出土土器拓影(1:3)

ある。炉石は軽石で、長方形に加工してある。炉の中央に土器の下半部を埋置するが、調査範囲の端のため、正確に把握できなかった。

SB01の時期決定に最も有力なのは炉の埋設土器であるが、無文の底～体部下半で、決定的な資料にはならない。石敷きの床面からの出土遺物は少ないが、図示できた拓本は堀之内1式～2式に属する。埋設土器も同時期ではなかろうか。石器はNo.1～5で、打製石斧2点、磨石類2点、丸石1点などがある。

**S B 0 2** 図4～5、写真PL2・3・4

X=29473.000、Y=-6850.000付近に位置する柄鏡形敷石住居である。水田床土を除いた時点で礫堤・石囲い炉などの石製構造物を検出し、住居を認定した。黒色砂層中に構築され、埋土も同一の黒色砂層なので、掘り方の検出を試みたが検出できなかった。ことによると床面の一部まで削平されており、遺構の上部構造は不明である。遺構は主体部と柄部に別れる。主体部は楕円形になるか、柄部側が直線的で角を持ち奥壁側は楕円形もしくは円形になる可能性があるが、奥壁は痕跡すら失われていて判断できない。礫堤の外周で計測した主軸長3.5m程度、主軸に直交する軸長は3.6mである。壁は礫堤で基底部の構成員だけが残存するが、拳大以下の小礫ばかりが使用されている。床は遺存状況が悪く不明だが、柄部との連結部にある埋甕周辺に敷石が残存し、いわゆる鉄平石と平らな円礫が敷かれている。敷石の上面は磨耗する。石囲埋甕炉がほぼ中央付近に構築される。30cmほどの掘り方の中央に土器底部(12)を埋置し、その周囲に4点の板状の角礫を方形に配置する。角礫は掘り方斜面に立て掛けるように、斜めに設置される。炉内には焼土や灰・炭などは残されていない。連結部の埋甕は30cm程度の掘り方を持つと推測され、掘り方中央に土器底部(13)を埋置し、それを直立させた鉄平石で方形に囲っている。敷石の一部は蓋の役割を持っているかもしれない。柄部は先端だけが残存している。連結部までの長さ2.1m、幅ははっきりしないが1.1m前後だと推測される。柄部先端には20cm程度の掘り方の中に土器底部2点(14と無文底部1点)を埋置

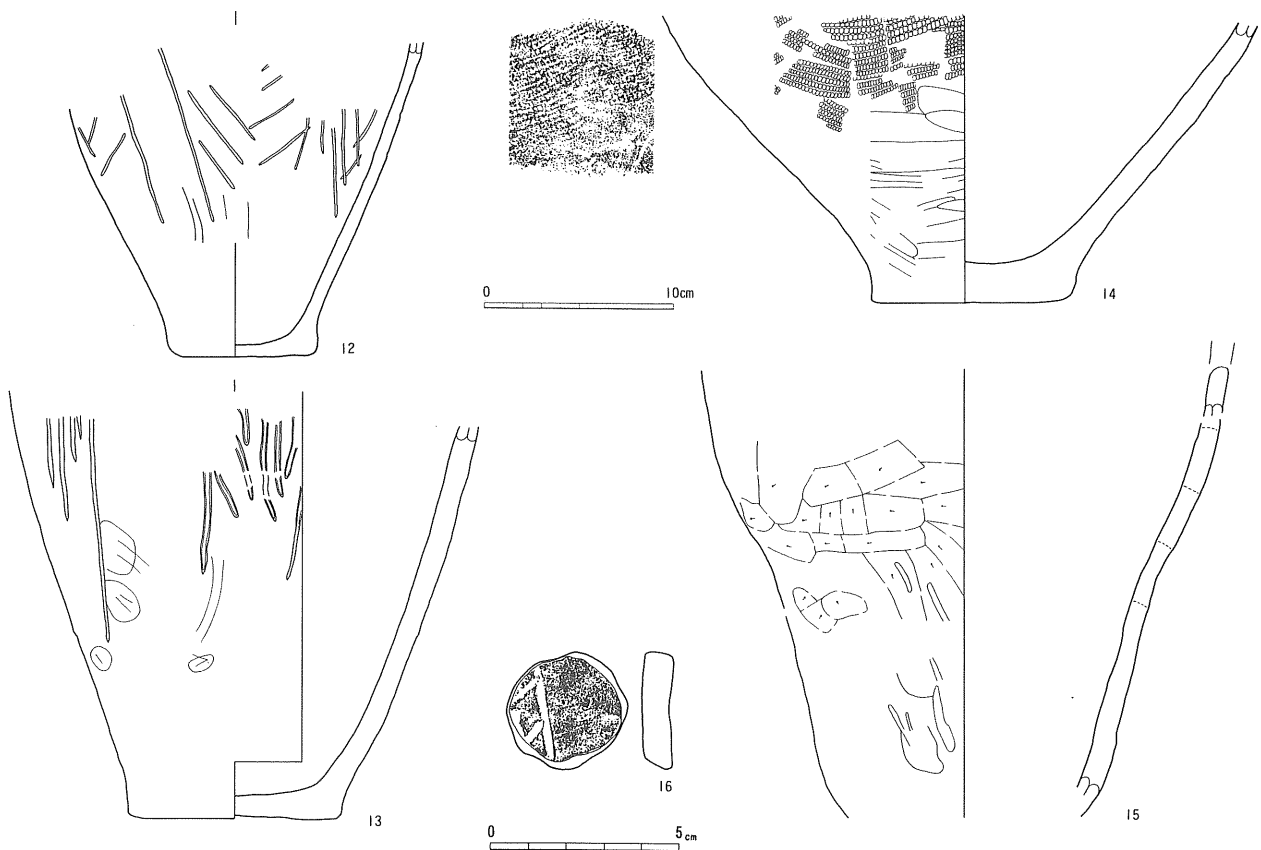


図5 S B02出土土器実測図(1:4)、土製品実測図(1:2)

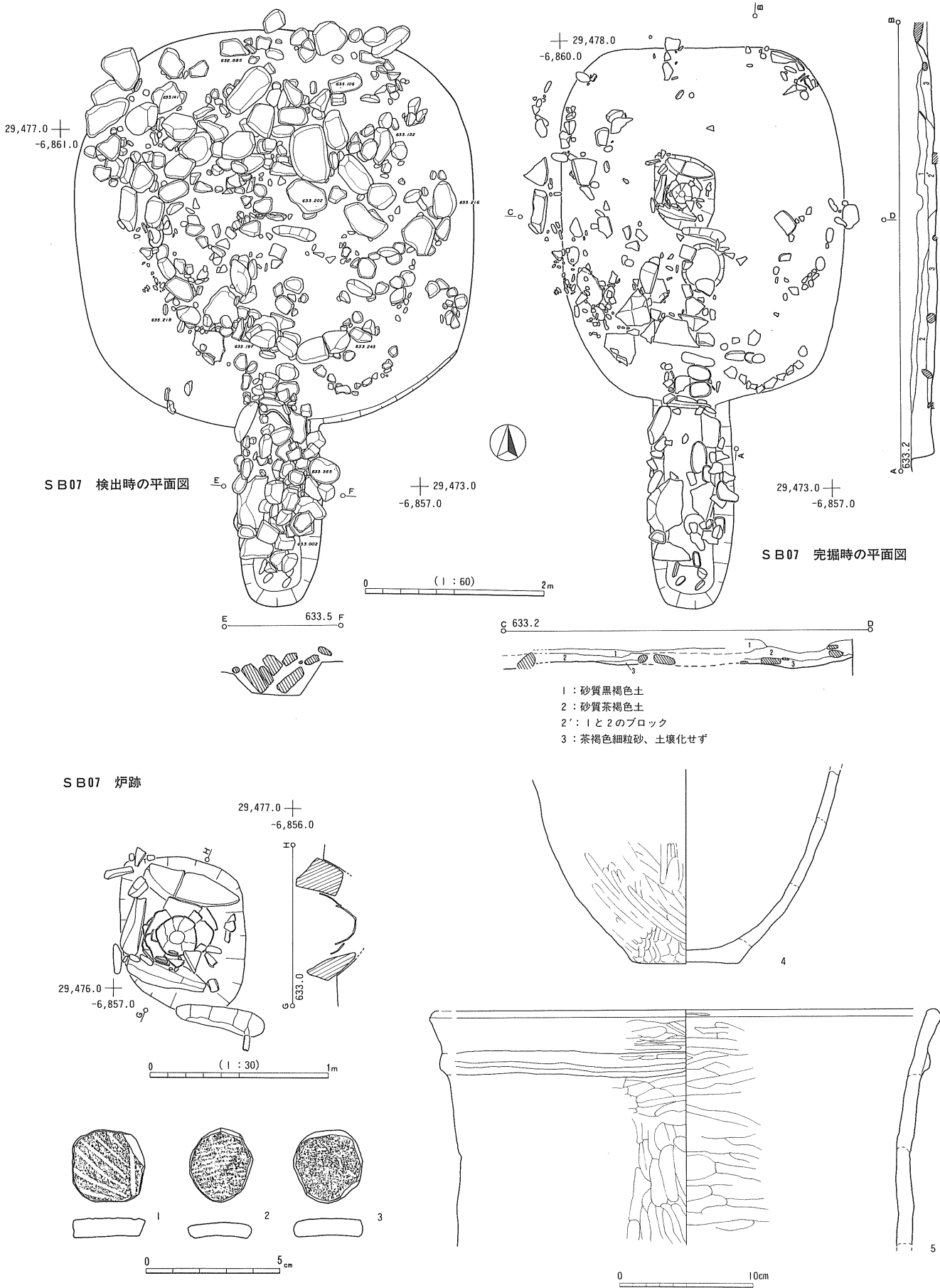


図6 SB07実測図 (1:60, 1:30), 出土土器実測図1 (1:4), 土製品実測図1 (1:2)

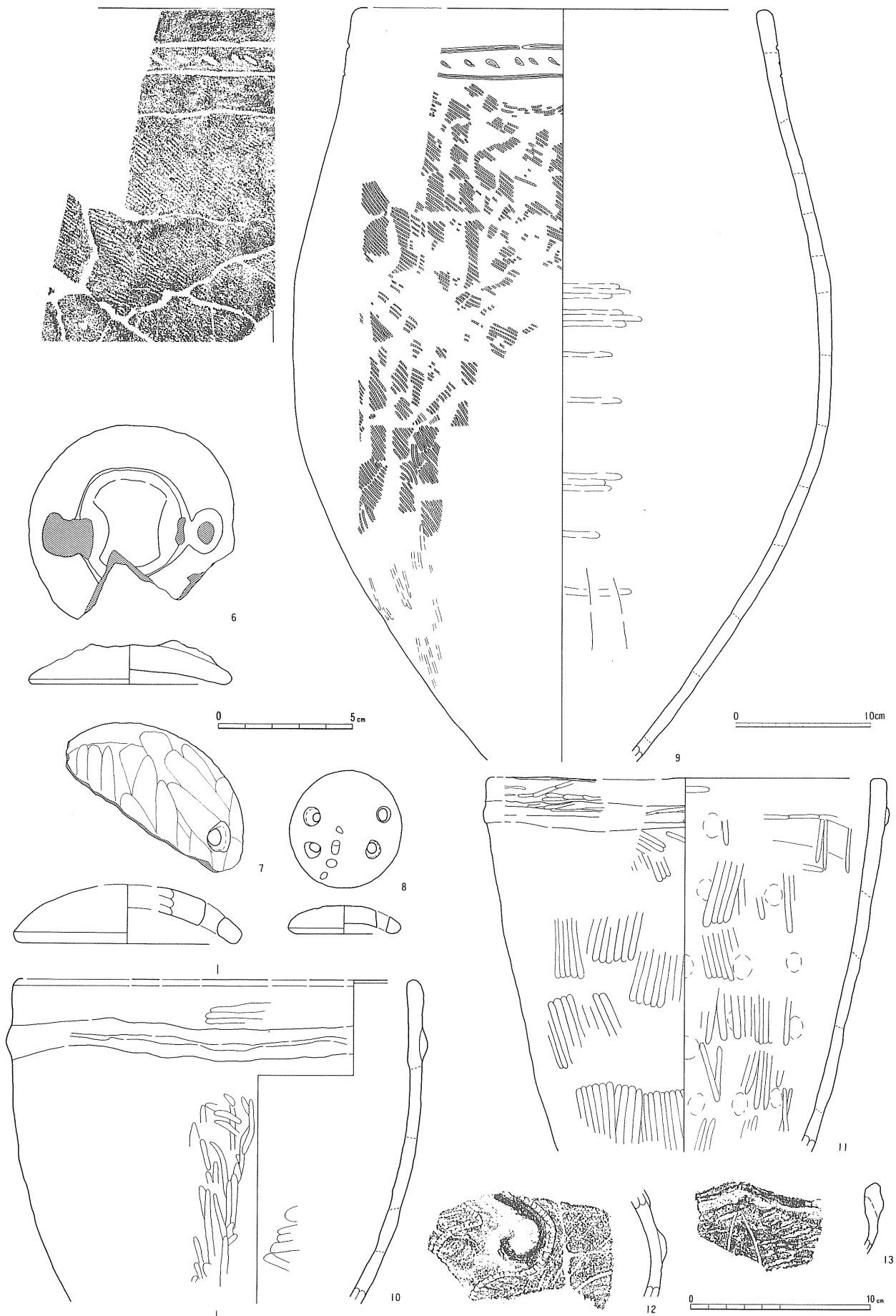


图7 SB07出土土器实测图2 (1:4), 拓影 (1:3), 土製品实测图2 (1:2)





图8 SB07出土土器实测图3 (1:4), 拓影2 (1:3)

し、その上に円礫が残される。礫堤などを撤去後柱穴等を探したが、なにも検出できなかった。

時期決定は4点の埋設土器が最有力だ。12・13は唐草文土器4段階、14は加曾利E式末で、中期末に位置づくだろう。11などの堀之内式は混入か。石器はNo.6～9で、石鏃1点、石錘1点、打製石斧1点、磨石類1点、などがある。

### S B 0 7 図6～8、写真PL4・5

X=29476.000、Y=-6858.000付近に位置し、この遺跡で最も残りのよい柄鏡形敷石住居である。SH01が上に乗る、SH03と接するかわずかに切り合う。水田床土を除いた時点で礫堤の一部を検出したが、SH01撤去後によりやく存在を把握した。礫堤を構築していたと思われる人頭大以上の円礫が住居内に転落しており、遺構配置図はそれらを識別する前に作図してある。黒色砂層中に構築され埋土も同一の黒色砂層なので、下層の灰褐色砂層まで掘り込まれている主体部南辺と柄部以外は掘り方が確認できない。実測図右側は検出時の平面形であるが、堀方は明瞭ではなく、完掘時の平面形が正しいのだろう。主体部は楕円形で主軸長4.0m、主軸に直交する軸長は3.2mである。

礫堤は依存状況が悪く、部分的にしか検出できなかった。拳大の角礫を集めているものの厚みはなく、並べ方にも規則性はない。住居内に転落している人頭大の円礫とはまるで異なっているが、礫堤の底部には拳大の角礫が使用され、その上に同様の角礫・円礫や人頭大の円礫が重ねられたのではなかろうか。床は柄部と石囲炉の間に限定して、いわゆる鉄平石の割石を使用した敷石が設置される。敷石のない部分の床は特に固められた痕跡はない。炉に隣接して、上に敷石が半分のった状態でピットが1基検出されたが、それ以外には床施設はなく、床下施設も発見できなかった。炉は大形の方形石囲炉で、3方向の縁石が残されていた。石囲内部を掘りくぼめ、土器の底部(4)を埋置している。石囲いに使用されるのは厚い板状の垂角礫で、被熱して割れている。

連結部は平たい円礫を立てて埋め、住居主体部とを区切っている。連結部に隣接した主体部床には平たい円礫を敷いているが、埋甕はない。柄部は深さ40cmほど掘り窪め、人頭大以上の大形の円礫を、堀方に斜めに立て掛けるように入れている。その上に人頭大程度の円礫が投入されているが、意図的なのかどうかは不明である。

時期決定は炉体土器でいたいところだが、無文の底部なので難しい。この住居には図示できる土器が多い。加曾利E式の系譜を引く口縁部直下に隆帯1条を巡らすだけの5,10,11,14～17が中核となり、19など称名寺式でも新相を示す土器が組成する。18の注口土器、6～8の蓋なども注目すべきだろう。

石器はNo.10～28で、石鏃1点、小剥離痕のある剥片1点、残核2点、磨製石斧2点、打製石斧2点、石皿1点、台石1点、磨石類6点、丸石3点などがある。

### S B 0 8 図9・図10(5～16)、写真PL5

X=29471.000、Y=-6846.000付近に位置し、SB02と並列する柄鏡形敷石住居である。両者は切り合うことはないが、間隔がほとんどないので同時併存することはなさそうだ。水田床土を除いた時点で礫堤と床の敷石の一部分を検出し、住居を認定した。黒色砂層中に構築され、埋土も同一の黒色砂層で、掘り方は検出できなかった。床面の一部まで削平されていて、遺構の上部構造は失われている。遺構は主体部と柄部に別れる。

南縁と柄部連結部分に拳大程度の小円礫が集中しているが、これが礫堤の痕跡だろう。床は炉の奥側にわずかに敷石が残る。礫堤が底近くまで損なわれていることを考えれば、床の大半も耕作などで損なわれていると見るべきだろう。敷石には板状の円礫が使用される。炉は石囲い炉だが、炉石は奥側の1辺にしか残らない。大きく厚い板状の垂角礫を配置しているが、被熱して割れている。炉の堀方の外側、残存する炉石の直下に、深鉢(5)をほぼ正位に埋設している。位置からして炉体土器とはいいがたい。

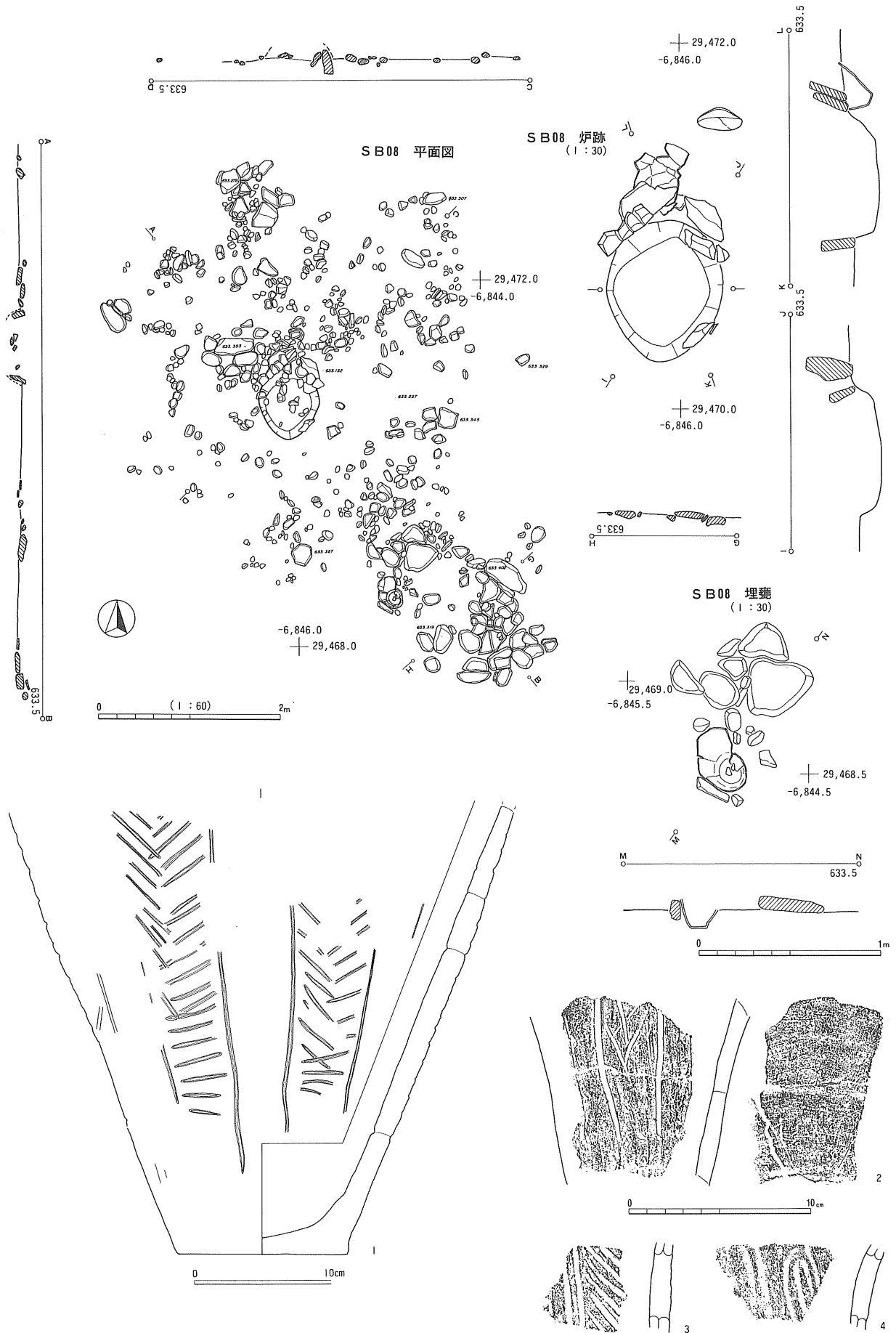


图9 SB08实测图 (1:60, 1:30), 出土土器实测图 (1:4), 拓影 (1:3)

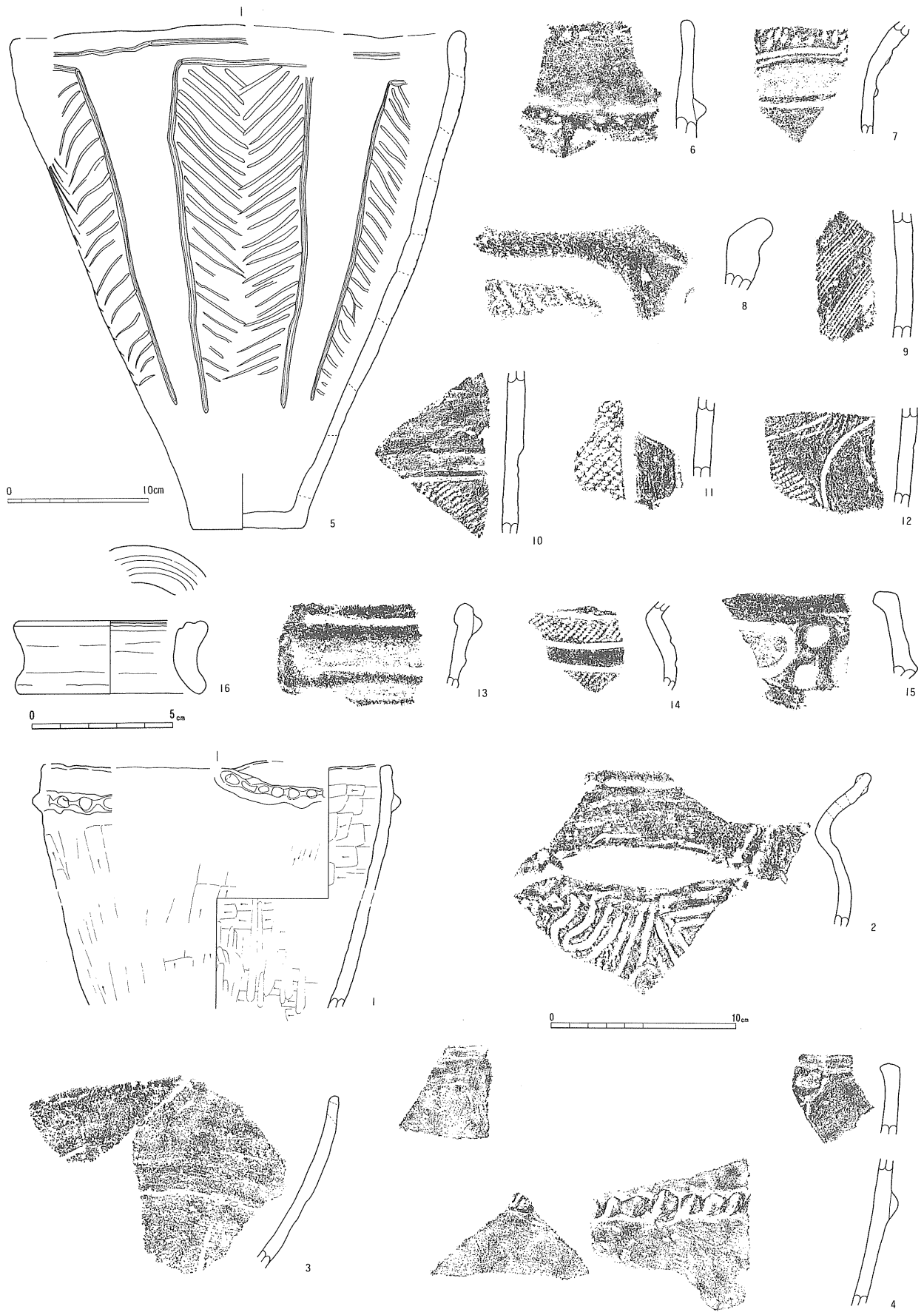


図10 SB08出土土器実測図(1:4)・土製品実測図(1:2)と拓影(1:3)[5~16],  
SB11出土土器実測図(1:4)と拓影(1:3)[1~4]

連結部には板状の円礫が数点敷かれ、その脇には深鉢（1）が正位に埋設される。柄部にも連結部同様の板状円礫が敷石状に配置されるが、その範囲が広いので規模の大きな柄部があったと推測される。

2点の埋設土器とともに唐草文土器4段階なので、これでSB08の時期を決定してよく、SB02とほぼ同段階だろう。石器はNo.29～36で、残核1点、打製石斧4点、磨石類3点などがある。環状の土製耳飾り1点はこの時期の産かと推測する。

#### SB11 図10（1～4）・図11、写真PL6

X=29474.000、Y=-6868.000付近に位置する。恐らく敷石住居の下部構造に該当する。黒色砂層中の配石遺構を調査中に、同層の最下部付近から、礫堤の下部を構成すると思われる環状に巡る小礫群を検出し、住居を認定した。また、黄色砂層の上面で、柱穴と推定されるピットと、炉の掘り方を検出した。壁や床は発見できなかったのは、本住居の上にSH01が載っていて同遺構構築時に壊されたからかもしれない。

平面形は礫堤の配置と柱穴の配置から見て円形である。礫堤の外側で計測して5.7m×4.6m、掘り方が不明なので深さは計測できない。周堤を構成するのは拳大程度と小振りの円礫だが、これらはあくまで周堤の最下部に過ぎない。上部構造は失われているので、本来の姿は不明である。同様の円礫が遺構北側に不整形に延長しており、柄鏡部分の残骸の可能性はあるが、確認はできなかった。礫堤の中には多孔石や石棒、打製石斧などが混在している。礫堤と重複する位置に11基のピットが検出された。P2を除いて直径50cm～60cm、深さ30cm～70cmと大きく、柱痕跡こそ確認できなかったが、柱穴だと認定した。周堤中に柱を設置したと推測する。P1とP7は切り合っており、柱の建て替えが窺える。柱穴群の中央に100cm×90cm、深さ35cmと大きな掘り方の炉がある。その検出面には小円礫が集中し、掘り方内部には人頭大の円礫が5点投入されている。図11-5の深鉢を10片ほどの破片に分割し、それを炉の掘り方斜面に敷いている。土器片は表向き・裏向きの両方があり、底面には敷かれぬ。炉の埋土にはほとんど焼土が含まれないが、炉の底面はある程度焼けて赤変している。炉の底面からP12が検出された。直径50cm、深さ60cm、他の柱穴と同規模で、炉に先行して構築されたと考えられるが、位置から考えて柱穴だと断定する事はできない。

SB11の西辺は古墳時代の竪穴住居SB03が構築されたうえ、近代の攪乱を受けている。柄鏡形敷石住居なら西辺側に柄部分が存在する可能性が高いのだが、こうした事情によってその存否は不明である。

SB11に確実に帰属する遺物は炉内出土深鉢（5）で、称名寺式の末期かと推測する。礫堤内出土遺物のうち、1・3・4は5と組成するだろう。石器はNo.37～45で、調整剝片1点、磨製石斧1点、打製石斧1点、石皿2点、磨石類2点、丸石1点、石棒1点などがある。

#### SK群 図12～14、写真PL7

SK03～SK20はX=29465.000、Y=-6860.000付近に集中する。多くは不整楕円形で、長径は80cm～160cm、短径は60cm～120cm、深さは10cm～50cmである。埋土は一応は分層できるのだが、ブロック状の埋土を誤認した可能性がある。SK群出土遺物は以下のとおり。SK02はNo.46の磨石類1点、SK03は土器1～7と打製石斧石材のフレイク若干、SK04は土器8～13と黒曜石フレイク・打製石斧石材フレイクが若干、SK06は土器14～15と19、SK10は土器16～17、SK16は土器18～23、SK17は土器24～25、SK18は土器26、SK20は土器27、SK21は土器28～31、SK23は土器32である。なお、19はSK06・SK16の接合である。SK03とSK04は堀之内式、SK06唐草文4段階、SK10は加曾利E3式、SK16～SK18は称名寺式、SK21は加曾利E4式だろう。

SK群の規模はおおむね一定して、墓坑に好適な大きさである。また、SK04・SK06・SK10・SK17・SK18などは大きい土器破片をもつ。それらは副葬品ではなさそうだが、土器破片を遺体に被せることは珍しくない。これらSK群は土坑墓群と考えてよいだろう。

SB11 平面図

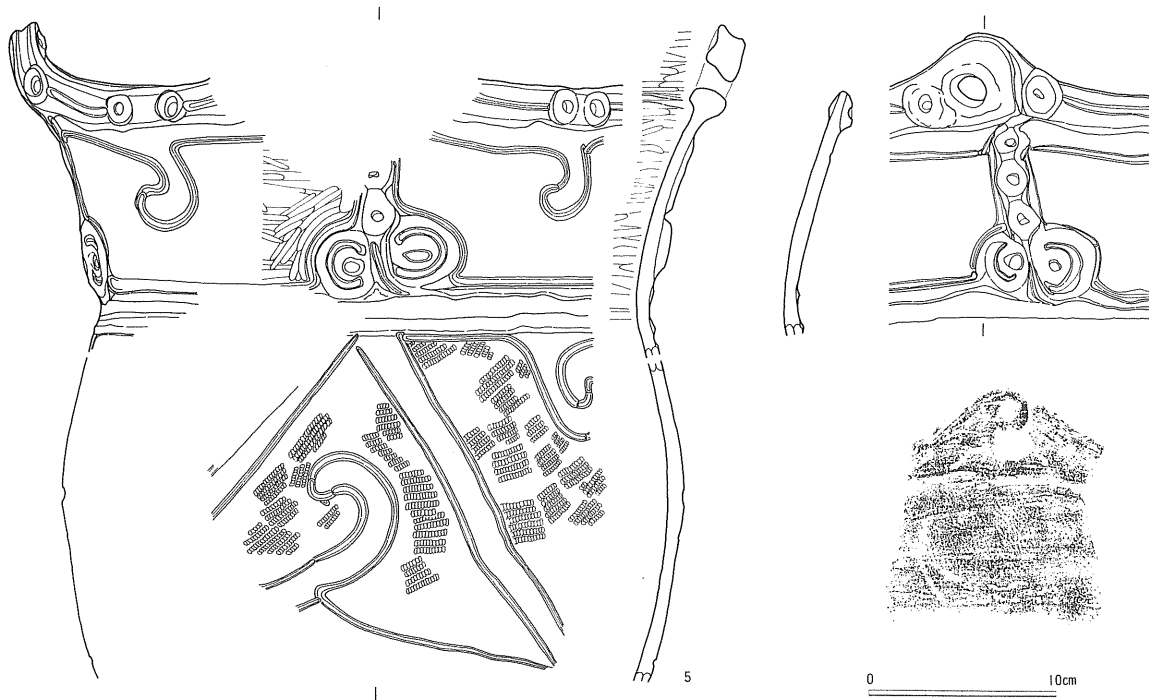
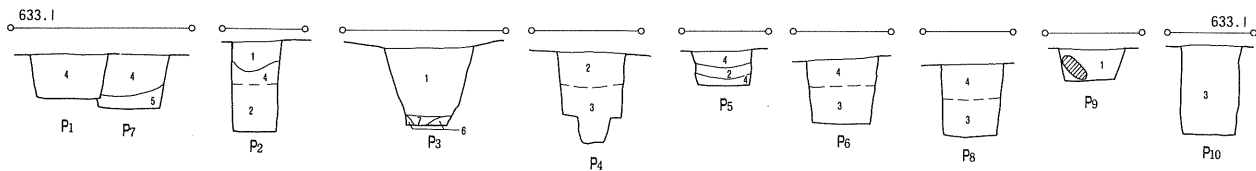
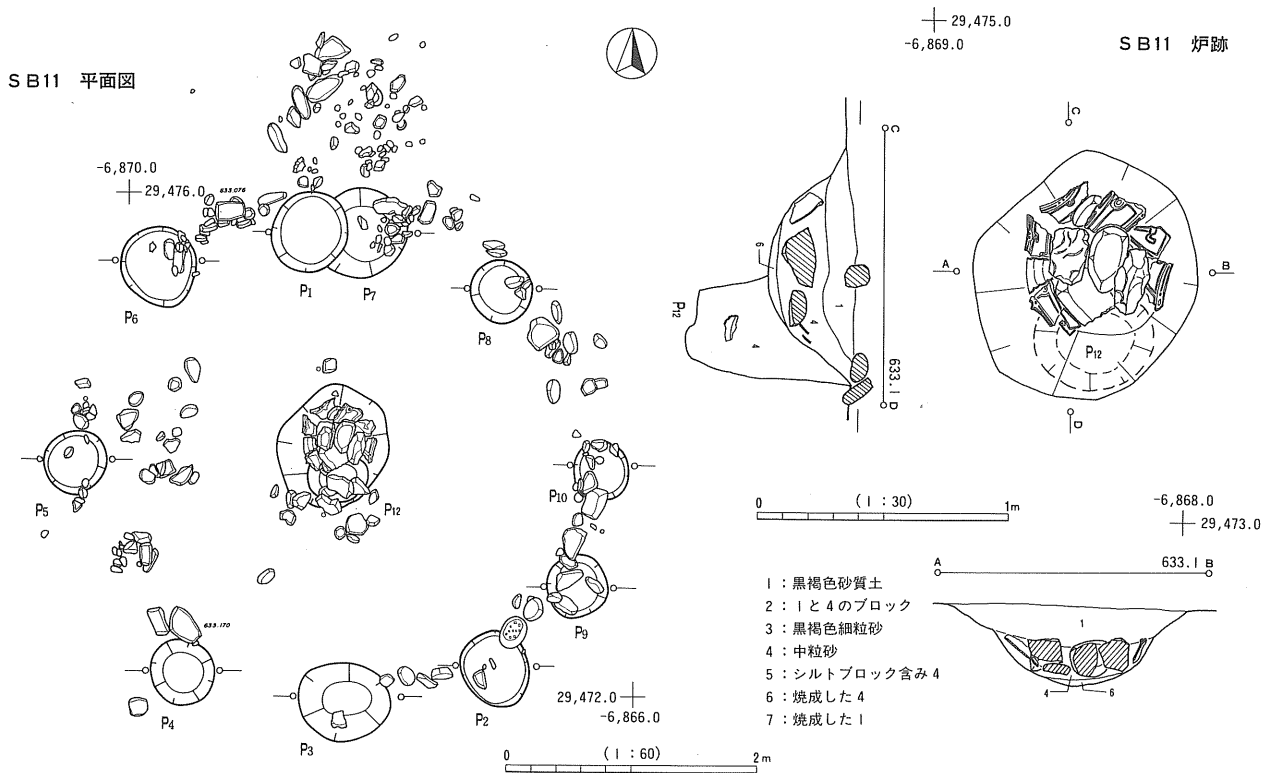


図11 SB11実測図 (1:60, 1:30), 出土土器実測図 (1:4)

3 調査結果

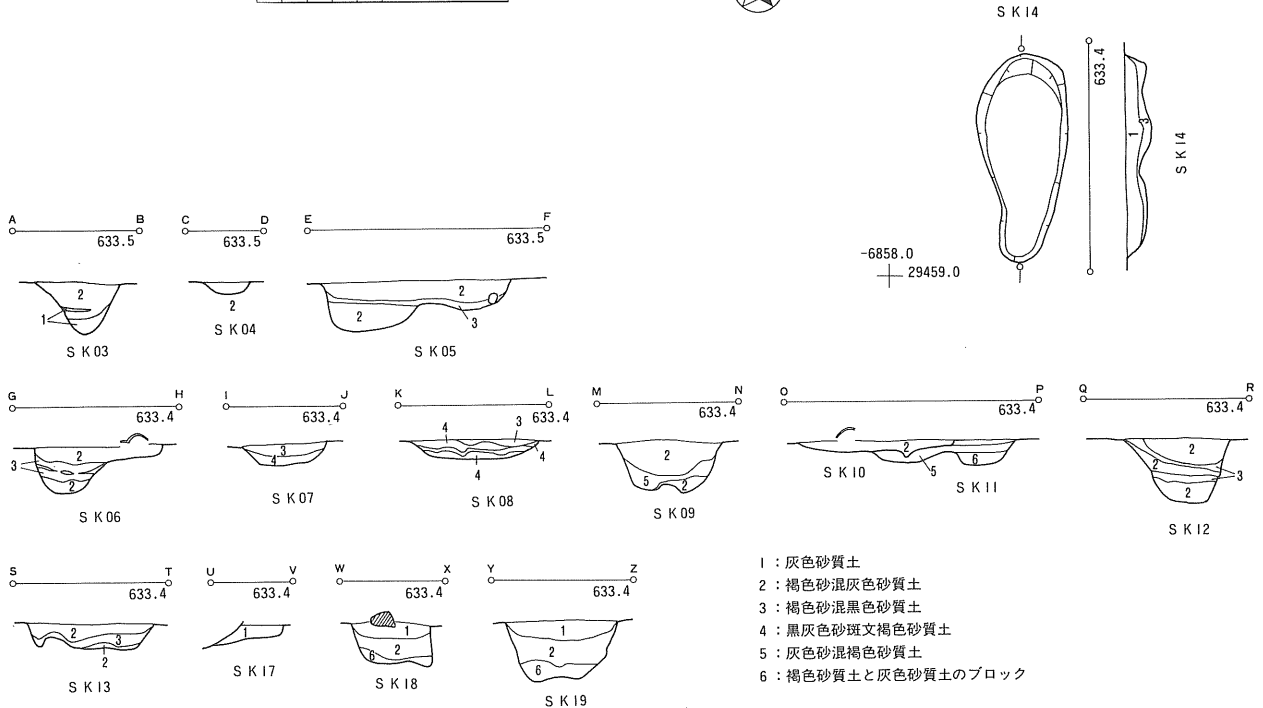
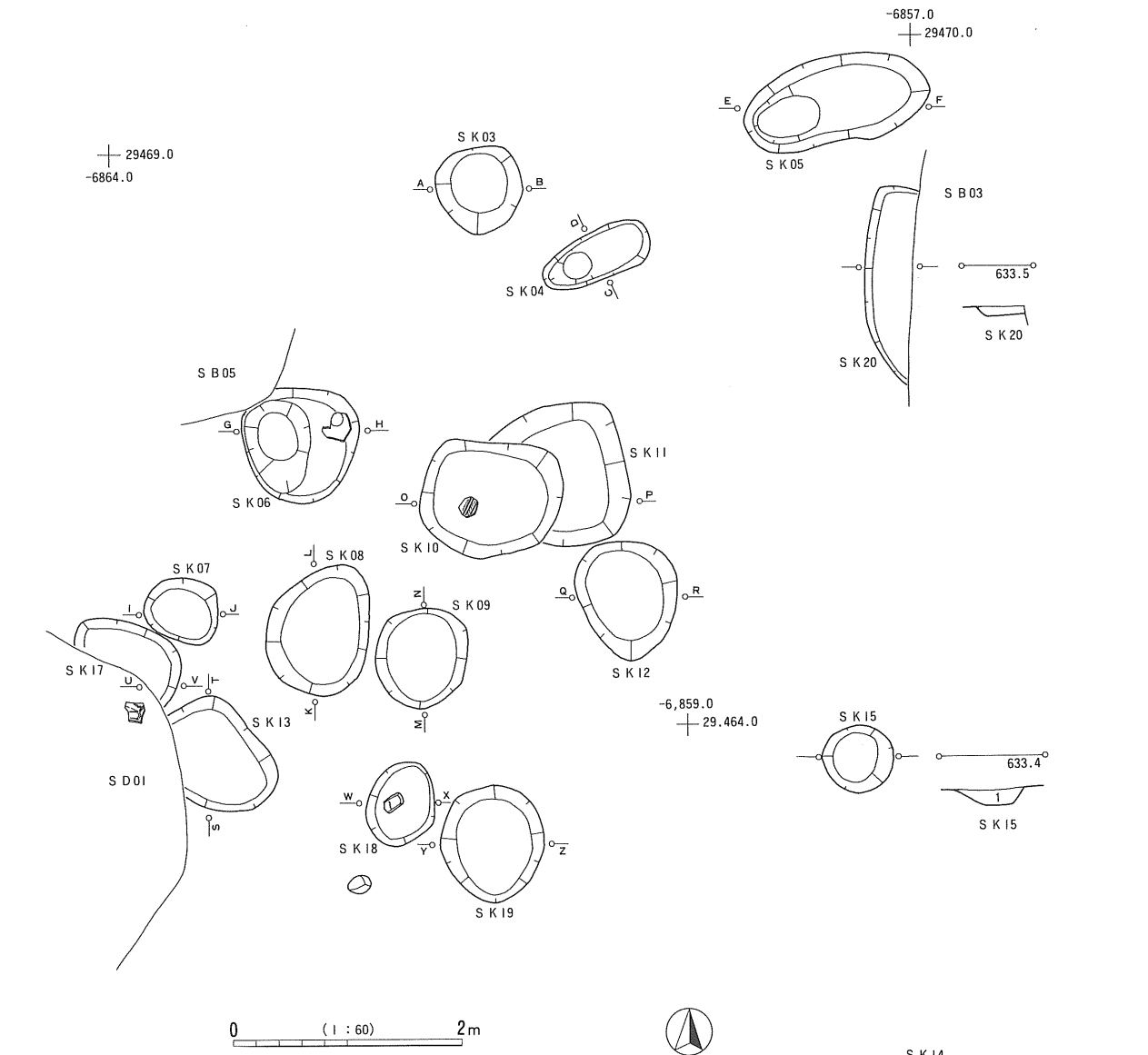


図12 SK群実測図 (1:60)

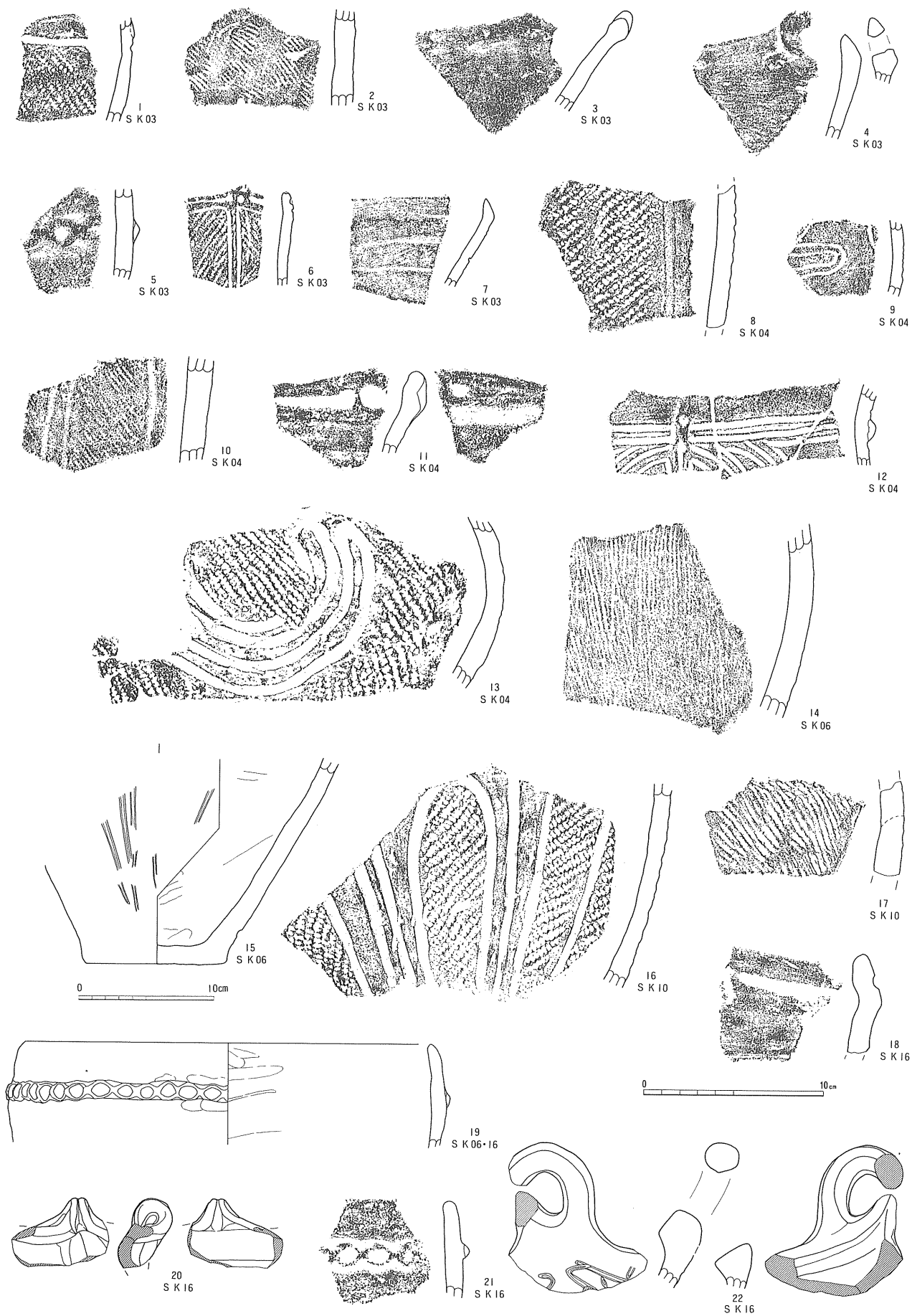


图13 S K群出土土器实测图(1:4), 拓影(1:3)-1



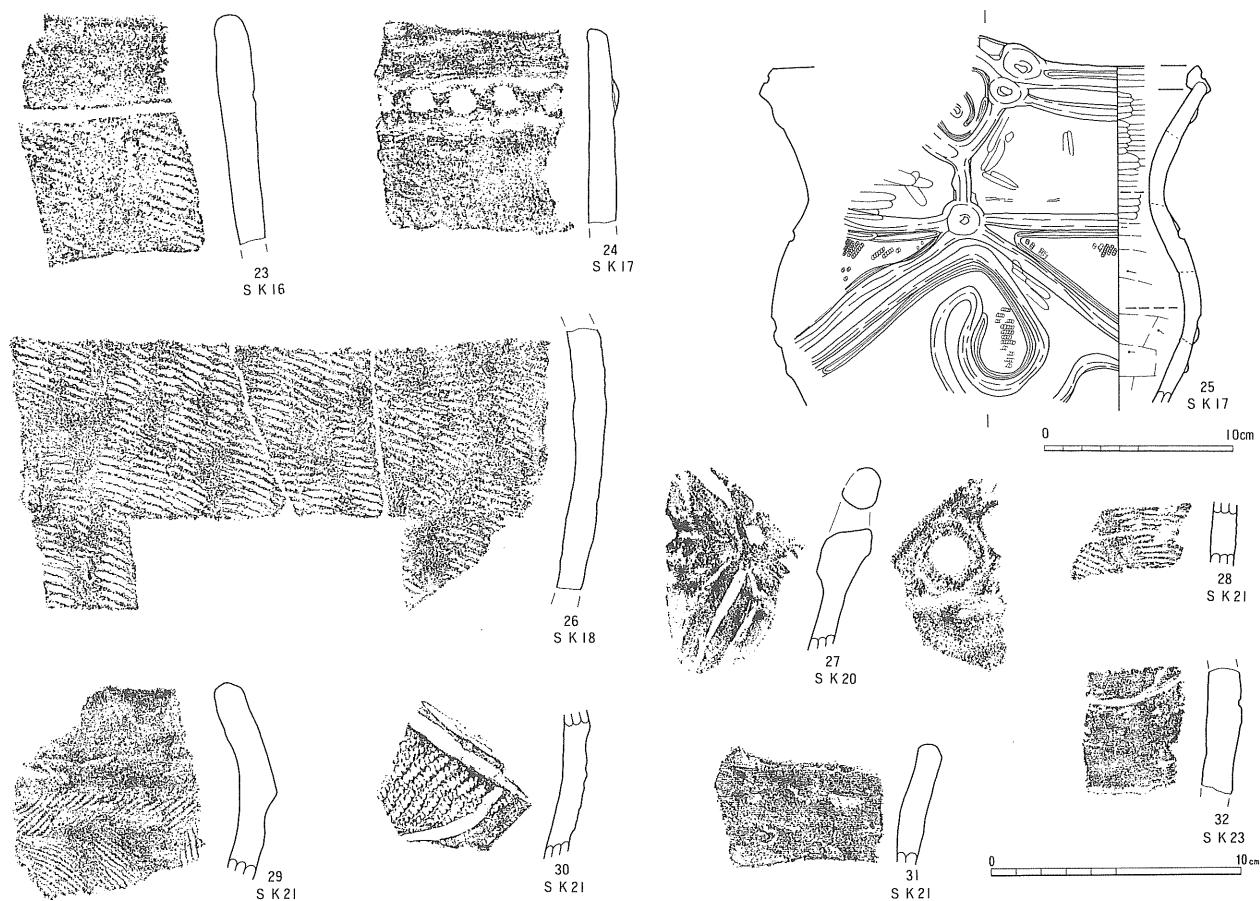


図14 S K群出土土器実測図(1:4), 拓影(1:3)-2

## S H群

### [SH02] 図15

X=29474.000、Y=-6862.000に位置し、黑色砂層中に構築された配石遺構である。下部構造として、黄色砂層上面で検出した110cm×70cm、配石底面からの深さ20cmの掘り方を持つ。これは実際にはもう一回り大きいものと推測される。掘り方の中央にほぼ完形の土器一点が横倒して置かれ、その周囲には拳大から人頭大の円礫・偏平角礫等多様な礫が存在する。礫の配置には規則性がないが、掘り方中央に向かって倒れ込んだような重なりが観察される部分がある。掘り方に向かって投入されたと推測する。掘り方の規模からして、配石墓の可能性が十分ある。

図15-3はその完形に近い土器で、SH03出土の破片に同一個体がある。口縁部でくびれる無文深鉢で、称名寺式後半～堀之内1式の範疇に入る可能性がある。石器はNo.50～51の磨石類が2点出土している。

### [SH03] 図15、写真PL 7

X=29477.000、Y=-6861.000に位置し、黑色砂層中に構築され東西方向に長軸をとる石棺墓である。SH01が上に乗り、SB07が隣接して切り合う。SH03とSB07は切り合う部分が損壊しており、両者の前後関係は確定できない。構造は複雑で、丁寧に構築される。まず下層の黄色砂層に浅く食い込む楕円形の掘り方を掘る。斜面は緩やかに傾斜し、底も緩いカーブを残す。その底部～斜面上部にかけて、拳大～小児頭大の偏平な礫を転々と配するが、それらは掘り方の底面より若干浮き上がり、高さ調整のためにある程度埋め戻されたらしい。さらに、これらの礫が面的に敷き詰められないのは、上部構造に対する位置や高さ調整の役割を担っていた裏込めだったからだろう。その上に大形の偏平礫やいわゆる鉄平石を敷き詰めて底部を構築し、大形でかなり厚い偏平礫を斜めに配して側壁とする。南壁の一部を構成していた礫は石

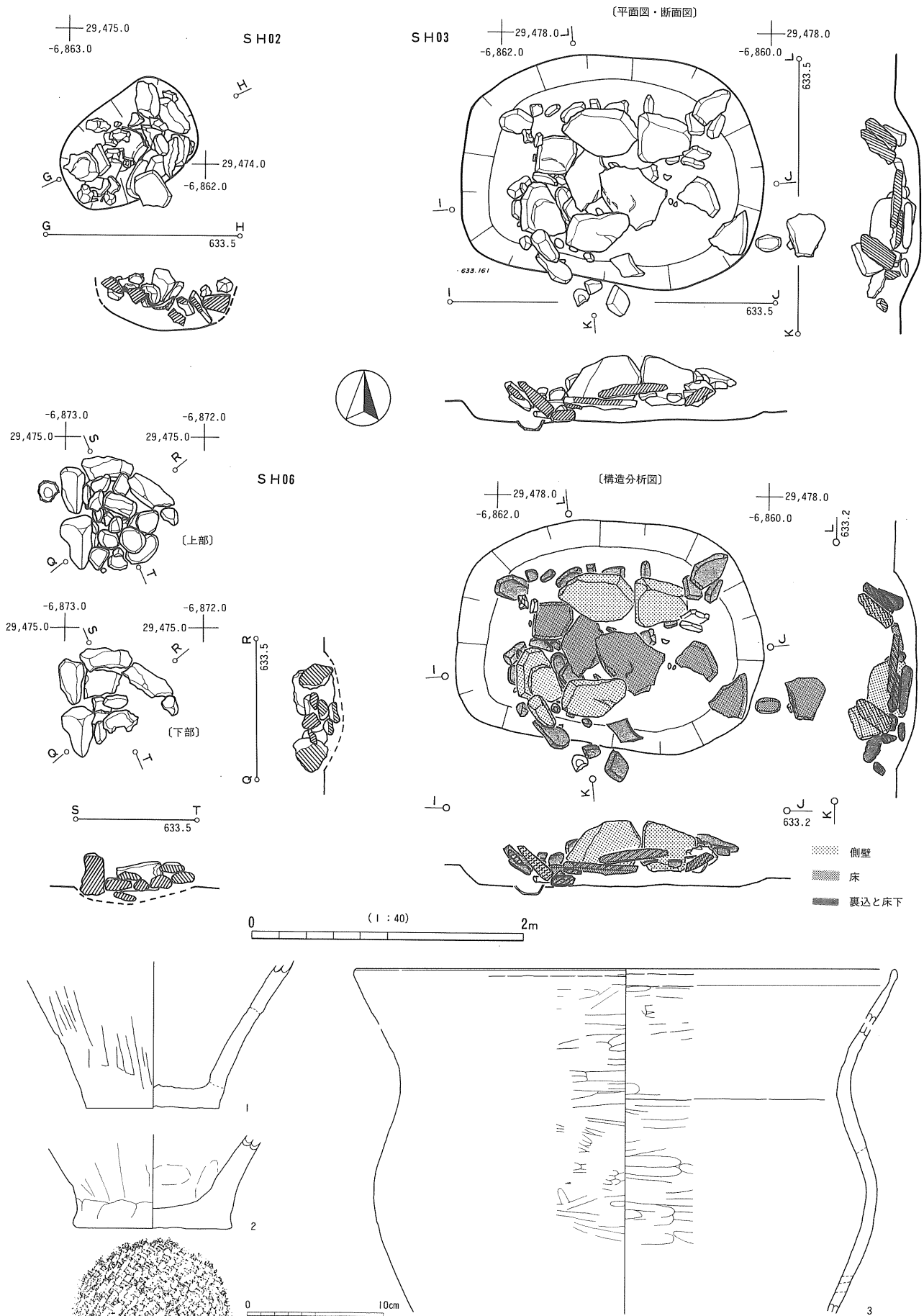


图15 SH群实测图1 (1:40), 出土土器实测图 (1:4)

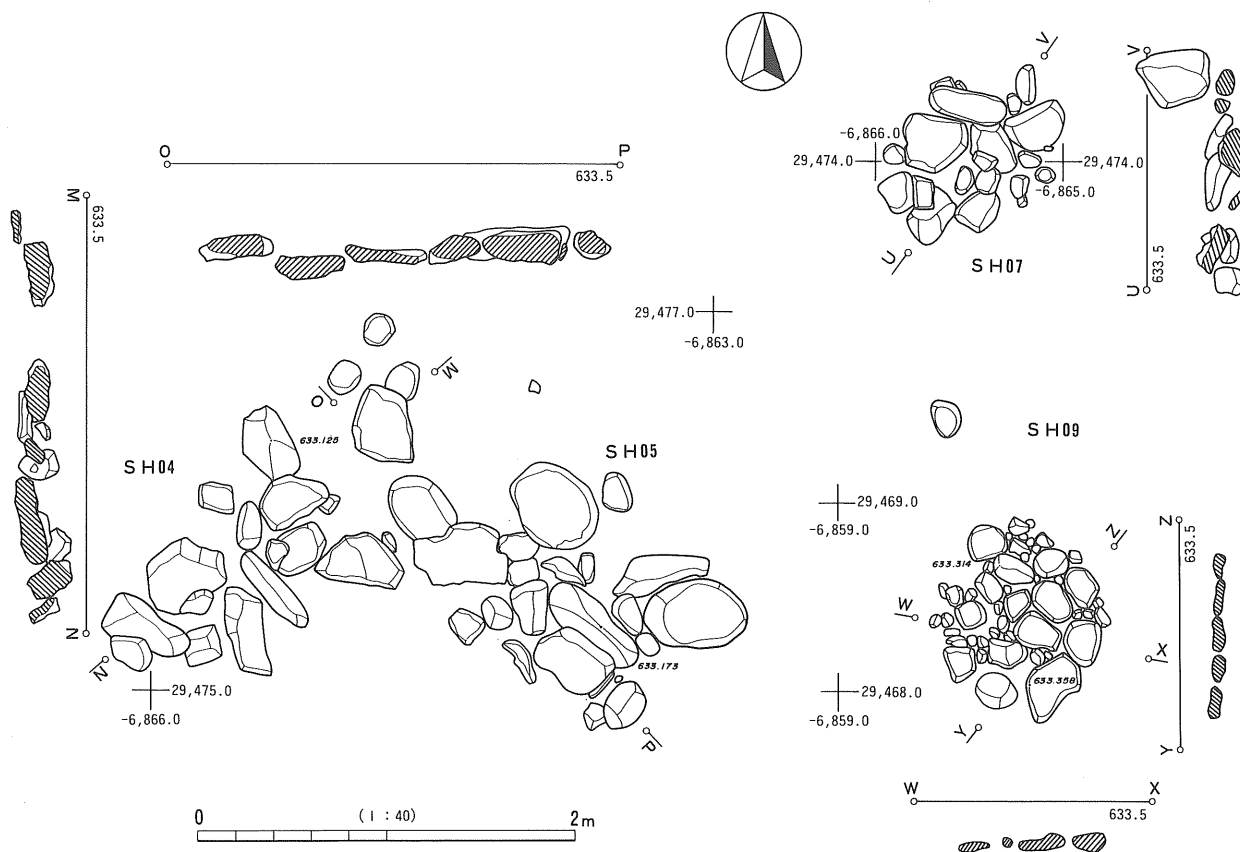


図16 SH群実測図2 (1:40)

棺内側へ向かって倒れかけているが、これは表土除去の折に重機で押し倒してしまったためと思われる。本来は他の側壁と同様に掘り方の傾斜に従って斜め外側を向いていたのだろう。西壁の掘り方底面に、土器の底部1点が埋置される。裏込め付きの斜め側壁及び裏込め付き底部全面石敷き構造は、県内の既知の石棺墓の構造とはやや異なり、はるかに丁寧である。古相を示す石棺墓だと考えたい。

埋置された土器以外に確実に遺構に帰属する遺物はない。その埋設土器図15-1は無文の深鉢底部で時期を特定できないが、SH02出土の図15-3の破片がSH03からも出土しているので、同様の時期に属す可能性があろう。石器はNo.52の台石が1点と打製石斧石材のフレイクが出土している。

#### [SH04・H05] 図16

X=29476.000、Y=-6864.000に位置し、黒色砂層に構築される。SH01と重複するが、前後関係は不明である。掘り方はなく、人頭大～一抱え程の大きさの円礫を不規則に配置するだけで、組み合わせたり重ねたりはしていない。配石遺構としたが、明瞭な構造を示さないで、遺構だとも断定できない。帰属が確実な遺物はない。

#### [SH06] 図15、写真PL 8

X=29476.000、Y=-6873.000に位置し、黒色砂層中に構築される。独立した配石遺構だと判断したが、SB01の柄部の一部である可能性は残る。

拳大～人頭大の円礫を径90cm程度の範囲に上面がそろった状態で検出した。そのうちの小形の礫を除去したところ、人頭大の大形礫4点を立ててコの字形に配置し、その内部に扁平礫を敷き詰めた下部構造を検出した。この下部構造が本来の配石遺構で、上部の小形礫は投入されたにすぎないようだ。掘り方は検出できなかったが、外周の大形礫を立てていることからして、掘り方があったものと推測する。外周の大形礫に隣接して、土器の底部(図15-2)が置かれていたが、SH06に帰属するとは限らないだろう。

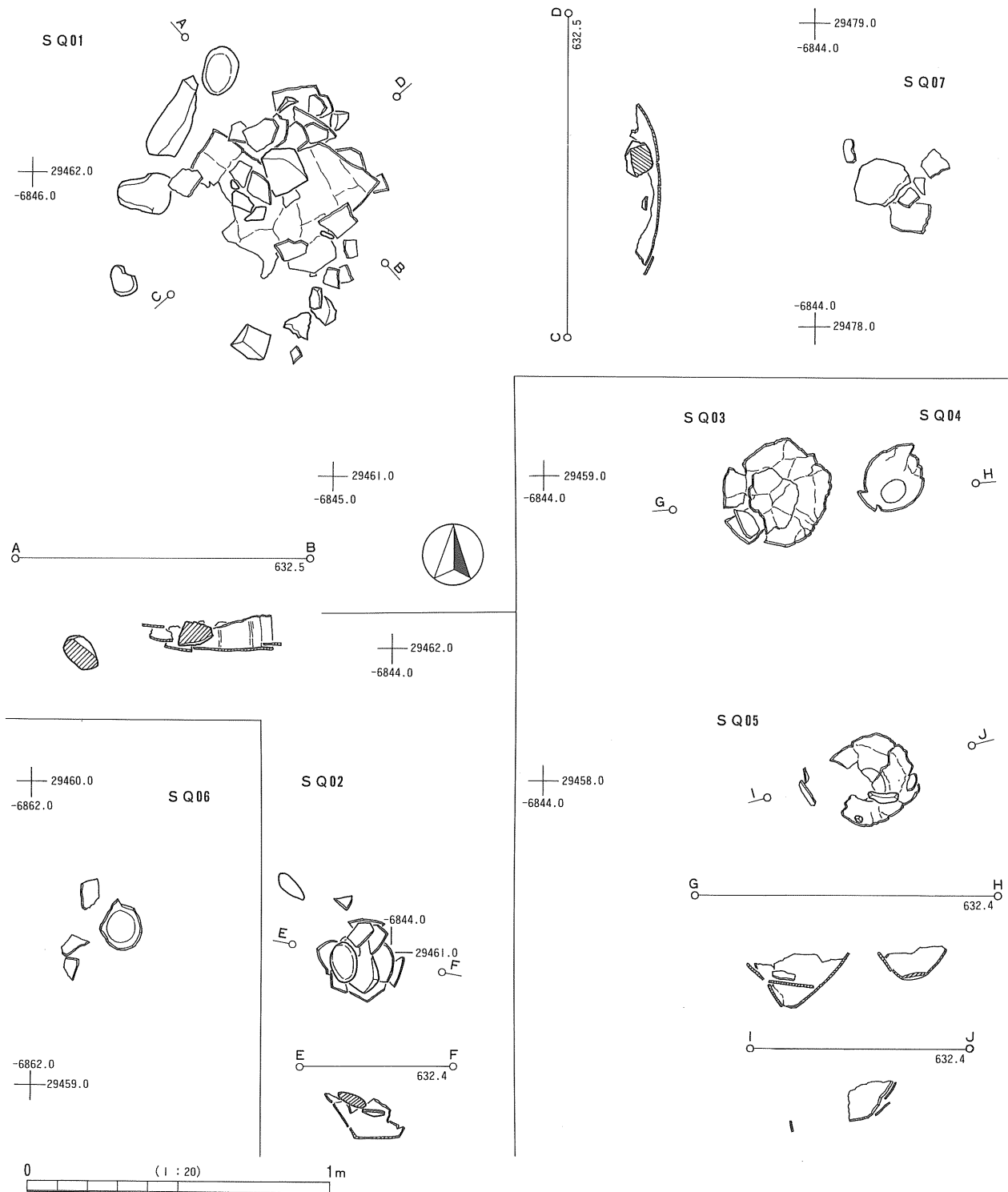


図17 S Q群実測図 (1:20)

[SH07] 図16、写真PL 8

X=29474.000、Y=-6865.000に位置し、SH01と重複する。黒色砂層中に構築される配石遺構である。人頭大から一抱えもあるような大形礫と拳大程度の小形礫を、110cm~80cm程の範囲に不規則に集中させているが、特別な構造は読み取れず、掘り方も存在しない。外見上はSH02とあまり変わらないが、明白な遺構だとも断定できない。帰属する遺物は石器No.53の磨石類1点だけである。

[SH09] 図16、写真PL 8

X=29468.000、Y=-6858.000に位置し、黒色砂層中に構築される配石遺構である。径1m程の円形に、拳

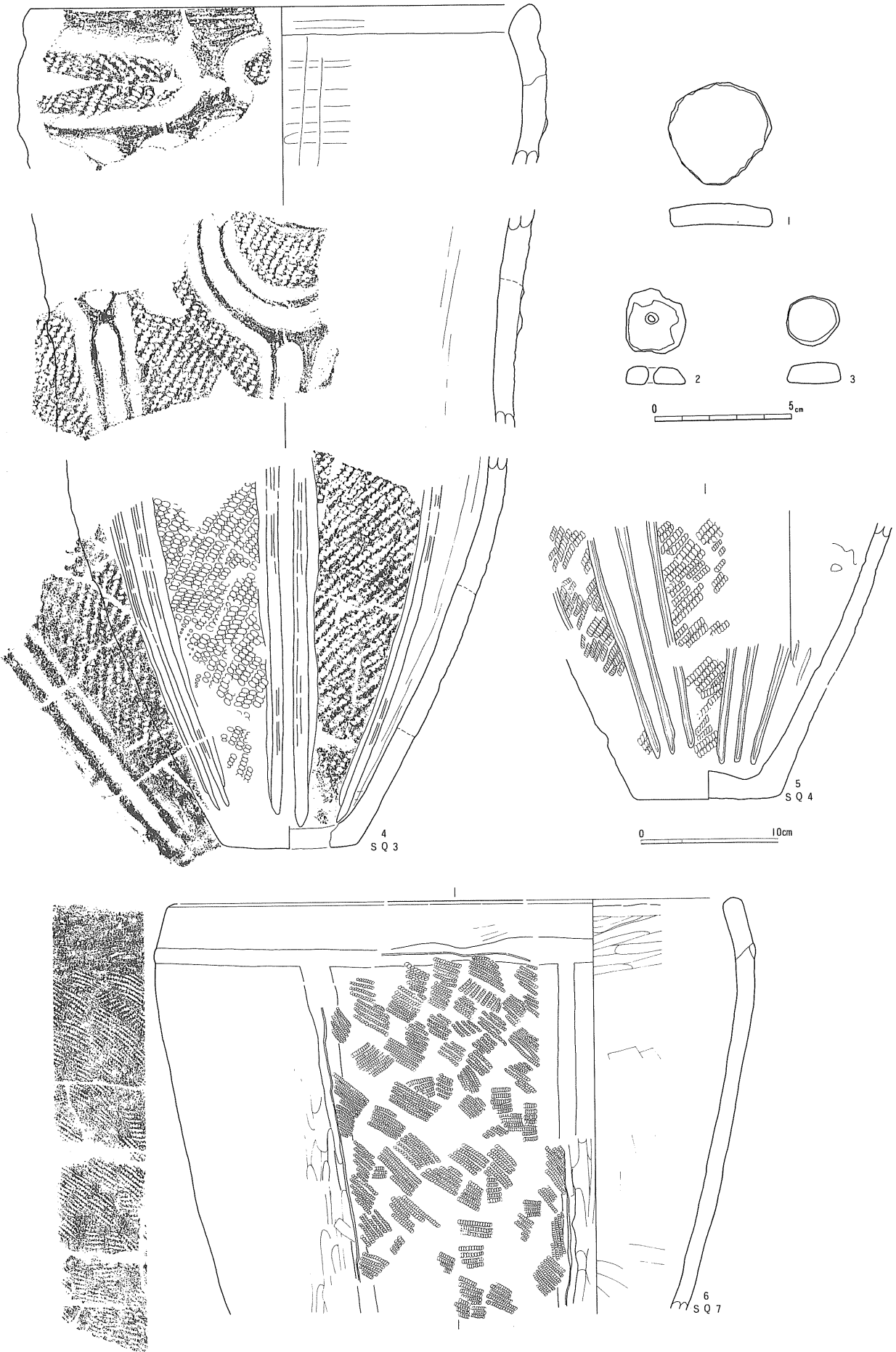


図18 SQ群出土土器実測図1 (1:4), 遺構外出土土製品実測図(1:2)

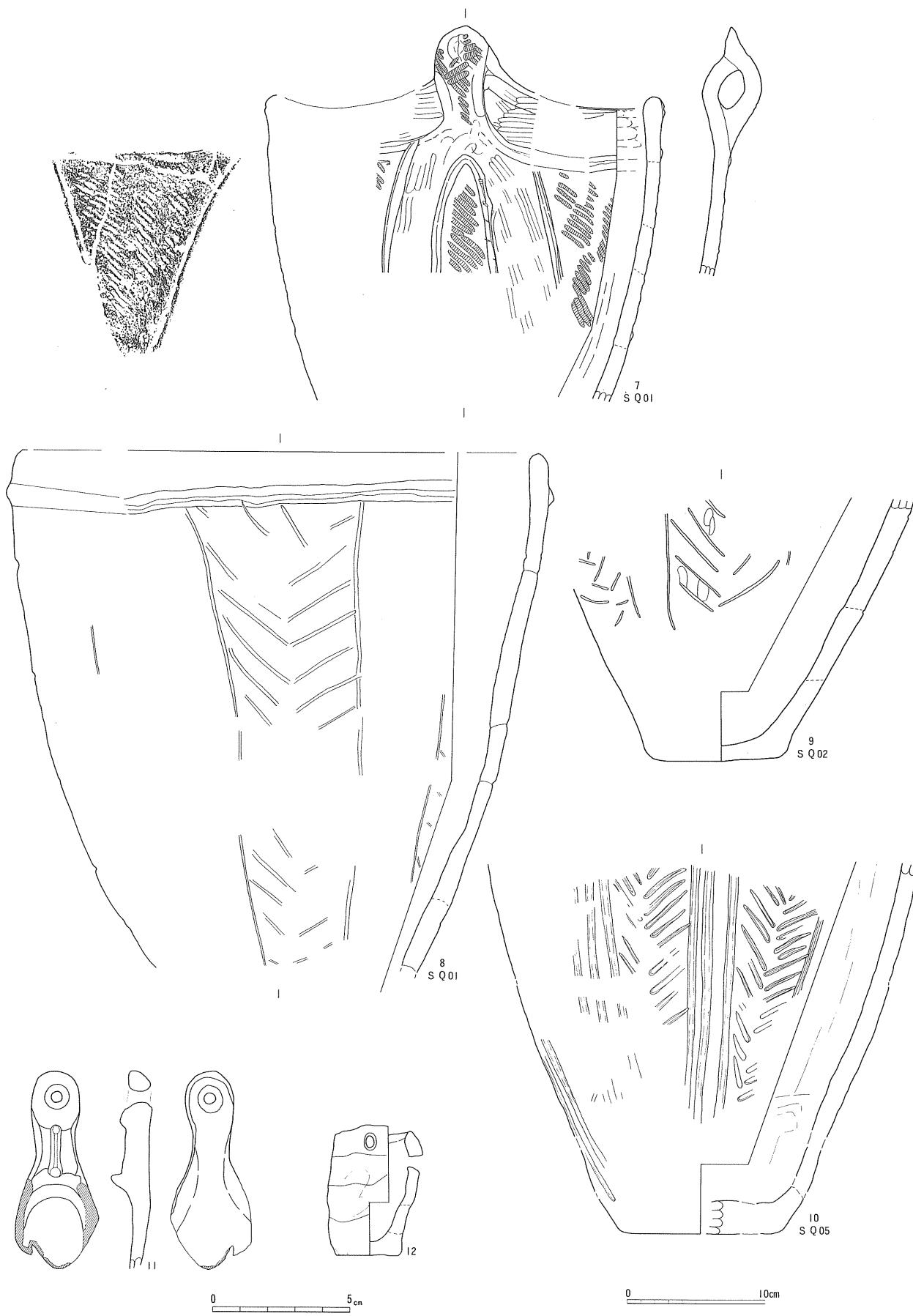


图19 S Q群出土土器实测图 2 (1 : 4), 遺構外出土土製品实测图 (1 : 2)

大の偏平円礫を上面をそろえて隙間なく敷き詰める。単純な構造で、下部構造も検出できなかったが、意図的な配置なので、配石遺構である事は間違いない。あるいは上部構造が破壊されているのかもしれない。確実な帰属遺物はない。

## SQ群

[SQ1～5] 図17～19、写真PL8

X=29460.000、Y=-6843.000付近に位置し、水田床土直下で検出した、黒色砂層中から灰褐色砂層に掘り込む埋設土器である。敷石住居などに伴う埋甕の可能性が高いが、上部構造は完璧に失われてしまっている。敷石住居の施設ならば、2棟程度の住居が重複して構築されていた可能性があるが、事実関係は憶測の域を出ない。SQ1は図19-7と8で加曽利E4式と唐草文4段階、SQ2は図19-9で唐草文4段階、SQ3は図18-4、SQ4は図18-5、SQ5は図19-10で、ともに加曽利E3式である。SQ2から石器No.47～48の磨製石斧・打製石斧各1点が伴出している。

[SQ6] 図17

X=29460.000、Y=-6862.000に位置し、黒色砂層中に残される土器で、埋置なのかどうかはわからない。整理作業中に行方不明となり図示できない。このほか石器No.49の磨製石斧が1点伴出している。

[SQ7] 図17・19

X=29479.000、Y=-6844.000に位置し、黒色砂層中に残される土器で、埋置されたのかどうかは不明である。図18-6がそれで、加曽利E4式であろう。

## 遺構外出土遺物

土器片はコンテナに20箱程度あるが省略し、土製円板、匙状土製品とミニチュア土器(図18-1～3, 図19-11・12)を掲載した。石器はコンテナに5箱程度、石材も2箱程度ある。石器はNo.54～123で、ツールはすべて一覧表と写真に掲載した。打製石斧の圧倒的な多さと、横刃形石器や粗大石匙など八ヶ岳西南麓を特徴付ける石器がほとんど存在しないことに注目したい。

表1 遺構別石器一覧

遺構	No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	形態・使用痕・欠損、	PL
SB01	1	打製石斧	粘板岩	15.8	8.6	1.7	227.0	撥形、平刃、完形、磨耗なし	13
	2	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 6.0 ]	[ 5.3 ]	[ 1.4 ]	[ 67.5 ]	撥形、刃・基折れ欠損、炉内出土、	13
	3	磨石類	安山岩	13.1	8.0	3.5	545	偏平棒状、表裏に凹みa1ヶずつ、完形	16
	4	磨石類	安山岩	9.9	8.4	4.9	650	偏球形、凹みa・磨面1面、炉内出土	16
	5	丸石	安山岩	7.4	6.8	5.9	420	球形、加工不明	20
黒曜石フレイク1点：0.6g、打製石斧フレイク1点：53.6g、打製石斧素材フレイク1点：5.2g									
SB02	6	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.3	0.9	無茎凹基、完形、埋甕内出土	12
	7	石錘	黒曜石	2.2	1.1	0.5	1.2	やや偏平な棒状、完形、埋甕内出土	12
	8	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.4	4.6	1.7	114.0	短冊形、円刃、完形、磨耗なし	13
	9	磨石類	安山岩?	[ 13.1 ]	7.6	4.2	[ 745 ]	敲打整形の直方体、表裏に凹みb1ヶずつ表面磨耗、被熱劣化、取り上げ時に欠損	16
黒曜石残核1点：0.8g、黒曜石フレイク5点：7.2g、チャートフレイク1点：4.6g、打製石斧素材フレイク1点：64.2g									
SB07	10	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.6	無茎凹基、鋸歯状側縁、完形	12
	11	小剥離剥片	黒曜石	3.3	1.7	0.5	2.6	小剥離連続長18mm、炉内出土	12
	12	残核	黒曜石	3.1	2.4	1.2	8.7	床面出土	12

遺構	No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	形態・使用痕・欠損、	PL
	13	残核	黒曜石	4.2	2.6	1.1	12.6		12
	14	磨製石斧	硬砂岩?	[ 3.5]	2.5	0.9	[ 14.9]	小形定角形、平刃、基部折れ欠損	12
	15	磨製石斧	緑色変岩	[ 15.3]	[ 7.0]	[4.3]	[ 740 ]	乳棒状 全面敲打整形、刃・基部剥離欠損	12
	16	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 12.5]	3.6	1.8	[ 119 ]	短冊形、略完形、刃部剥離欠損、磨耗なし	13
	17	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 8.7]	[ 5.1]	1.7	[ 55 ]	撥形、刃・基部剥離欠損	13
	18	石皿	安山岩	[ 18.0]	[25.8]	7.1	[5100]	平面方形に整形、側縁敲打整形 機能面剥離整形、折れ半欠	18
	19	台石	砂岩?	22.3	19.2	5.6	3300	偏平未整形、両面敲打痕少々、完形	20
	20	磨石類	安山岩	12.3	9.5	5.6	1085	偏球形、表裏磨耗著、両側端打痕著、完形	16
	21	磨石類	安山岩	8.4	7.3	6.0	595	球形、2面磨耗、完形	16
	22	磨石類	閃緑岩?	10.2	[ 7.8]	[5.7]	[ 660 ]	偏球形、2面磨耗、被熱剥落著	16
	23	磨石類	安山岩	8.4	7.6	6.3	675	不整形球形、2面磨耗、凹みa 1ヶ、完形	17
	24	磨石類	安山岩	14.2	7.4	4.2	640	偏平棒状、表凹みa 1ヶ、裏凹みa 3ヶ・b 1ヶ、完形	17
	25	磨石類	安山岩	14.9	8.5	4.7	1005	偏平、表裏面磨耗、完形	17
	26	丸石	安山岩	7.7	7.3	6.7	520	球形、完形	20
	27	丸石	安山岩	8.0	7.2	6.8	420	球形、完形	20
	28	丸石	安山岩	6.7	5.3	4.7	210	球形、完形	20
黒曜石フレイク5点：13.6g、打製石斧フレイク6点：118.2g、打製石斧素材フレイク10点：191.1g、									
SB08	29	残核	黒曜石	1.6	1.5	1.1	3.2	不定形	12
	30	打製石斧	硅質粘板岩	[ 9.7]	5.1	1.5	[ 103.3]	短冊形、刃部剥離欠損・略完形、	13
	31	打製石斧	安山岩	[ 10.7]	[ 6.7]	2.8	[ 285.5]	短冊形?、刃・基部折れ欠損	13
	32	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.5	7.6	2.0	208.2	三角形未整形素材、片面自然面、磨耗不明、完形、	13
	33	打製石斧	安山岩	[ 7.5]	5.3	2.4	[ 117.7]	短冊形、基部折れ欠損、刃端磨耗	13
	34	磨石類	安山岩	12.8	10.1	4.7	930	偏平、表裏2面磨耗著、片面凹a 2ヶ、側面打痕	17
	35	磨石類	安山岩	9.8	9.1	4.6	540	偏平、表面磨耗と凹a 1ヶ、裏面剥離痕著	17
	36	磨石類	安山岩	9.6	7.5	5.2	630	偏球形、1面磨耗、別面剥離痕	17
黒曜石フレイク1点：2.6g、チャートフレイク2点：7.5g、打製石斧フレイク5点：124.0g、打製石斧素材フレイク：350.5g、									
SB11	37	調整剥片	黒曜石	2.7	2.5	0.9	4.4	背面側調整剥離、	12
	38	磨製石斧	?	[ 12.7]	5.3	3.1	[ 360 ]	定角、刃部剥離欠損、略完形	12
	39	打製石斧	粘板岩	[ 4.7]	[ 5.0]	[1.4]	[ 33.2]	形態不明、刃・基折れ欠損、取上No4	13
	40	石皿	安山岩	[ 16.2]	[15.1]	7.8	[2300 ]	表面剥離整形、裏面敲打整形、折れ欠損	19
	41	石皿	安山岩	24.5	17.9	10.7	6600	表面敲打整形、裏面多孔石、完形	19
	42	磨石類	安山岩	8.4	8.0	6.2	430	球半割形、1面を平坦に整形し研磨、完形	17
	43	磨石類	閃緑岩?	10.6	6.8	6.0	690	偏球形、全周被熱剥落し形態不明	17
	44	丸石	安山岩	6.0	6.0	5.7	270	球形	20
	45	石棒	緑色変岩	[ 21.8]	[ 5.4]	[4.1]	[ 885 ]	敲打整形、断面楕円形、頭部折れ欠損、	17
打製石斧フレイク3点：121.4g、打製石斧素材残核2点：1220g、打製石斧素材フレイク7点：443.5g									
SK02	46	磨石類	安山岩	[ 7.5]	8.4	3.8	[ 365 ]	偏平、表裏磨耗、折れ欠損	17
SK03	打製石斧素材フレイク4点：130.0g								
SK04	黒曜石フレイク1点：3.5g、打製石斧フレイク1点：10.5g、打製石斧素材フレイク1点：105.6g								
SQ02	47	磨製石斧	?	3.9	1.4	0.7	7.6	定角、片刃、完形	12
	48	打製石斧	安山岩?	[ 8.8]	[ 5.6]	1.4	[ 89.1]	形態不明、基部尖る、刃部折れ欠損	13
SQ06	49	磨製石斧	?	[ 3.7]	[ 3.1]	1.7	[ 21.4]	定角、刃部折れ欠損	12



## 3 調査結果

遺構	No.	器種	石材	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	形態・使用痕・欠損、	PL
SH02	50	磨石類	安山岩	9.5	8.1	5.9	570	偏球形、1面に凹みb	17
	51	磨石類	安山岩	16.8	7.9	3.6	735	偏平棒状、表面磨耗凹a連続、裏面凹b3ヶ・剥離痕1	18
チャートフレイク1点：3.2g、									
SH03	52	台石	安山岩	[ 15.2 ]	15.8	6.4	[ 2200 ]	偏平、表裏表面のみ剥落、折れ欠損	20
	打製石斧フレイク3点：131.9g、打製石斧素材フレイク1点：375g (横剥剥片)								
SH07	53	磨石類	安山岩	10.9	9.4	5.9	920	偏球形、表面凹b2ヶ、裏面凹b1ヶ	18
遺構外	54	石鏃	チャート青	3.0	2.4	0.5	4.3	無茎円基、完形	12
	55	石鏃	チャート赤	2.0	1.6	0.5	1.3	無茎平基、完形	12
	56	ピエスエスキーユ	黒曜石	2.9	1.4	0.7	2.7	完形	12
	57	ピエスエスキーユ	黒曜石	2.1	0.9	0.4	0.8	完形	12
	58	ピエスエスキーユ	黒曜石	1.7	1.6	0.6	1.7	完形	12
	59	スクレイパー	黒曜石	[ 2.0 ]	[ 2.0 ]	[ 0.8 ]	[ 2.7 ]	形態不明、スクレイパーエッジのみ残	12
	60	調整剥片	黒曜石	1.3	1.2	0.6	0.9	腹面調整剥離、	12
	61	磨製石斧	?	3.2	1.9	0.5	5.8	小形定角、平刃、完形	12
	62	磨製石斧	硬砂岩	[ 11.3 ]	5.7	3.4	[ 480 ]	定角、円刃、基端欠損、略完形	12
	63	磨製石斧	硬砂岩	[ 6.1 ]	5.0	[ 2.3 ]	[ 10.4 ]	定角、円刃、基端折れ欠損	12
	64	磨製石斧	?	[ 12.4 ]	5.1	1.9	[ 210.5 ]	定角、刃部全面剥離欠損、欠損後刃潰れ	12
	65	打製石斧	安山岩	[ 4.9 ]	[ 7.1 ]	1.1	[ 53.2 ]	撥形、刃基とも折れ欠損	13
	66	打製石斧	安山岩	[ 6.6 ]	[ 4.2 ]	1.7	[ 85.4 ]	?形、刃基とも折れ欠損	13
	67	打製石斧	千枚岩質粘板岩	12.8	6.3	1.9	239.1	撥形、円刃、刃部片面磨耗著、完形	13
	68	打製石斧	粘板岩	9.6	5.9	1.2	74.5	撥形、円刃、刃端稜のみ磨耗、完形	14
	69	打製石斧	千枚岩質粘板岩	10.6	4.8	1.9	[ 144.8 ]	撥形、平刃、刃端磨耗著、刃部剥離欠損、略完形	14
	70	打製石斧	粘板岩	10.3	5.0	2.0	121.6	撥形、円刃、片面刃部寄り広範に磨耗著、完形	14
	71	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.4	6.0	1.7	[ 119.8 ]	撥形、刃部剥離欠損、略完形	14
	72	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 4.0 ]	[ 3.9 ]	1.4	[ 20.2 ]	?形、折れ欠損側縁残	14
	73	打製石斧	安山岩	11.5	5.8	2.1	[ 149.8 ]	撥形、円刃、部分磨耗再加工、基部折欠損	14
	74	打製石斧	K S 質粘板岩	12.1	5.1	1.8	125.8	撥形、平刃、磨耗なし、完形	14
	75	打製石斧	千枚岩質粘板岩	9.8	5.4	1.6	76.5	撥形、斜刃、刃部先端のみ磨耗、再加工した完形	14
	76	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 8.4 ]	[ 4.9 ]	[ 0.9 ]	[ 38.5 ]	?形、剥離欠損した剥片	14
	77	打製石斧	硬砂岩	[ 7.7 ]	[ 5.2 ]	[ 2.1 ]	[ 74.0 ]	分銅形?、刃部剥離欠損、縦折れ欠損	14
	78	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 9.5 ]	7.7	1.9	[ 159.3 ]	撥形、平刃、片面刃部磨耗、基部折れ欠損	14
	79	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 7.6 ]	4.3	1.2	[ 68.0 ]	短冊形、刃・基折れ欠損	14
	80	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 5.2 ]	4.4	1.1	[ 40.4 ]	短冊形、刃・基折れ欠損	14
	81	打製石斧	硬砂岩	[ 6.9 ]	[ 6.3 ]	1.6	[ 95.1 ]	?形、平刃、刃磨耗なし、縦折れ欠損	14
	82	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 9.7 ]	[ 5.3 ]	[ 0.9 ]	[ 59.7 ]	?形、剥離欠損の剥片	15
	83	打製石斧	?	[ 3.1 ]	[ 3.6 ]	[ 1.2 ]	[ 19.8 ]	?形、刃折れ欠損、縦折れ欠損	15
	84	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 6.5 ]	5.6	1.6	[ 78.8 ]	短冊形、平刃、片面刃部磨耗著、基折欠損	15
	85	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.0	[ 6.2 ]	[ 1.5 ]	[ 106.0 ]	撥形、平刃、刃部剥離欠損、略完形	15
86	打製石斧	安山岩	[ 3.6 ]	[ 4.9 ]	[ 1.6 ]	[ 30.2 ]	?形、剥離欠損の基端残	15	
87	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 5.3 ]	[ 4.0 ]	[ 1.3 ]	[ 34.2 ]	?形、刃・基折れ欠損	15	
88	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 9.1 ]	5.4	1.5	[ 72.8 ]	撥形、側刃磨耗、刃・基斜剥離欠損、略完形	15	
89	打製石斧	安山岩	[ 10.0 ]	[ 6.2 ]	1.8	[ 169.0 ]	?形、刃折れ欠損	15	
90	打製石斧	?	[ 7.2 ]	5.0	1.8	[ 91.9 ]	撥形、刃折れ欠損	15	
91	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.8	4.8	1.5	105.4	短冊形、平刃、片面刃部寄り磨耗著、完形	15	
92	打製石斧	千枚岩質粘板岩	6.6	3.6	1.2	33.0	短冊形、平刃、側刃磨耗、完形	15	

遺構	No.	器種	石材	長さcm 幅cm 厚さcm 重さg	形態・使用痕・欠損、	PL
	93	打製石斧	安山岩	[ 7.1] [ 5.3][1.6][ 90.3]	短冊形、刃・基折れ欠損、縦折れ欠損	15
	94	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 6.7] [ 4.9][1.1][ 48.3]	?形、刃折れ欠損、縦折れ欠損	15
	95	打製石斧	?	[ 4.0] [ 3.5] 1.8 [ 28.6]	?形、刃・基折れ欠損、縦折れ欠損	15
	96	打製石斧	?	[ 5.5] [ 4.7] 0.8 [ 34.3]	?形、刃・基折れ欠損、縦折れ欠損	15
	97	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 4.1] 3.0 0.9 [ 14.5]	短冊形、刃剥離欠損、基折れ欠損	15
	98	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 4.0] [ 3.7][0.7][ 10.5]	?形、折れ欠損側縁部残	15
	99	打製石斧	粘板岩	[ 5.5] 3.5 2.0 [ 38.3]	?形、全部位剥離欠損側縁残	15
	100	打製石斧	硬砂岩	[ 12.7] [ 7.1] 1.6 [ 183.3]	?形、主軸斜め、基無加工、基折れ欠損	16
	101	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 2.8] [ 3.6][0.8][ 11.1]	?形の碎片、3方折れ欠損	16
	102	打製石斧	緑色変岩	8.4 3.1 1.4 52.0	撥形、平刃、磨耗なし、完形	16
	103	打製石斧	千枚岩質粘板岩	11.4 6.4 1.6 168.9	撥形、斜刃、主軸斜め、基無加工、完形	16
	104	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 7.0] 4.2 [1.5][ 53.1]	?形、基磨耗、刃剥離欠損	16
	105	打製石斧	安山岩	[ 6.8] [ 5.3] 1.3 [ 71.9]	短冊形、基無加工、刃折れ欠損	16
	106	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 3.8] [ 4.1][1.0][ 16.0]	?形、刃折れ欠損、基剥離欠損	16
	107	打製石斧	粘板岩	[ 6.1] [ 4.3] 1.9 [ 61.6]	撥形、側縁抉り、刃折れ欠損、基剥離欠損	16
	108	打製石斧	硬砂岩	[ 5.4] [ 6.2] 1.4 [ 55.3]	?形、刃折れ欠損、	16
	109	打製石斧	千枚岩質粘板岩	[ 10.6] 5.0 1.4 [ 95.3]	撥形、斜刃、主軸斜め、基折れ欠損	16
	110	打製石斧	安山岩	[ 6.4] [ 3.9] 1.8 [ 41.8]	?形、折れ欠損、縦折れ欠損、SB03出土	
	111	粗大石匙	?	4.9 3.9 1.1 19.9	横形、外湾刃、つまみ部抉り、完形	15
	112	石皿	安山岩	[ 10.1] [11.2][5.3][ 590 ]	表面側縁付き、側面敲打整形、皿部平坦で磨耗、裏面筋砥石3条、折れ欠損	19
	113	磨石類	硬砂岩	[ 9.1] [ 5.3][6.2][ 275 ]	形態不明、1面磨耗、1端剥離痕、欠損碎片	18
	114	磨石類	安山岩	10.2 6.4 2.6 245	偏平、表面凹b1ヶ	18
	115	磨石類	安山岩	[ 7.1] [ 7.3] 3.0 [ 250 ]	偏平、表裏磨耗、折れ欠損	18
	116	磨石類	安山岩	[ 8.7] [ 5.0][2.8][ 130 ]	形態不明、凹a、剥離欠損碎片	18
	117	磨石類	安山岩	[ 7.6] [ 9.4] 2.9 [ 315 ]	偏平、表面凹a、折れ欠損	18
	118	磨石類	安山岩	10.7 7.3 4.6 530	偏平、1面敲打整形	18
	119	磨石類	安山岩	15.3 5.2 4.4 595	角棒状、2面磨耗と凹a	18
	120	丸石	安山岩	6.0 5.7 4.4 225	球形	20
	121	多孔石	安山岩	15.7 14.0 13.6 4200	円柱状に整形、全周多孔、SD01出土	21
	122	台石	安山岩	[ 18.3] 19.6 6.0 [3000 ]	偏平、表面剥離整形、折れ欠損、SD01出土	20
	123	原石	黒曜石	39.5	SB09出土	12
<p>黒曜石フレイク32点：82.2g、チャートフレイク8点：23.6g、打製石斧素材石核1点：360g、打製石斧素材残核2点199.6g、打製石斧フレイク18点：311.9g、緑色変岩フレイク2点：25.8g、打製石斧素材フレイク70点：1851.6g</p>						

注1 石材の材質鑑定者は、長野県埋蔵文化財センター調査研究員、川崎保である。KS質粘板岩は硅質千枚岩質粘板岩の略である。

注2 []付の計測値は、欠損品の残存数値である。

注3 磨石類の「凹a」「凹b」は八木光則の分類を踏襲した。

参考文献：八木光則1976「いわゆる特殊磨石について」『信濃』28-4 信濃史学会

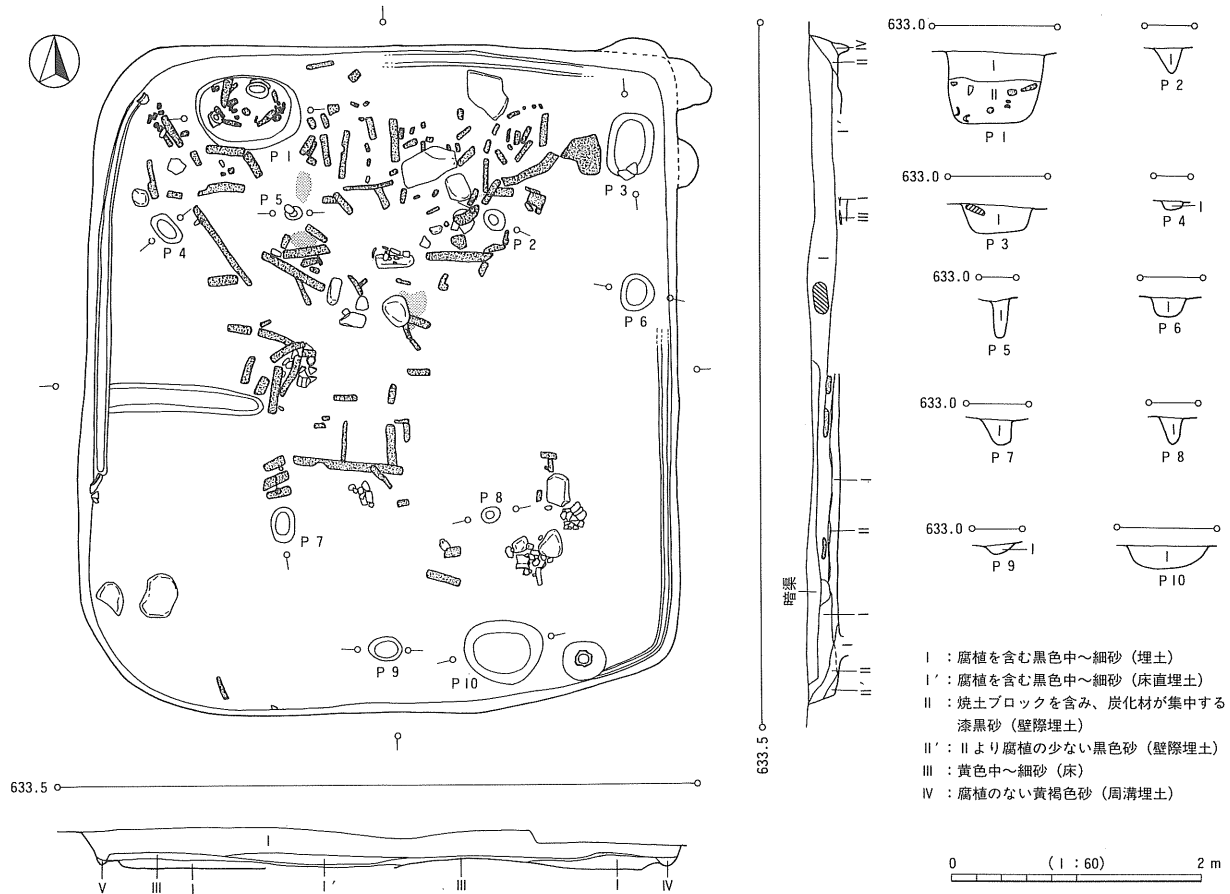


図20 SB03実測図 (1:60)

(2) 古墳時代

段丘平坦面から緩傾斜面にかけて、2 mほどの間隔を空けて弧状に並んだ竪穴住居3棟が確認できたが、それ以外の遺構はないので、これだけでは集落の配置はわからない。SB03とSB05は構造だけでなく、遺物遺存状況や焼失状況も似ている。

SB03 図20・21、写真PL9・24

X=29467.000、Y=-6855.000に位置する竪穴住居である。基本土層IV層中で検出したが輪郭が不安定なので、最終的には基本土層VII層上面で検出した。平安時代の竪穴住居SB04に切られ、縄文時代の土坑SK20を切るが、いずれも平面で確認できた。竪穴の堀方の平面形はほぼ正方形で、軸は南北方向に一致し、南北5.3m、東西4.7mを測る。堀方は検出面から25cmほどあり、5cm以上床を貼っているので、床面までの深さは20cm程度となる。壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源の砂質黒褐色土で、基本的には単層だが壁際に埋没した崩落土は分層できる。それ以外は部分的なブロックだ。

床は堀方を埋め戻した上に、基本土層VII層起源と見られる黄色の砂質土を叩き締めている。北東側ほど良好で、南西側は床が薄い。床面施設は周溝とピットがある。周溝は南辺を除いてほぼ存在し、深さ1～6cm、間仕切り溝状にのびる部分もある。ピットは10基、柱穴に好都合な位置にあるのはP2・P5・P7・P8だが、直径がやや小さく、深さも不足する。堀方でなく柱材を打ち込んだのならこれでも役立つかもしれない。東北隅のP1は大規模で遺物も入っており、貯蔵穴と推測する。東辺のP6や南辺のP9は出入口施設に好都合な位置にあるが、やや浅すぎるのが難点だ。住居中央の床面がわずかに焼土化しているが、炉というには貧弱に過ぎる。

床直上には炭化材が大量に残されており、焼失住居と断定してよい。ただ、材の配置は規則的でなく、

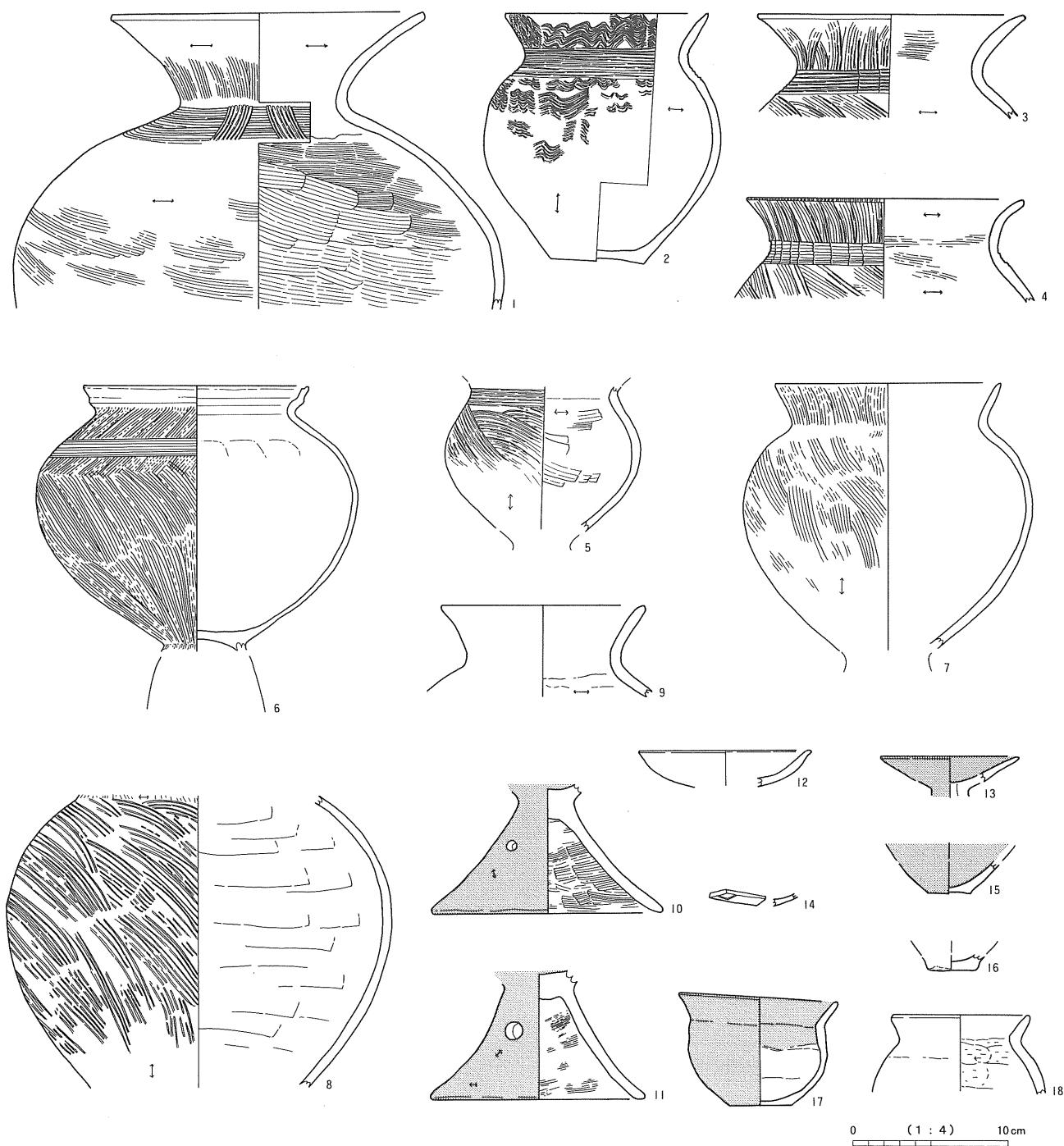


図21 SB03出土土器実測図(1:4)

上屋の構造を反映してくれるような残り方では無かった。南東隅の床面からは下半を欠いた壺(図21-1)が正位に置かれて出土し、大きな円礫も出土している。

出土遺物は土器に限られる。1~5は箱清水式土器の系譜を引く土器群、6~18は他地域に系譜が求められる土器群である。出土状況に相違は無いので、両者は一括資料として捉えることができる。

壺1のT字文は3単位。平底甕2~4は櫛描文を施し、3~4の口縁部では縦位に、胴部を左上がりの斜走文で充填する。施文順位は①口縁・胴部→②頸部簾状文。5は小型台付甕で文様は3~4と同様。

S字状口縁台付甕6は頸部内面をナデ調整し、その外面に沈線が入らない。口唇端部を上位から押さえている。7・8はハケ調整甕で、7は台付甕と想定される。いずれも外面下位に粗い縦ミガキを施すが、内面にミガキは認められない。9は広口壺で、内外面にミガキ調整を施す。

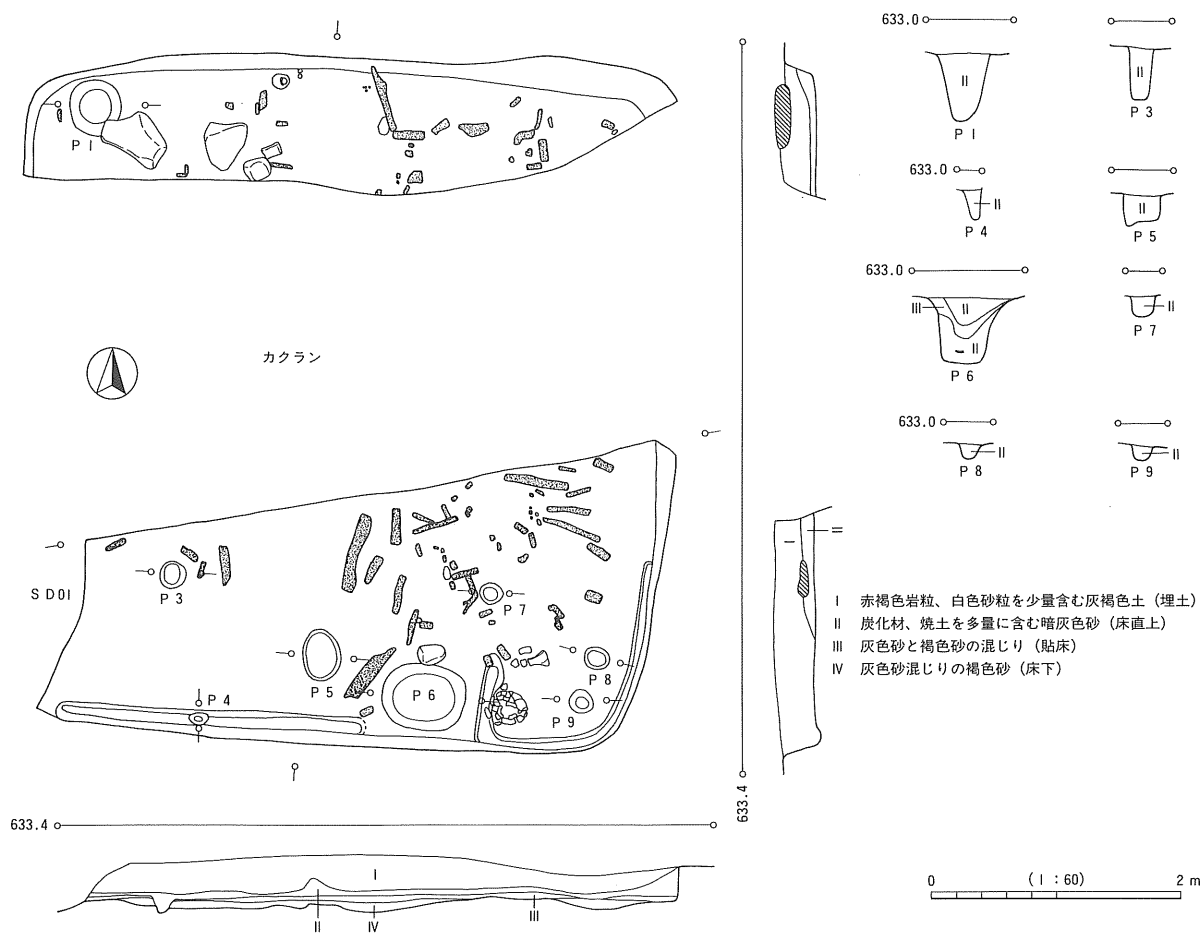


図22 SB05実測図(1:60)

10~11は高杯あるいは小型器台の脚部。12~13は小型器台杯部。12は精製土器で、端部はS字甕と同様に上位からオサエを施す。14は小型高杯の杯部細片と想定され、山形沈線文と思われる文様の一部が認められる。12と同様に精製土器。15~16は小型土器。15は鉢を範型とする。16はナデ調整。17は小型器台とセットになる精製鉢。18はナデ調整の小型壺で、内面に軽いケズリを施す。図示部分がほぼ完存する個体は、1~4・6・10・11・17である。

#### SB05 図22・23、写真PL10・24

X=29470.000、Y=-6865.000に位置する竪穴住居である。大規模な攪乱溝の埋没土を除去途中にその断面で発見した。平面的には盛土層を除去し、基本土層VII層上面で検出した。中央を攪乱溝で切断されており、詳細は不明瞭である。縄文時代の土坑SK06を切り、時期不明の流路SD01に切られるが、いずれも平面で確認できた。位置関係から見て縄文時代のSB11を切るはずだが、確認はできなかった。

竪穴の堀方の平面形はほぼ正方形で、軸は南北方向に一致し、南北5.5mを測り、東西は5.2mと推定される。堀方は検出面から45cmほどあり、15cm以上床を貼っているので、床面までの深さは30cm程度となる。壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源の砂質黒褐色土で、基本的には単層だが、床面の炭化材の影響で暗色化した下半は外見上は分層できる。また壁際に埋没した崩落土も分層できる。

床は堀方を埋め戻した上に、基本土層VII層起源と見られる黄色の砂質土を叩き締めており、全体的に良好である。

床面施設は周溝とピットがある。周溝は南辺から南東隅にかけて確認でき、深さ2~7cmほどである。間仕切り溝状にのびる部分もある。ピットは9基だが損壊が著しいので本来はもっと多かつたろう。柱穴に好都合なのはP3とP7だがP7は浅すぎるかもしれない。P6は大規模で深く、貯蔵穴と推測される。P1

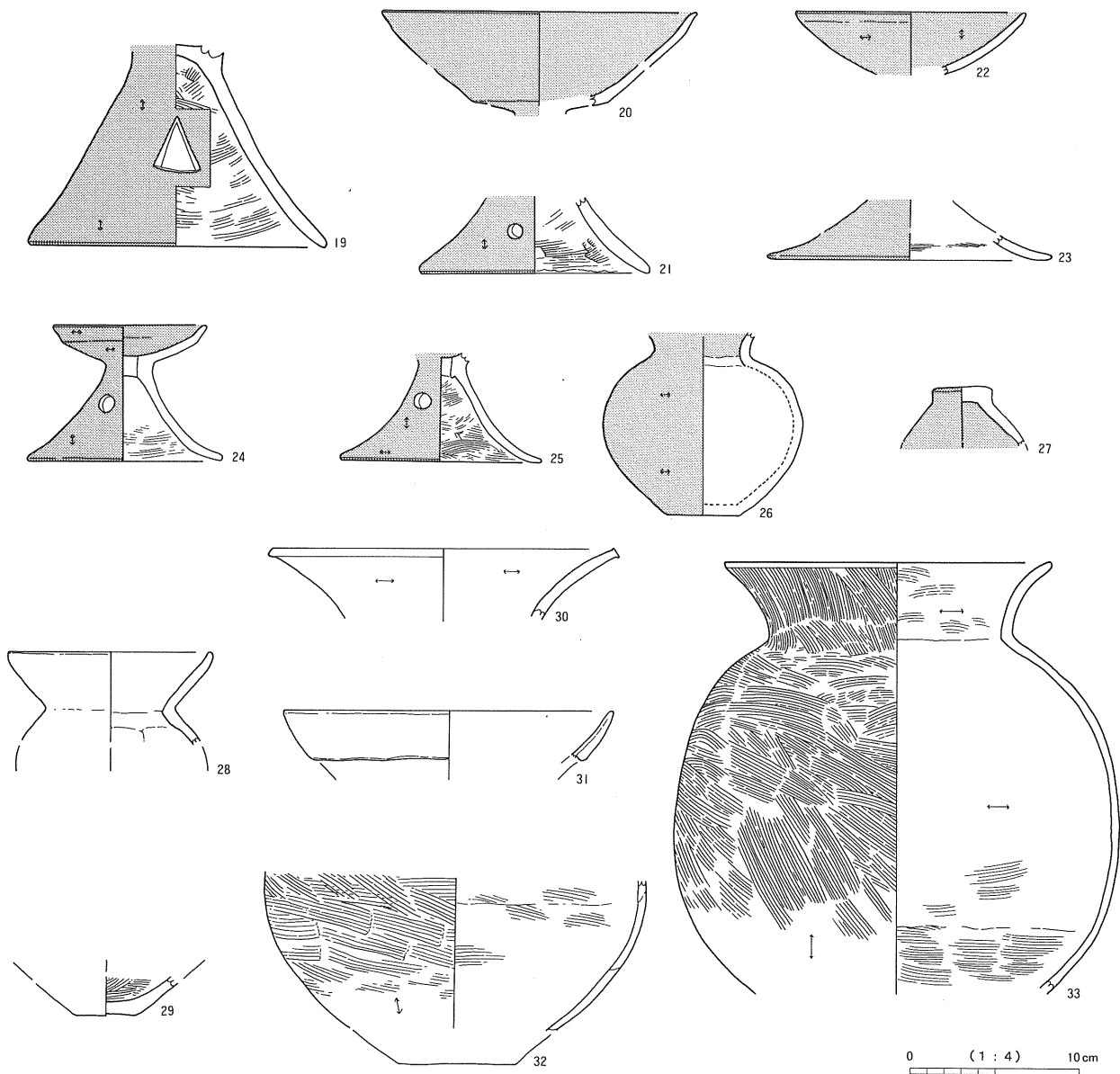


図23 SB05出土土器実測図(1:4)

も大きい。P5は入り口施設の可能性がある。P8とP9は出入り口施設の可能性がある。

床直上は炭化材が大量に残されており、焼失住居と断定してよい。SB03よりも一層炭化が進んでおり、上屋の構造は反映されない。南東隅の床面からは下半を欠いた甕(図23-33)が正位に置かれて出土したが、これにSB03出土破片が接合した。その周辺には出土遺物が多い。

出土遺物は土器に限られる。箱清水式の系譜を引く土器は、19の高杯脚部1点のみである。他の20~33は、箱清水式土器から系譜を追えない土器群であるが、赤彩、ミガキ手法等に折衷的要素も認められる。

赤色塗彩を施す器種には高杯(19~21)・小型高杯(22~23)・小型器台(24~25)・ひさご壺(26)・蓋(27)がある。19の三角形透し孔は4孔。20は欠山系高杯で、赤色塗彩を施すという特徴がある。22は杯部に稜をもたない碗形を呈す。小型器台24は杯端部に有段部をもち、佐久市・瀧ノ峯墳丘墓出土の類例と比較すると、型的的に新しい。24・25の透し孔は3孔。ひさご壺26は肩がやや張った胴部を呈し、底部は平底で、赤彩ミガキ技法を胴部にも施す。27は端がやや内彎する蓋。

非赤彩系の器種には、壺(28~31)・甕(32~33)がある。28は球胴を呈する小型壺で、その系譜は中島式が借用した東海系土器に求めることができよう。30は広口壺、31は折り返し口縁壺の口縁端部である。

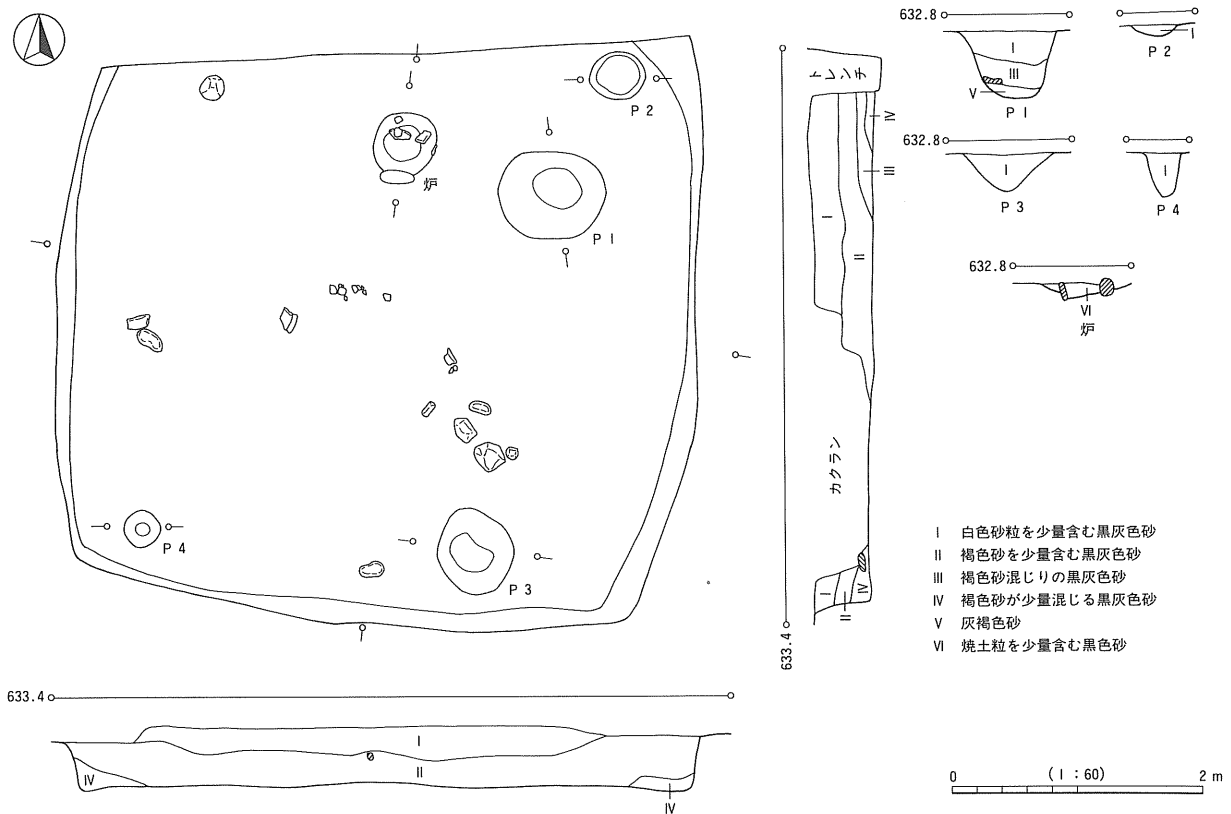


図24 SB09実測図 (1:60)

28～31はいずれも精製にミガキを施す。32、33はハケ調整甕である。いずれも胴下半部外面に粗い縦ミガキを施すが、内面は横ハケ後ナデ調整で、ミガキを施すことはない。ハケ調整甕のミガキ手法は、当地域における在来と外来の折衷要素である。図示部分がほぼ完存する個体は、19・24・26・33である。

SB09 図24・25、写真PL9・10

X=29477.000、Y=-6850.000に位置する竪穴住居である。基本土層IV層中で検出したが輪郭が不安定なので、最終的には基本土層VII層上面で検出した。住居北辺は調査対象区域外だが、ほぼ縁辺まで調査できた。位置関係からして、縄文時代の敷石住居SB02を切っているはずだが、平面では把握できなかった。竪穴の堀方の平面形はほぼ正方形で、軸は東西方向に一致し、東西は5.1mを測り、南北は4.7mと推定される。堀方は検出面から45cmほどあり、貼床は無いので床面までの深さも45cm程度となる。壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源の砂質黒褐色土で、基本的には単層だが、わずかな色調の違いから図では分層してある。壁際に埋没した崩落土は分層できる。

床は貼られないので軟弱である。床面施設はピットと炉がある。ピットは4基で、柱穴に好都合な配置は無い。P1は大形で貯蔵穴だろう。炉は北辺中央に偏り、浅い地床炉で、南縁には円礫の縁石が残される。炉内の焼土は少量だが構造から見て炉であることは間違いない。炉内に転落した礫に錆化した鉄片が附着していた。P3に隣接して、床面に人頭大の礫が埋置されている。

出土遺物は土器と鉄片があるが、鉄片は詳細不明である。箱清水式の系譜を引く土器群(34・48・54)と、他地域に系譜が求められる土器群(35～47、49～53)が混在し、後者が主体を占めている。出土状況から一括資料として捉えてよい。

34～49は赤色塗彩を施した供献形態の土器である。34～35、39～40が高杯、36～38が小型高杯、41～46が小型器台、47～48が鉢、49が壺である。34は口径に対して杯部が浅い椀形高杯で、当該期の千曲川流域では類例が多い。高杯脚35は他の脚と異なり、内彎する点が特徴で、東海地方の高杯脚部を範型とする。

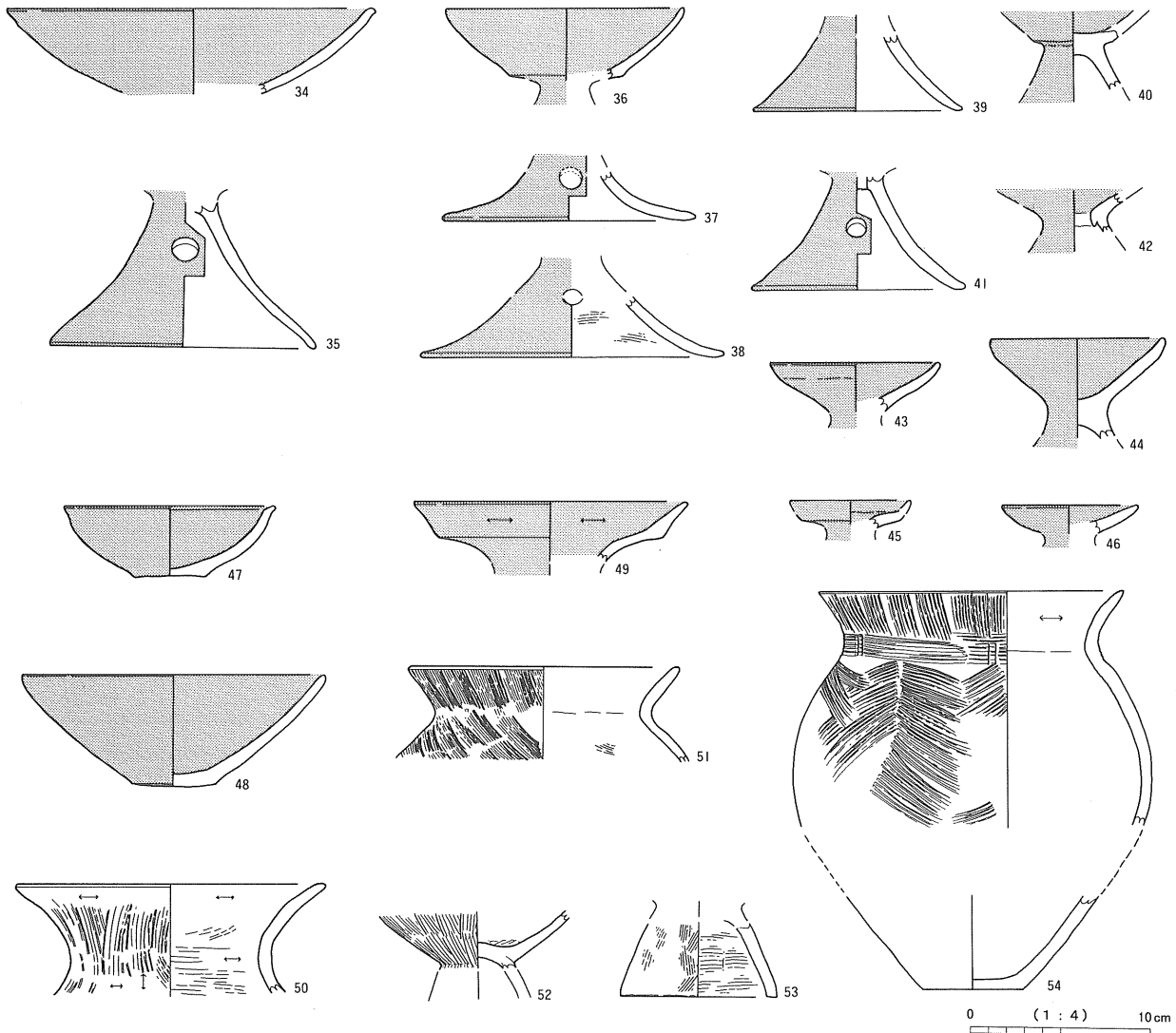


図25 S B 09出土土器実測図 (1 : 4)

円孔は3孔。小型高杯36、高杯40は杯部下位に稜をもつ欠山系の高杯である。小型器台の杯部は端部から3類型に分類される。端部が稜をもって立ちあがるもの(45)、端部が不明瞭な稜をもって立ちあがるもの(43~44)、端部が直線的に外反するもの(46)である。杯47は、口唇端部を上位から内側に面取りを行う点が、外来要素として注意される。49は有段口縁の壺が想定される。

50~54は非赤彩系の器種である。50は壺、51~54は甕。50は広口壺で、ハケ調整後ミガキを施す。51はハケ調整甕で、台付甕の可能性が高い。52はS字状口縁台付甕脚部。53は単口縁ハケ調整甕の脚部と想定される。内彎傾向を呈し、箱清水系の台付甕脚部とは異なる。54は櫛描文系甕で、胴部文様は縦羽状文である。文様施文順位は①頸部簾状文→②胴部・口縁部文様である。図示部分がほぼ完存する例は35と47のみで、他は破片から復元した。

## 海戸田A遺跡の古墳時代前期土器群

### ① 千曲川上流域の古墳時代前期初頭土器群の認識

千曲川上流域の佐久地方に位置する浅科村海戸田A遺跡では、古墳時代前期初頭の竪穴住居址が3棟検出された。その土器様相から導き出される時間的位置は、箱清水式土器様式圏における前方後方(円)墳出現期の所産であることが予想される。弥生時代から古墳時代への移行過程である当該期の佐久地方では、今のところ前方後方(円)墳を確認することはできないが、海戸田A遺跡の土器様相は、集落における祭祀行為にまで何らかのインパクトが及んでいたことを予想させるものであった。土器群の様相を整理する



ことによって、若干のまとめをしておきたい。

海戸田遺跡出土の土器は、壺、高杯、鉢、小型精製土器、甕から構成され、I. 弥生時代後期の箱清水式土器の系譜を引く土器群、II. 箱清水式土器からは系譜が追えない土器群、の二者が混在することが特徴である。この土器様相は、これまで箱清水式土器様式圏の千曲川流域で、弥生時代終末期とか古墳時代前期初頭と呼称されてきた段階に顕著となっていたが、土器から読む時代の認識は、長野市牟礼バイパスでの青木和明氏の土器分析 [青木1982]、中野市七瀬遺跡・同牛出窯跡等での土屋積・赤塩仁・鶴田典昭氏等の土器分析 [土屋1998、赤塩1994、鶴田1997] から、箱清水式土器様式崩壊後の古墳時代前期の所産として捉えられるようになってきた。

ここで重要なことは、笹沢浩氏が指摘した当該期の集落間土器様相差 [笹沢1983]、宇賀神誠司氏が指摘した地域的土器様相差 [宇賀神1988] といった視点を重視しつつも、海戸田A遺跡の土器様相は、巨視的に考えるならば、箱清水式土器様式圏が受けた外来系譜の社会的インパクトについて、その同時性を物語っていることである。

## ② 在来系土器群と外来系土器群

### A I系土器群とII系土器群の混在化現象

海戸田A遺跡の土器様相には、在来系譜のI系土器群と、外来系譜のII系土器群が混在することを指摘した。問題はII系土器群の様相で、群馬県樽式土器様式圏に参入した外来系土器群の様相差を類型化した若狭徹氏の基準 [若狭1998] を借用するならば、搬入土器である〈レベル0〉の土器や、故地の土器を忠実に模倣した〈レベル1〉の土器は認めることができない。海戸田A遺跡II系土器群の正体は、若狭氏が語る〈レベル2〉「外来系土器の典型からは離れているが、在来系譜で説明不可能なもの」である。ただし、II系土器群にはI系土器群に認められる諸特徴である赤彩手法、甕ミガキ技法が共存することも見逃せない。このことから推測される背景としては、海戸田A遺跡出土の土器群が遠方からの移住者によって製作されたのではなく、箱清水式土器様式圏の人々によって製作されたであろうことを予想させる。また、I系土器群の土器様相に認められる型式の崩壊は、II系土器群の製作を選択するといった社会的なインパクトによって生じているものと考えてよい。そう考えると、I系土器群とII系土器群に分離させることはある意味では無意味ともなり、二者の総体が新たな土器様式として認識されなくてはならないのだが、ここでは、系譜の異なる土器が混在するという特徴を押さえるために両者を分離する。この様式については千曲川流域の全域で明らかになりつつある。

### B 在来系譜としてのI系土器群

I系土器には壺、椀形、高杯、鉢、甕がある。当遺跡資料では、赤彩された赤彩深鉢、杯部が有段の高杯（高杯C）は認めることができず、時期決定の一つの目安にもなっている。

中部高地型楡描文を施文する壺は1点のみ（図21-1）で、他に破片も認められない。T字文は2条1単位で直線文帯を3区画する。そのカタチは、II系土器群の広口壺（図21-9）の影響を受け、球胴を呈し、頸部が強く屈曲する。箱清水式壺の特徴であるアサガオ花状の外反口縁はなく、短く直立的に立ち上がる。赤彩を施さない点も特徴である。II系の壺に頸部楡描文のみが残存したと表現した方がよいのかもしれない。しかしながら、楡描文に込められた文様の意味が深いことが理解される。

赤彩系の器種としては、I系の高杯が2点認められる（図23-19、図25-34）。19の三角透し孔を有する脚部は、脚高に対して底径が大きく、箱清水系高杯の終末様相を示す。椀形高杯34は皿状を呈し、箱清水系土器の終末様相に位置づく。

これらI系箱清水系壺・高杯の変容は、当該期において「箱清水式土器様式の壺・高杯」が在来系土器様式としての意味を失ったと解釈することができる。一方で、こういった数少ない例を前時代の残存とし

て見逃しがちである。しかしながら、これらの様相に伝統の世界を見出だすことも忘れてはなるまい。

在来の伝統は、甕の文様構成にも具象されている。I系の櫛描文を施文する甕には、波状文系(図21-2)と羽状文系(図21-3・4、図25-54)とがある。佐久地方の羽状文系甕は、古墳時代前期まで残存することが瀧ノ峯墳丘墓の調査で明らかとなっていた。海戸田A遺跡の様相は、長野盆地ではすでに弥生時代後期前半に施文されなくなった櫛描羽状文が、佐久地方では継承されていることを明確にした。このことは箱清水式土器様式圏の地域的個性を示しているといつてよく、風土に根差した生活様式が土器文様に具象されていると考えねばならないだろう。一方、頸部文様帯の簾状文(a)と口縁部・胴部の櫛描文(b)の施文順位は、海戸田A遺跡ではb→aは3例(2~4)、a→bは1例(54)で前者が主体となり、当該期における長野盆地の櫛描文系甕の傾向と同様である。箱清水式土器と同様に、中部高地型櫛描文を用いる樽式系土器ではa→bが主体となるらしい。海戸田A遺跡の櫛描文は地域独自の文様を重視しながらも、その手法では箱清水式土器様式の系譜を引く一群であることを意味している。そこに、中部高地型土器様式圏の緩やかなる規範とまとまりの終末を見出だすこともできる。

### C 外来系譜としてのII系土器群

壺、高杯、小型精製土器、甕がある。定形化した小型丸底鉢、有段口縁鉢は破片の中にも認めることはできない。供献形態土器と煮沸形態土器とに別けて説明する。

#### a 供献形態の土器

II系土器群には、壺、高杯、小型精製土器があり、後者が組成に占める率が高い。しかも、赤彩率が高いのが特徴で、外来の新出器種に在来要素が取り入れられて、折衷的となっている。

供献形態土器で数量的に多いのは小型器台(12~13、24~25、41~46)、小型高杯(22~23、36~38)、高杯(10~11、20~21、35、39~40)である。脚部のみが残存する場合、三者の区別がつかないものもあるが、小型器台が最も多い。いずれの脚部も円透孔をもち、赤彩を施すものが主体である。

小型器台は杯部に特徴を見出だすことができる。その端部が直線的に開き皿状を呈するもの(46)と、端部が有段となるもの(24)とがある。杯部端部が有段で外反する例は、佐久市瀧ノ峯墳丘墓出土に古相例があり、茅野市下蟹河原遺跡、長野市松原遺跡に新相例がある。中部高地型櫛描文を用いた地域圏では、その崩壊前後に小型器台がS字状口縁台付甕と共伴することが知られており、注目される。海戸田A遺跡例は、瀧ノ峯例に近い型式として位置付けられよう。この小型器台に、いわゆる欠山系高杯と呼称されてきた杯部下位に稜をもち直線的に外反する高杯(20)、あるいは小型高杯(36)が共伴する。その杯部の外反は横に大きく広がり、杯部径に対して杯部が低い皿状を呈するタイプで、S字状口縁台付甕B類からC類に共伴する一群に近い。しかも赤彩する点が在来の個性を示している。

小型器台とセットとして使用されたであろう器種として、鉢(17)とひさご壺(26)、小型壺(28)がある。鉢は体部に対して口縁部が短く立ち上がるタイプ(17)で、庄内式並行期の西日本に散見される。ひさご壺は口縁部が欠損する。頸部が強く屈曲するので、口縁部は短く立ち上がると想定される。口縁部に対し、胴部は球形に大きく張り出す。その形状は長野市北平1号墳のひさご壺に近い。いずれも赤彩を施す。小型壺28はミガキを施した精製土器で、中島式土器様式中に外来系器種として散見される。

一方、赤彩されない器種として大型壺があり、広口壺(9)はI系の箱清水系壺に影響を与えている。

#### b 煮沸形態土器

I系土器群では平底甕(2~4)を基本とし、小型の台付甕(5)がその構成要素となっていた。

II系土器群としては、中型サイズの台付甕(6~7・51)、中部高地型櫛描文を施文せず、そのカタチも異なるハケ調整くの字口縁甕(8・32・33)がその主体となり、I系煮沸甕(2)と共伴していた。中部高地型櫛描文をもつ中部高地型甕の崩壊と新たな在来甕の成立に関しては、台付甕とハケ調整甕という

要素が重要なポイントであることを示している。

II系の甕でも主体となるのはいわゆるハケ調整甕である。ハケ調整甕には平底甕(32~33)と台付甕(7・53)が混在するのが特徴で、平底甕地帯の伝統様相を見出すことができる。33の長い口縁部は箱清水式の系譜を引くもので、7の短く屈曲する口縁部は外来の要素である。また、胴部下半の甕ミガキ手法は、平底甕の32~33のみならず台付甕7にも認めることができる。

S字状口縁台付甕(6・52)は客体的で、2点出土した。千曲川流域の当該期におけるハケ調整甕とS字甕の構成比を示しているとも言えよう。海戸田A遺跡のS字甕は強く被熱し、橙色を呈する。

### ③ 在来様式の崩壊と新たな様式の成立

浅科村海戸田A遺跡の発掘調査で明らかになったムラの一角では、その調査面積が小さいにもかかわらず、千曲川上流域の弥生時代から古墳時代の社会変化を土器様相から読み取るのに十分であった。

3軒の竪穴住居址に廃棄された土器群を分析すると、2世紀から3世紀にかけて千曲川流域で盛行した箱清水式土器の系譜を引く土器群と、いわゆる東海系とよばれる東海地方に系譜が求められる土器群が混在していた。前者は楡描文の盛行期と対比して、後者はその出自地域と対比して、いずれも似て非なる型式であった。しかしながら、東海系土器群と認識する土器群に関しては、海戸田A遺跡の資料によって、松本盆地南部、飯田盆地、三河方面といった、点と線をつなぐ系譜ルートが明らかにされつつある。その実証に関しては、さらに細かな分析が必要になるのだが。

海戸田A遺跡にムラが営まれていた頃、長野盆地の長野市・四ッ屋遺跡、中野市・牛出窯跡遺跡においても、ムラで用いられた土器群に同様の変化が起きていた。それまで用いられていた器や文様の崩壊が進み、新たな様式が生み出されているのである。この動きは千曲川流域で一斉に起きたと考えられるが、各ムラにまで及んだ土器様式の変化の背後に、社会的なインパクトを読み取ることも可能であろう。長野盆地で前方後方(円)墳が造墓されるころ、同様な社会的インパクトが佐久地方にも及んでいたことを、海戸田A遺跡の土器様相は物語っている。

浅科村海戸田A遺跡の古墳時代土器群は、今後、東日本の古墳時代社会を明らかにすべく、多くの人々が閲覧を求めることになろう。そこから古墳時代地域社会研究が進展し、浅科村の風土と歴史がより明確にされることにもなる。

#### [参考文献]

- 青木和明 1982『浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡』 長野市教育委員会  
 赤塩 仁 1994『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書』長野県埋蔵文化財センター  
 宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2  
 笹沢 浩 1983「古代の土器(2) 古墳時代の土器」『長野県史考古資料編4 遺構・遺物』  
 土屋 積 1998『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』14 長野県埋蔵文化財センター  
 鶴田典昭 1997『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』13 長野県埋蔵文化財センター  
 若狭 徹 1998『第2回特別展図録 人が動く・土器も動く』 かみつけの里博物館

## (3) 平安時代

### SB04 図26、写真PL10

X=29468.000、Y=-6852.000付近に位置する。基本土層VII層上面で検出した。古墳時代の竪穴住居SB03を切るのは平面で確認できた。竪穴の堀方の平面形はほぼ正方形で、軸は南北方向に一致し、南北3.4m、東西3.0mを測る。堀方は検出面から10cmほどあり、壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源の、砂質黒褐色土単層である。

床は貼床がなく、締まってはいない。床面施設はピット4基のみだが、配置や規模からしてP1・P2は

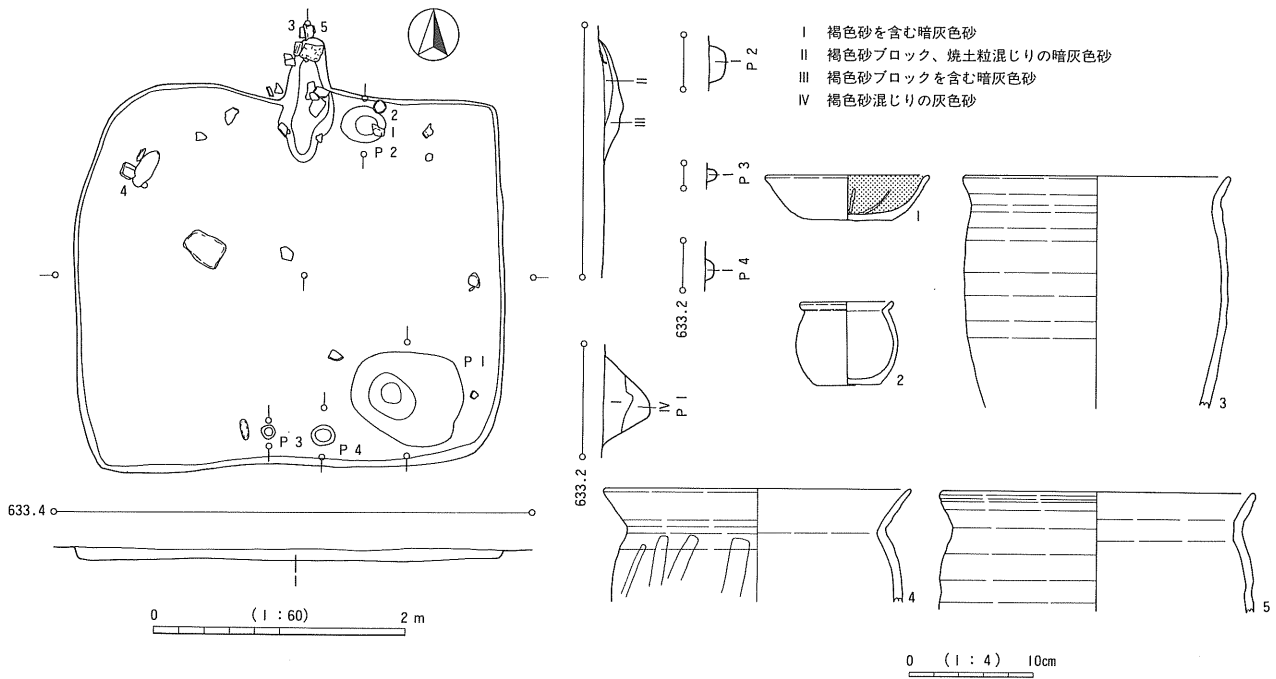


図26 S B 04実測図 (1 : 60), 出土土器実測図 (1 : 4)

貯蔵穴、P 3・P 4 は出入り口施設の可能性がある。柱穴は不明である。竈は北壁中央にあるが袖は失われており、焚口と壁外に約45cm伸びる煙道の堀方が検出された。土師器甕が竈内からまとまって出土したが、他の遺物は床面に散在していた。

出土遺物には内面に 5 本の放射状暗文をもつ黒色土器 A 類坏 1、土師器小壺 2、轆轤整形の土師器甕 3

表 2 平安時代土器観察表

No	器種	口径cm	底径cm	器高cm	底面	体部外面	体部内面	焼成	色調	胎土	備考
S B 0 4											
1	黒色土器 A 類坏	[12.8]	6.8	3.6	右回転糸切	回転ナデ	回転ナデ後 黒色処理	普通	明褐色	砂粒やや多	内面に 5 本の放射状暗文
2	土師器 小型甕	[ 7.2]	4.8	3.6	右回転糸切後 外周へラ削	回転ナデ	回転ナデ	普通	赤灰色	砂粒やや多	頸部に接合痕
3	土師器甕	[21.2]		[18.5]		回転ナデ	回転ナデ	良好	淡赤褐色	砂粒やや多	
4	土師器甕	[24.1]		[ 9.0]		回転ナデ後 一部縦へラ削	回転ナデ	普通	灰褐色	砂粒少	
5	土師器甕	[24.9]		[ 9.5]		回転ナデ	回転ナデ	良好	明赤褐色	砂粒やや多	
S B 0 6											
1	土師器甕	[23.8]		[30.0]		横ナデ後 粗いへラ削	横ナデ後 一部横へラナデ	普通	赤褐色	砂粒やや多	
2	土師器甕	[22.3]		[ 9.3]		回転ナデ	回転ナデ	良好	赤褐色	砂粒やや多	
S B 1 0											
1	土師器坏	12.8	5.8	3.2	右回転糸切	回転ナデ	回転ナデ後 ミガキ赤彩	良好	淡暗褐色	砂粒少	
2	土師器椀	[17.3]	7.7	6.0	手持ちへラ削	回転ナデ	回転ナデ後 ミガキ赤彩	良好	淡赤褐色	砂粒やや多	
3	土師器 小型甕	[10.3]		[ 9.2]		回転ナデ	ミガキ後 赤彩	良好	淡赤褐色	精良	内面の一部に巻き上げ痕
4	土師器甕	20.6		[18.6]		回転ナデ	回転ナデ	良好	淡赤褐色	砂粒少	
5	土師器甕		7.0	[ 5.6]	右回転糸切	回転ナデ	回転ナデ	良好	赤褐色	砂粒やや多	4とは別個体

口径の[]は推定値、器高の[]は現高である。

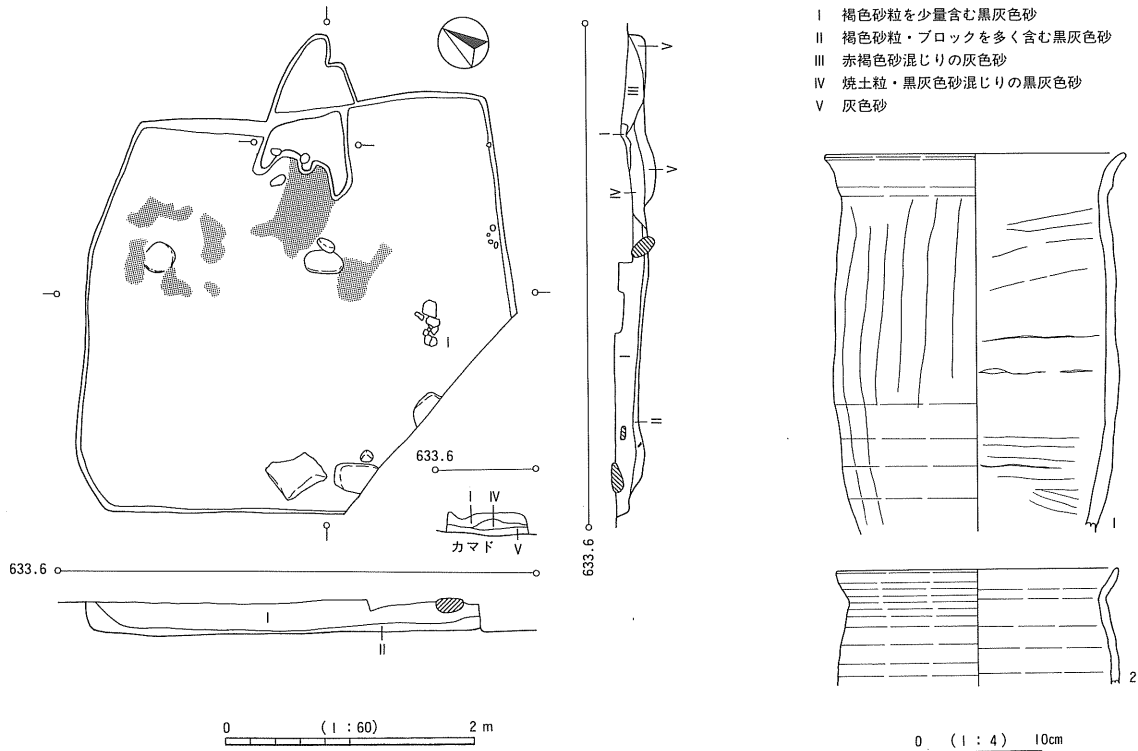


図27 SB06実測図 (1:60), 出土土器実測図 (1:4)

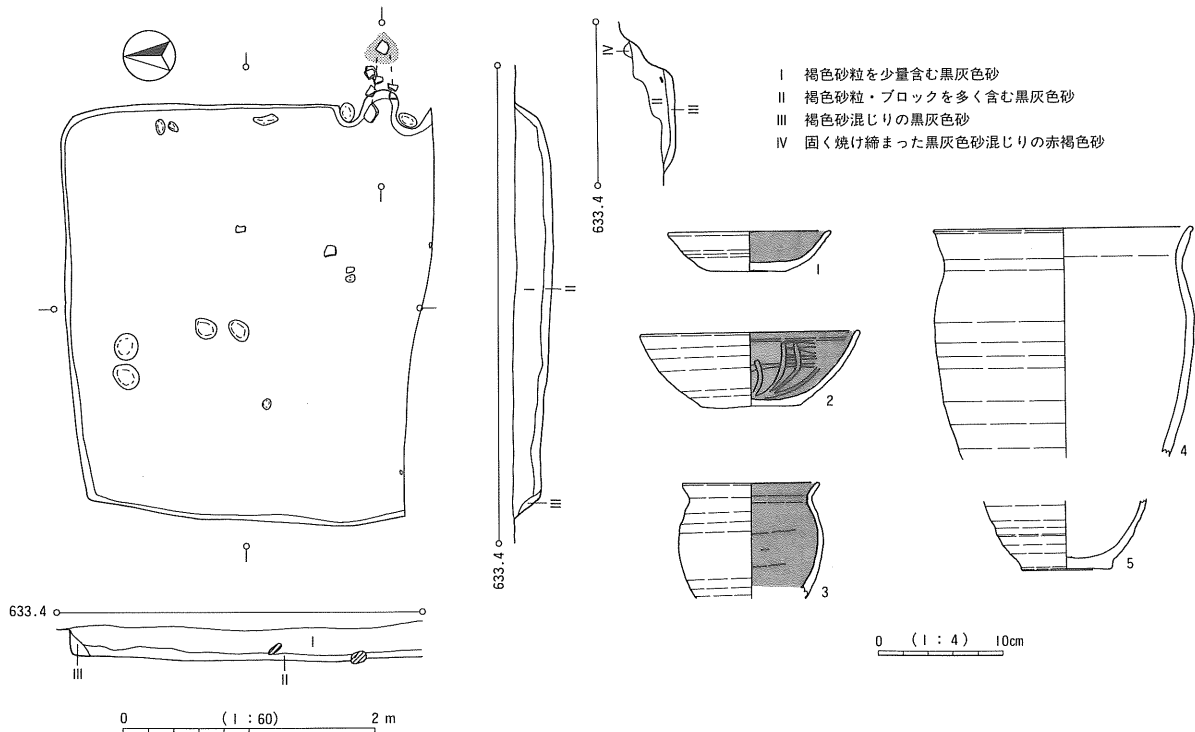


図28 SB10実測図 (1:60), 出土土器実測図 (1:4)

~5 などがある。遺物から見て9世紀後葉頃に属するだろう。

SB06 図27、写真PL11

X=29436.000、Y=-6855.000付近に位置する。基本土層VII層上面で検出し、自然流路NR01を切る。南隅が調査区外となって全形は不明だ。竖穴の堀方の平面形は一辺3.3mのほぼ正方形で、軸は北から55°程度東に振れる。堀方は検出面から20cmほどあり、壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源

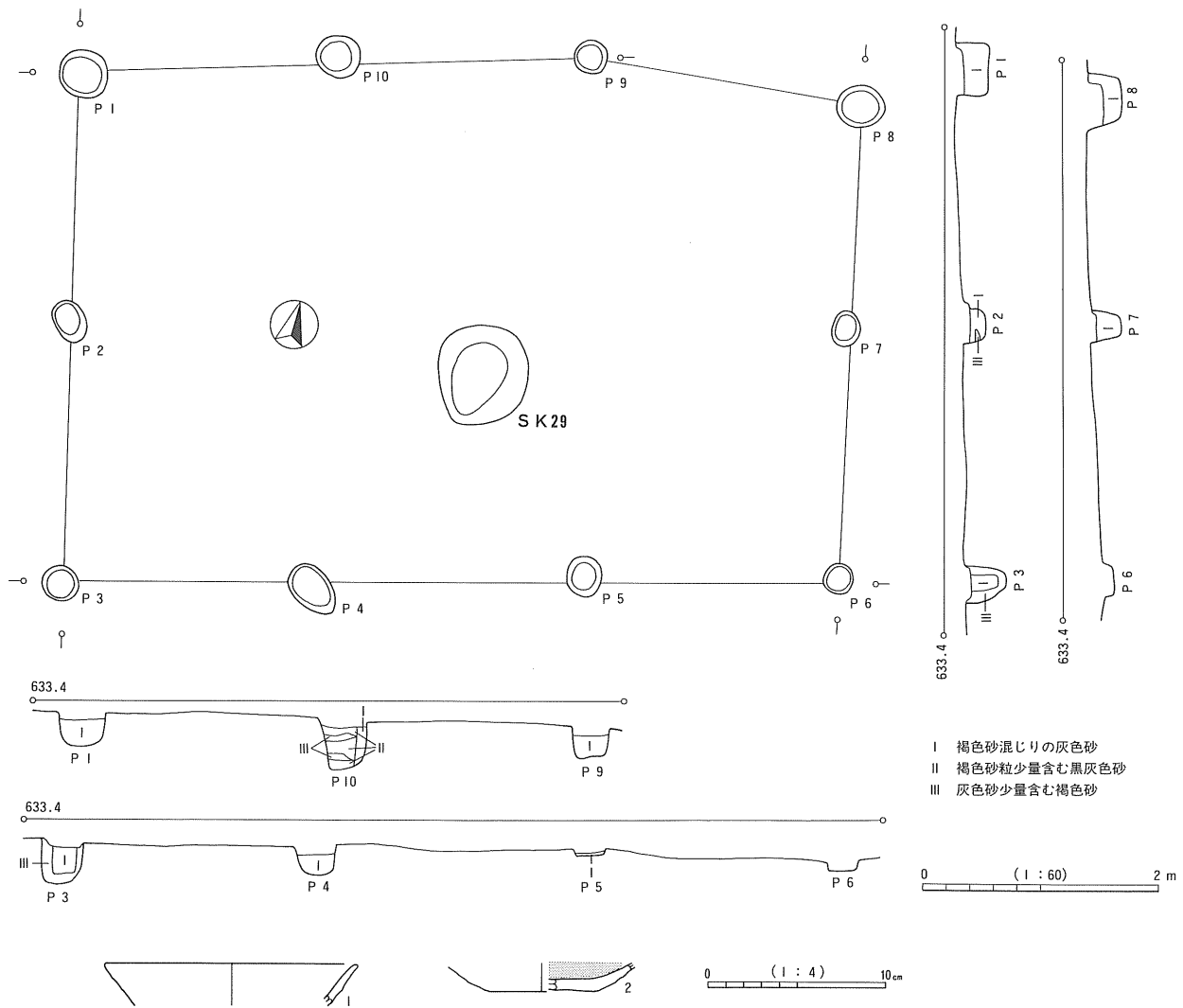


図29 ST01実測図(1:60), 出土土器実測図(1:4)

の砂質黒褐色土で、下位にはNR01起源の褐色砂塊も混じる。床は貼床がなく、締まってはいない。床面施設はない。竈は北東壁中央にあり、崩れた袖と火床、煙道の堀方が検出された。1の土師器甕が南東壁際からまとまって出土した。土師器甕2と合わせ、10世紀前葉前後に帰属すると思われる。

### SB10 図28、写真PL11

X=29432.000、Y=-6829.000付近に位置する。基本土層VII層上面で検出し、切り合いはない。南辺が調査区外となって全形は不明だが、竪穴の堀方は軸が東西方向に一致し、平面形は一辺3.3mの正方形になりそうだ。堀方は検出面から30cmほどあり、壁はほぼ垂直である。埋土は基本土層III層もしくはIV層起源の砂質黒褐色土で、礫が多く、下位には褐色砂塊も混じる。床は貼床がなく、締まってはいない。床面施設はない。竈は東壁南東隅付近にあり、袖は崩れていたが、芯にした直径10~15cm、長さ23~30cmの礫が立った状態で残され、壁外に約50cm伸びる煙道も一部天井が残っていた。竈周辺から土師器が出土した。図示した坏、椀、小型甕、甕のほか、黒色土器A類高台付坏などがあり、10世紀前葉前後に帰属すると思われる。

### ST01 図29、写真PL11

X=29448.000、Y=-6848.000付近に位置する。基本土層VII層上面で検出し、時期不明の土坑SK29と重なるが、相互の関係は不明である。直径25~45cmの円形または楕円形の堀方で、深さ10~45cmの10基の柱穴からなる、桁行3間、梁間2間の側柱建物である。一部の柱穴には柱痕跡が残る。桁行6.6m、梁間4.3m、桁行方向の柱間は2.1~2.3mで平均2.2m、梁間方向の柱間は北東隅のP8がやや南に偏っているため、

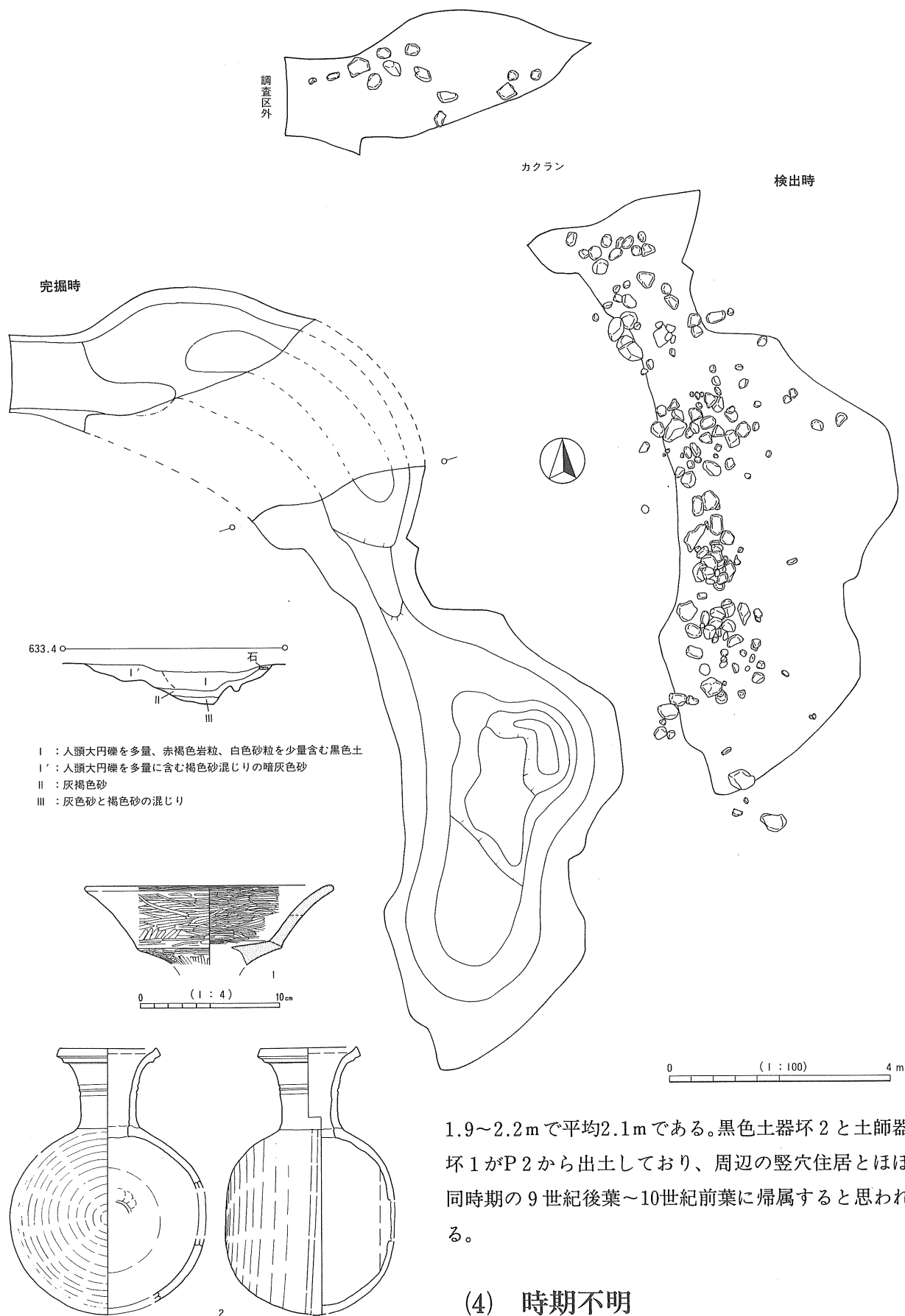


図30 SD01実測図 (1 : 100),  
 出土土器実測図 (1 : 4)

1.9~2.2mで平均2.1mである。黒色土器坏2と土師器坏1がP2から出土しており、周辺の竪穴住居とほぼ同時期の9世紀後葉~10世紀前葉に帰属すると思われる。

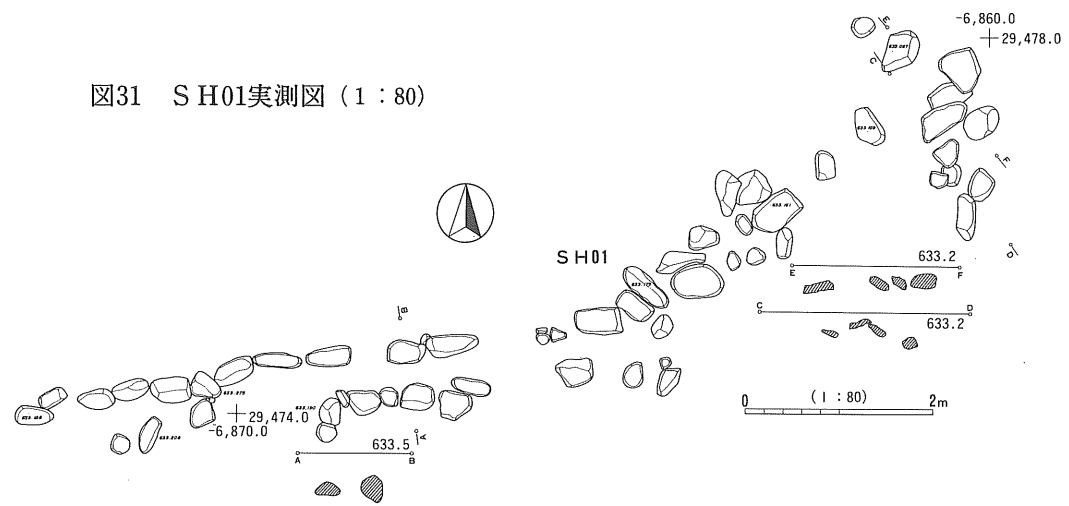
(4) 時期不明

SD01 図30

X = 29458.000 ~ X = 29471.000、Y = -6864.000 ~ -

6874.000付近に位置する。最終的には基本土層VII層上面で検出し、古墳時代のSB05などを切り、攪乱溝に切り、西側は調査区外に伸びる。現長18m、幅1.3~4.0m、検

図31 SH01実測図(1:80)



出面からの深さは20~70cmである。不定形で北西から南に弧状に走るが、長径8m、短径4mの楕円形の土坑2基を浅い溝で繋いだようにも見え、西端の調査区外付近も同様の繰り返しのようだ。岸は緩く立ち上がり、底は部分的に深くて平らではない。出土遺物は古墳時代の提瓶1や内面黒色の土師器高坏2のほか、人頭大の円礫多数が検出面付近の肩の一部に列状に並んでいた。時期は特定できず、性格も不明である。

## SK群

調査区域南半、X=29458.000以南に散在する土坑は、埋土が黒色砂層で、切り合い関係はない。周囲には平安時代の遺構しか検出されていないので、同時代に帰属する可能性はあるが特定できない。

## SH01 図31

X=29475.000、Y=-6862.000~-6870.000にかけて存在する配石遺構である。配石の基底は黒色砂層中に置かれ、その上部は盛土層中に若干食い込んでいる。SH01はSB11・SH03の上に乗っており、それらより確実に新しい。SH04・05及びSH07とは重複し合うが、前後関係は不明である。昭和30年代の開田工事の折にある程度破壊されてしまったように思える。

SH01は人頭大~一抱えもある礫を列状に単純に並べており、裏込めなどの構造はない。西側約半分は列がしっかりしており、部分的に2列になっている。東側半分は他の遺構と重複する事もあって形状が不明瞭で、走行方向もやや異なっている。幅は80cm~120cm程度で、総延長は11m程度である。形状は暗きょ排水にも似ているが、水路の基礎部分の可能性もあり、結論は出せない。時期を決定できるような出土状況を示す遺物はない。

# 4 結 語

海戸田A遺跡のムラは縄文時代中期末~後期前半に始まる。C14年代測定は実施していないが、恐らく紀元前2,000年前後の数値が出るだろう。当時の中部高地では標準的なムラであった。出土遺物の大半は縄文時代に属する。古墳時代前期、当地方で前方後円墳が築かれる直前の世紀ころ、ムラが営まれる。古代国家形成の胎動に関連する政治変動の一端が、土器からも読み取れる。平安時代後半の10世紀頃にもう一度小さなムラが成立する。

改めて言うまでもなく、浅科村の原始~古代史は、日本列島の原始~古代史と連動し、それを明白に反映している。豊かな内容をもつ海戸田A遺跡であるが、諸般の事情で報告できた事柄は十分とはいえない。資料はすべて浅科村教育委員会で保管してあるので、ご利用いただければ幸いです。



# 写真図版

海戸田A遺跡遠景  
(東上空より)



海戸田A遺跡全景  
(真上より)





縄文時代の遺構  
SB01 (右) とSH06  
(左)



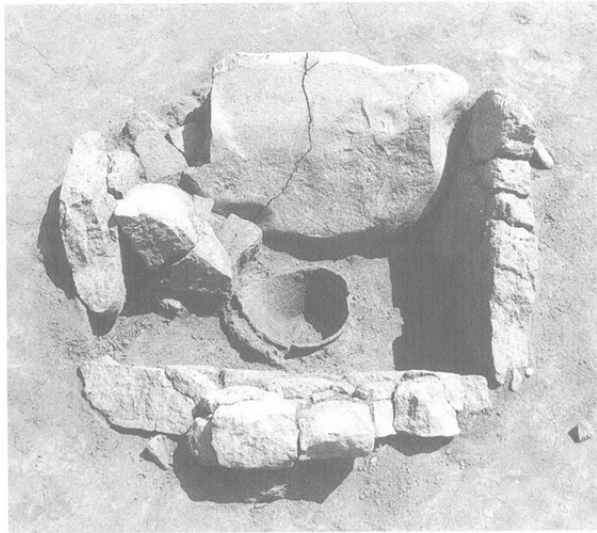
SB01



SB02



縄文時代の遺構  
 左：SB02の柄部  
 右：SB02の炉



SB02の周堤西半分



SB02の周堤東半分

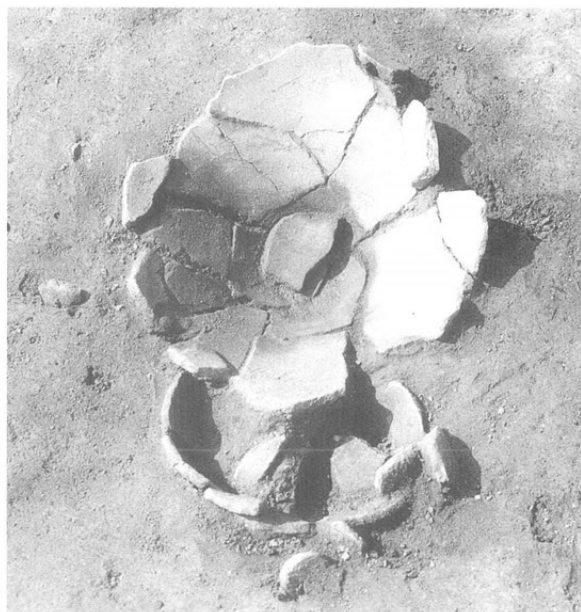
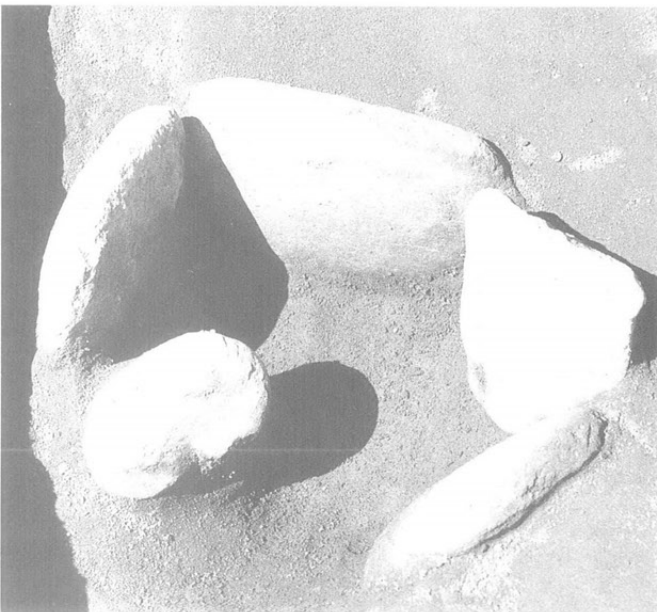




左：SB07の柄部  
右：SB02の埋甕



左：SB02の入口部  
石組  
右：SB02の入口部  
埋甕

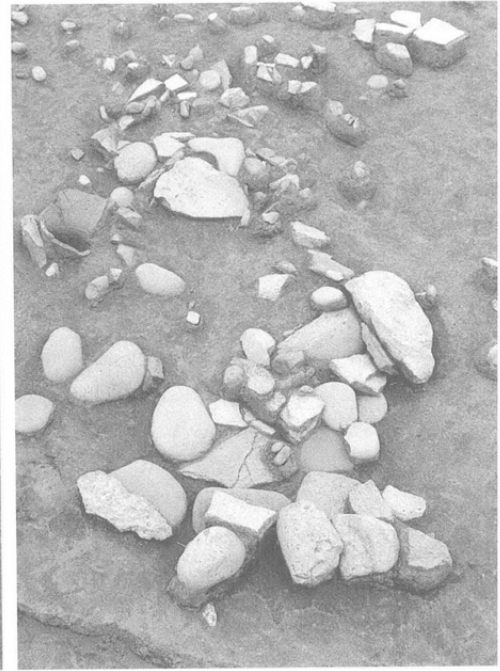
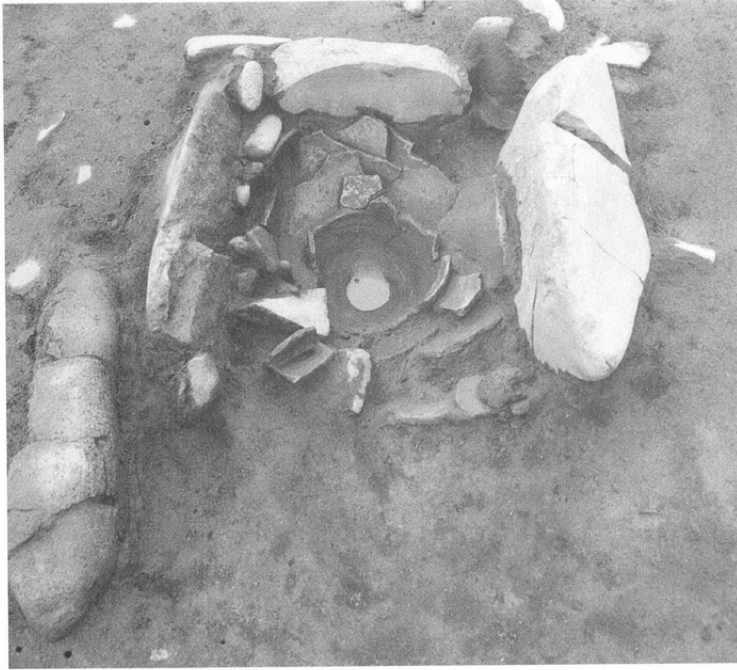




縄文時代の遺構

左：SB07の炉

右：SB08の柄部



SB08



左：SB08の炉

右：SB08炉北の埋甕





縄文時代の遺構  
SB11の検出



SB11



左：SB11の炉上部  
右：SB11の炉下部



縄文時代の遺構  
SK群

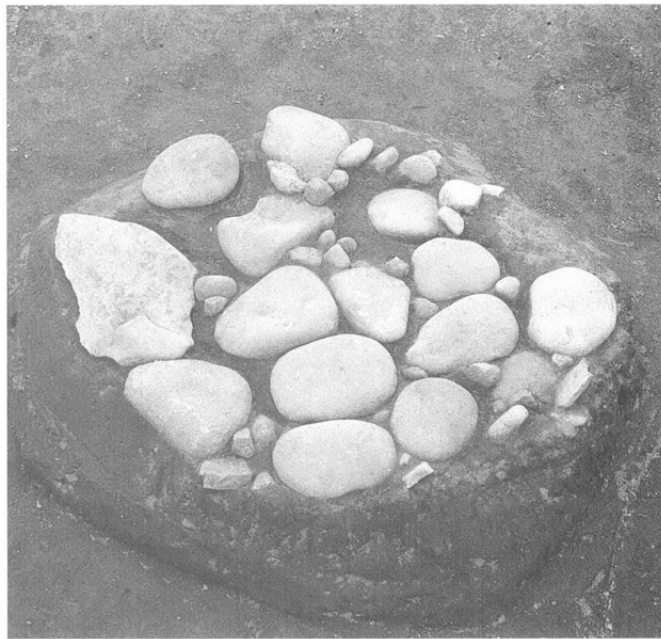


SH03

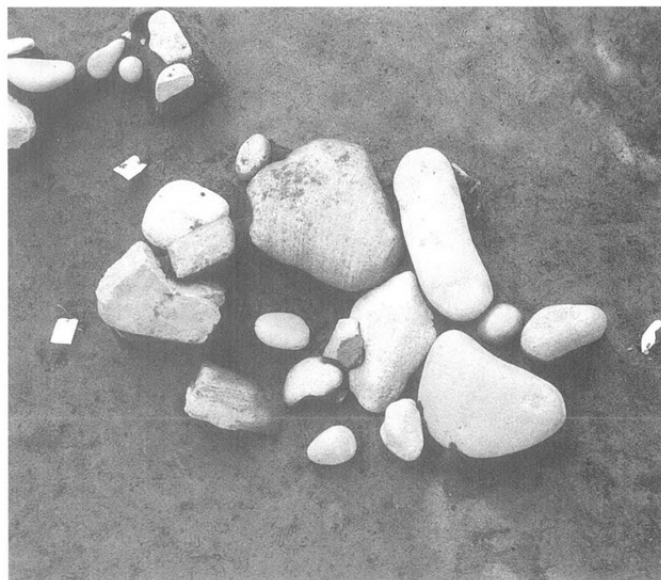
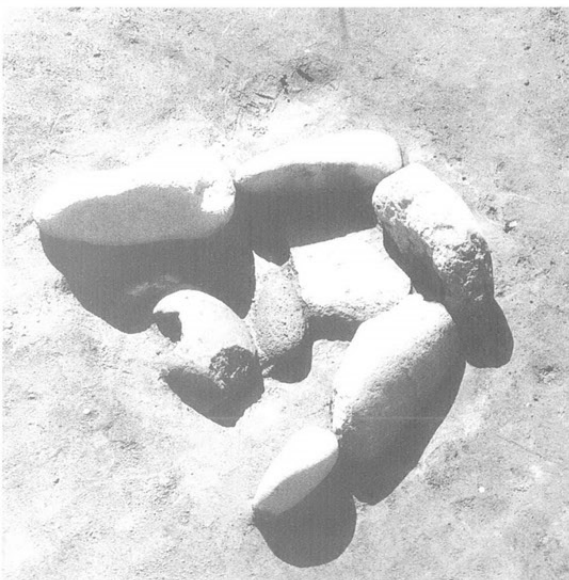


SH03





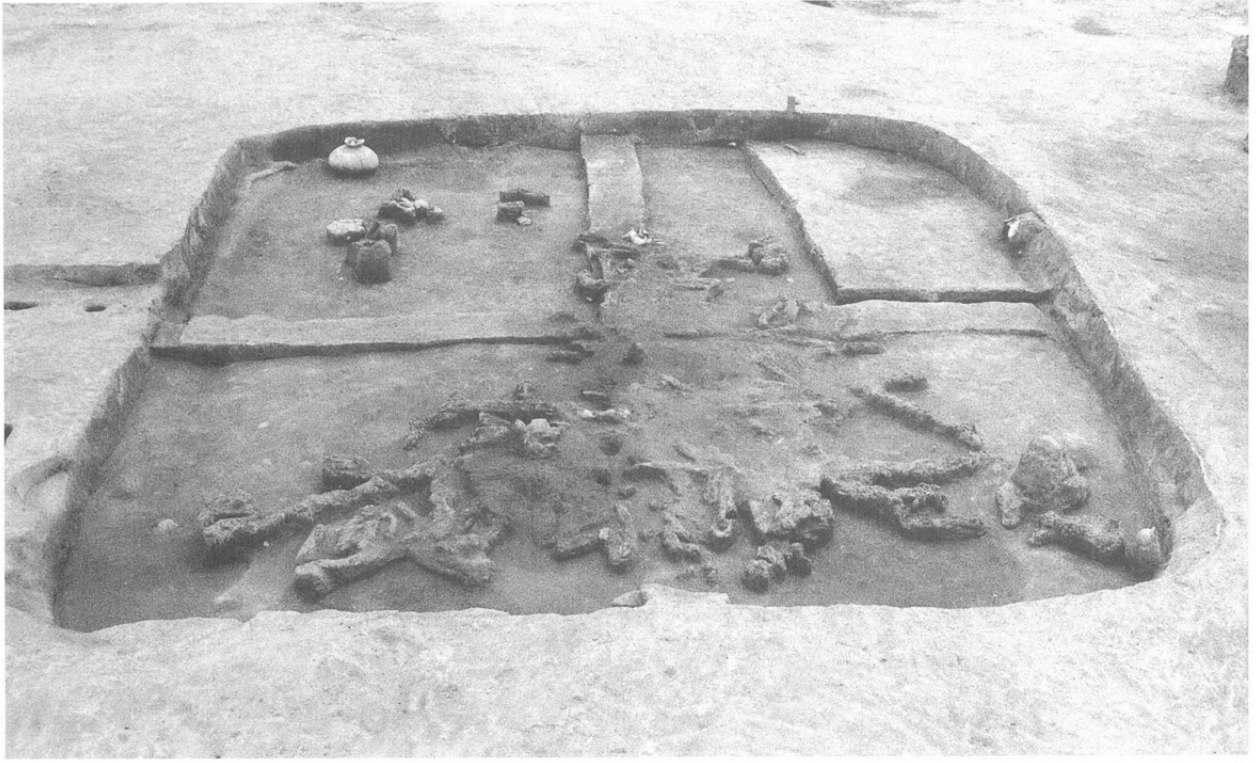
左：SH06上部  
右：SH09



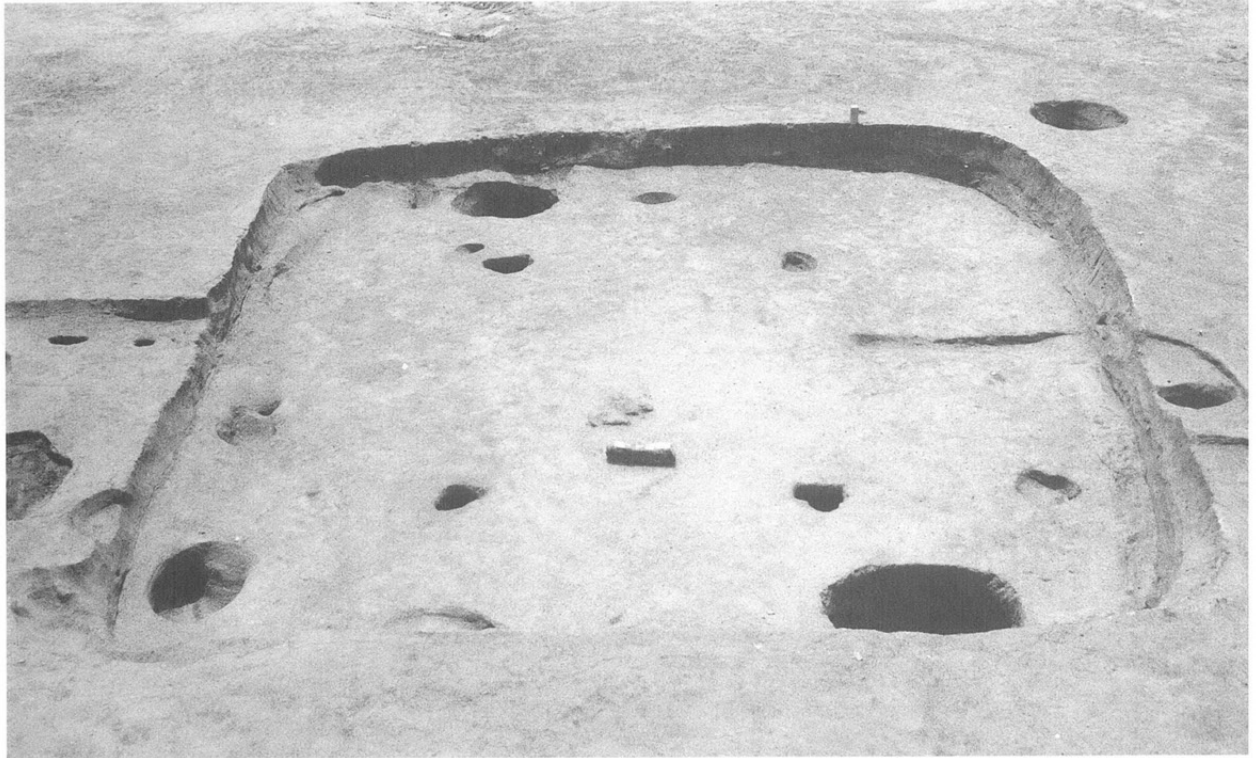
左：SH06下部  
右：SH07



古墳時代の遺構  
SB03床面の建築材



SB03



左：SB03のP1  
右：SB09の炉





古墳時代の遺構  
SB05



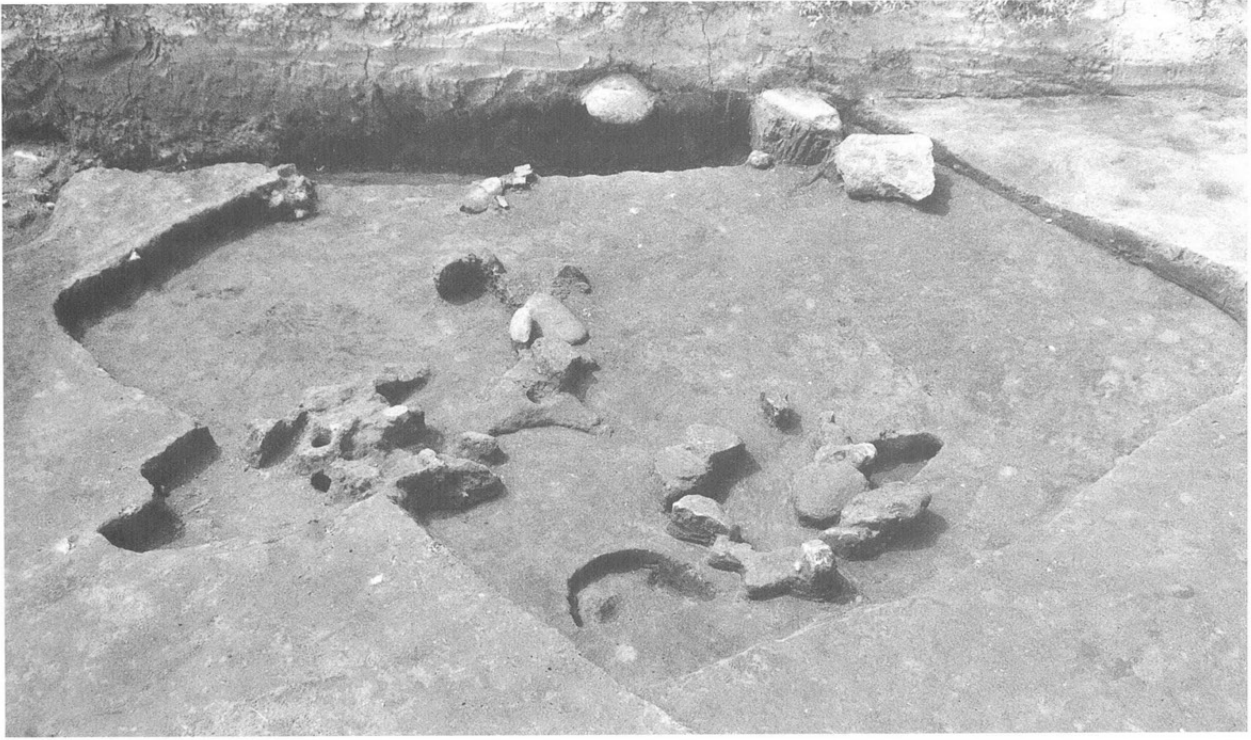
SB09



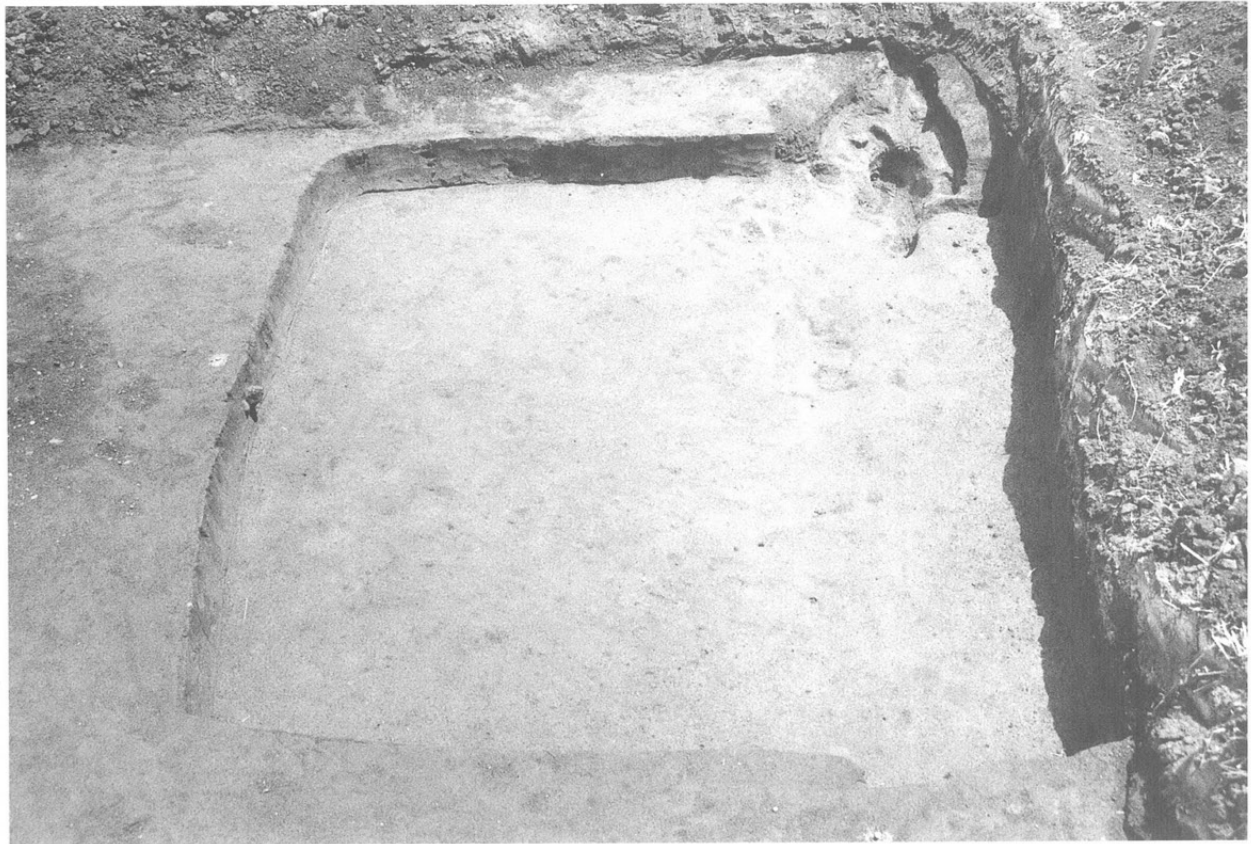
平安時代の遺構  
SB04



平安時代の遺構  
SB06



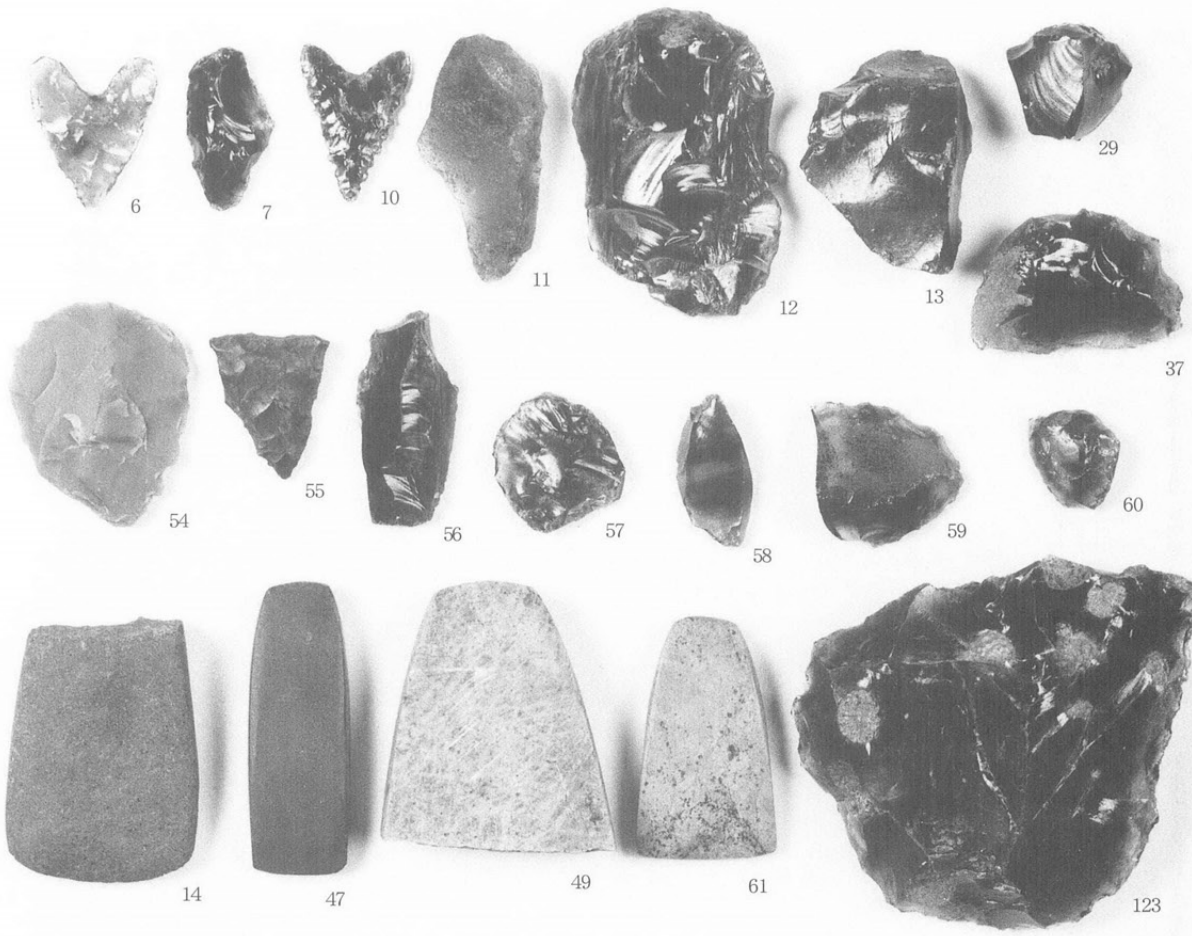
SB10



ST01



縄文時代の石器  
石鏃・スクレイパー  
ピエスキューユ  
磨製石斧など



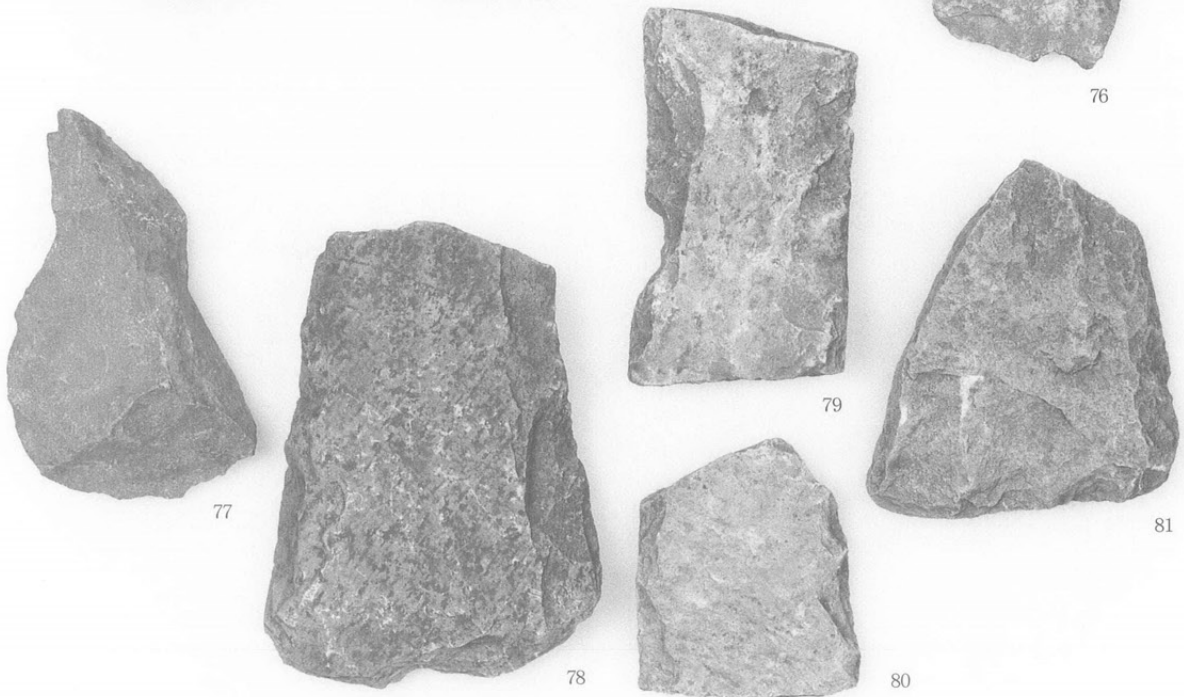
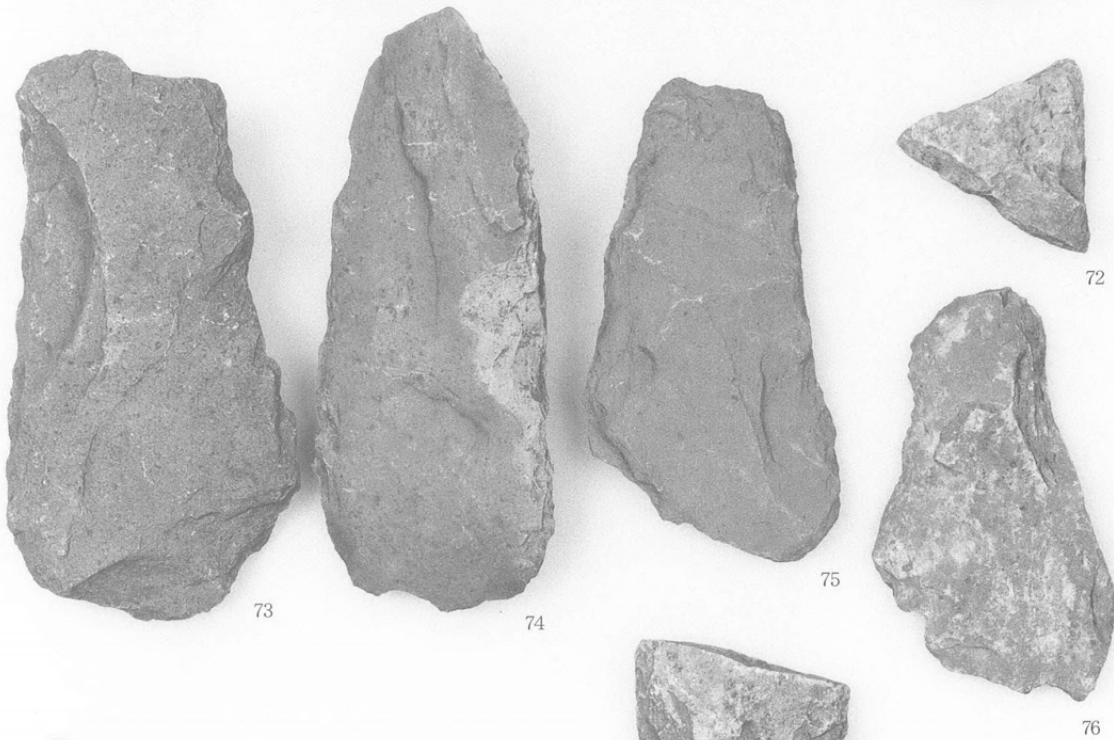
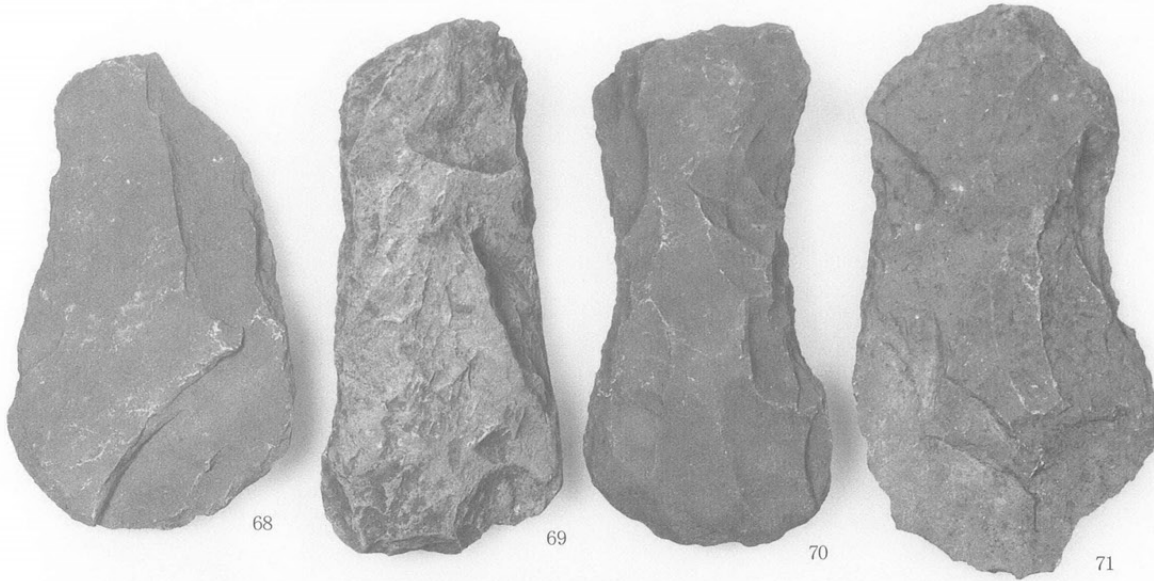
磨製石斧



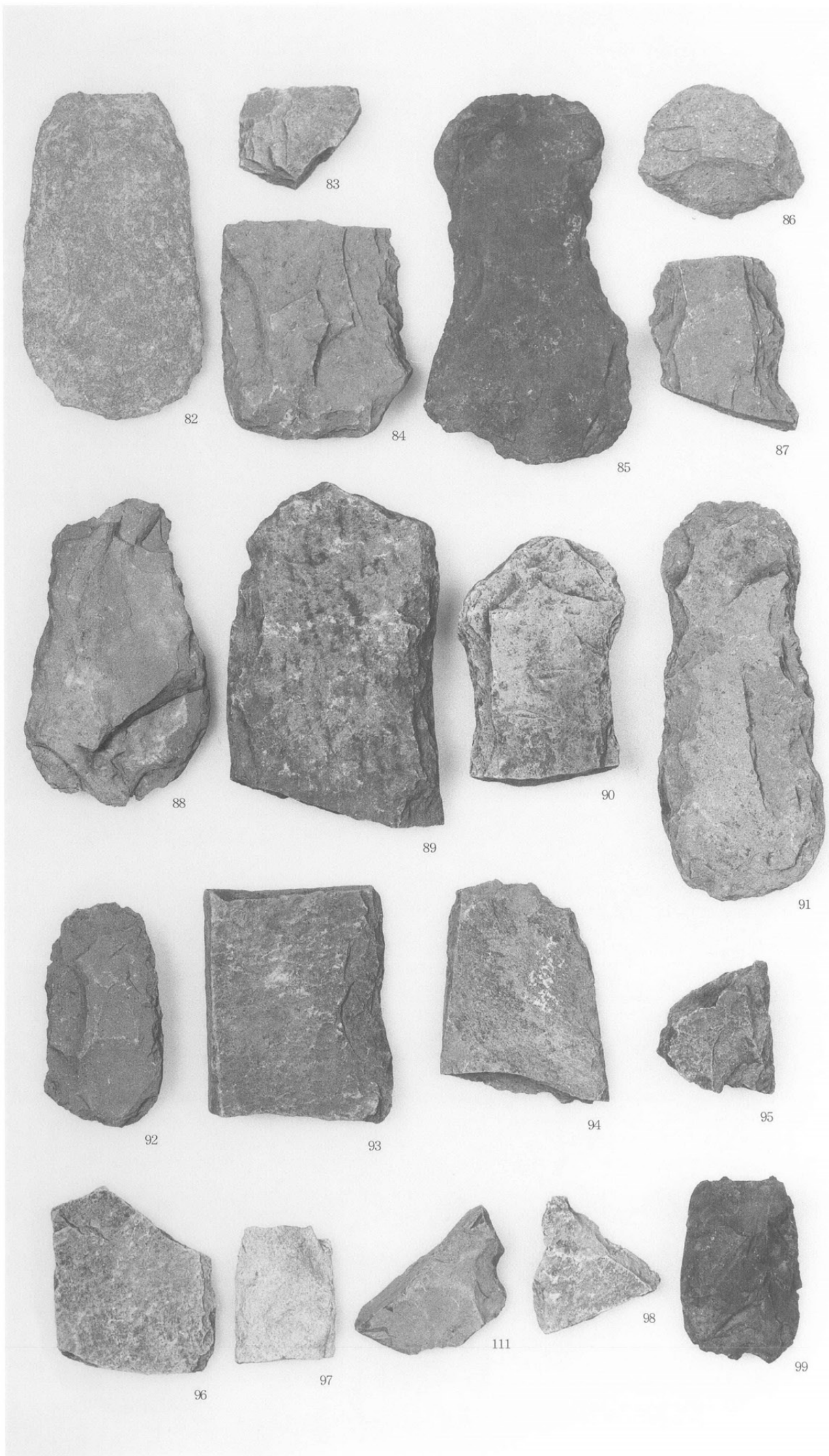
縄文時代の石器  
打製石斧(1)

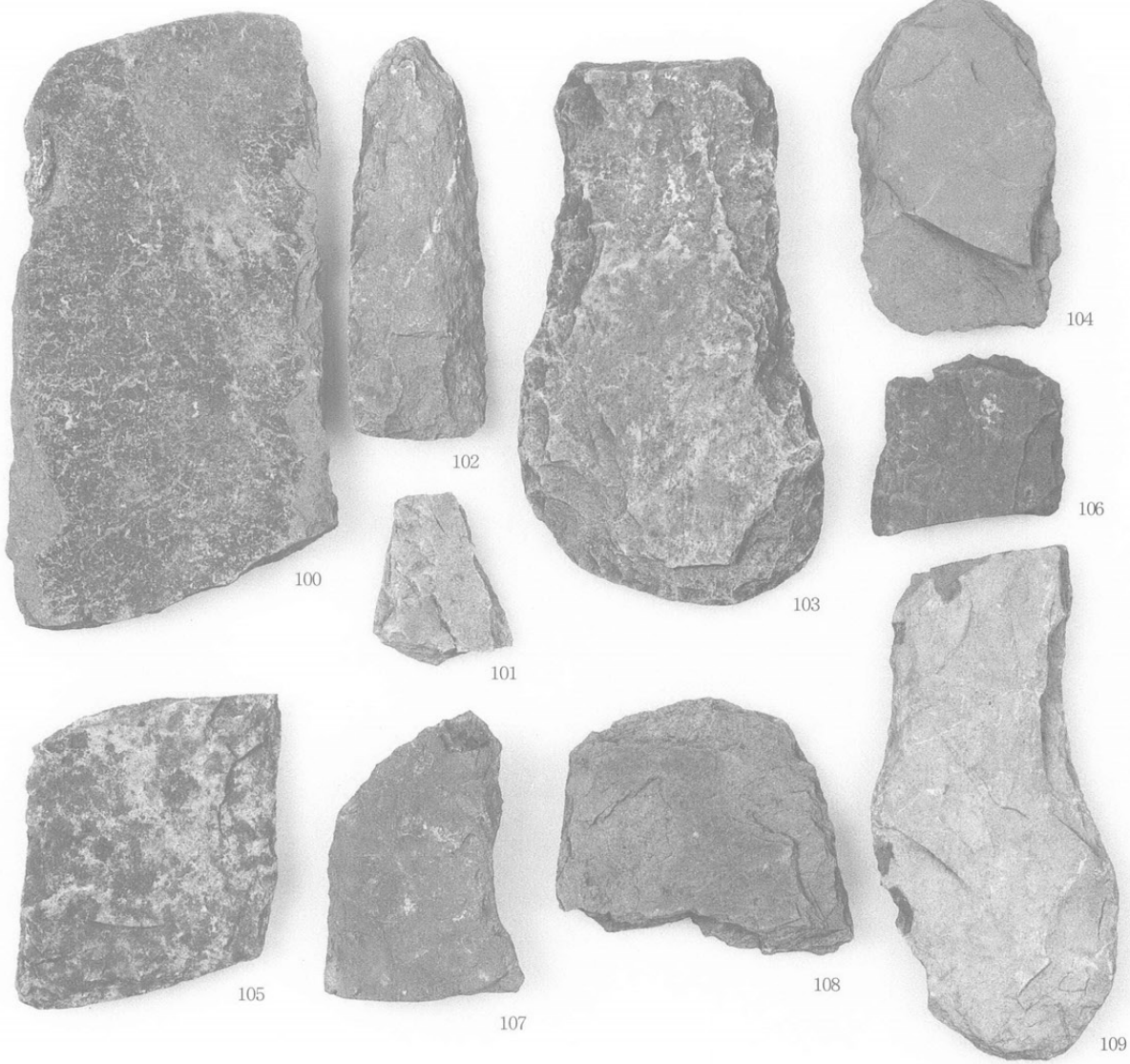






縄文時代の石器  
打製石斧(3)  
粗大石匙

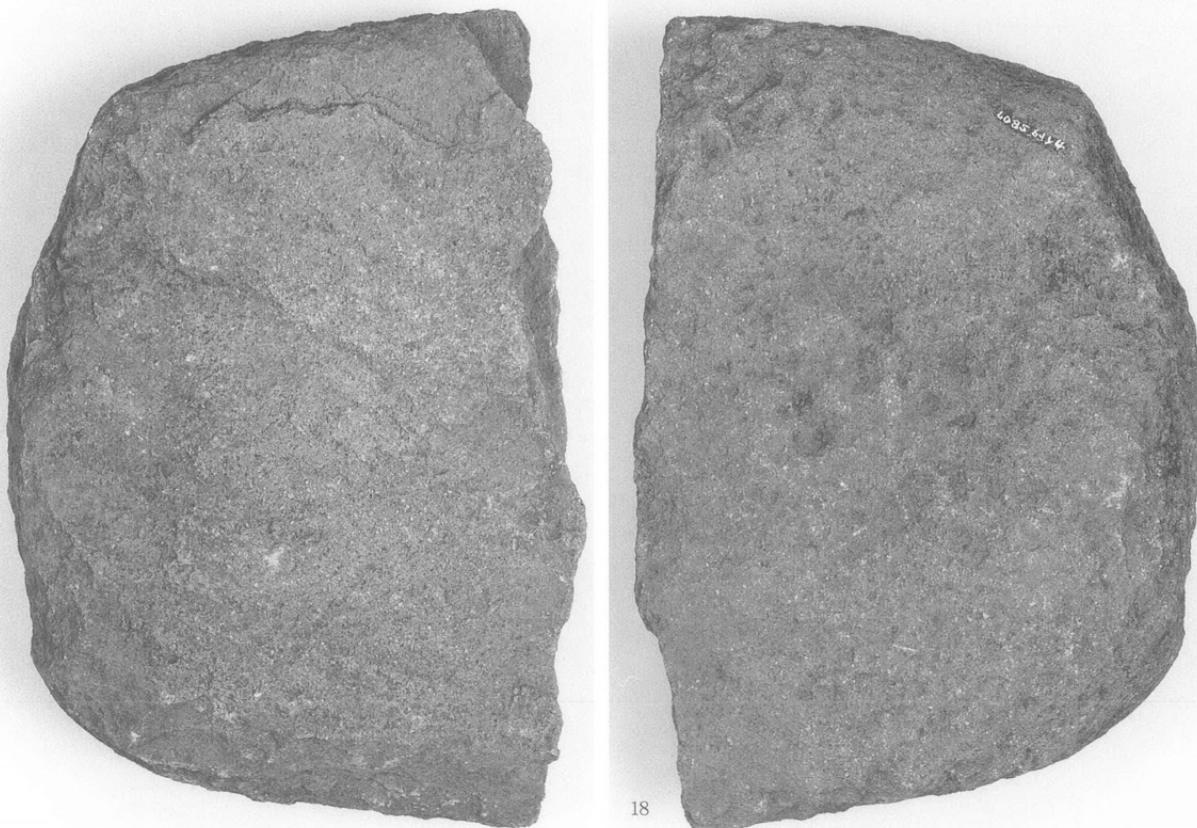
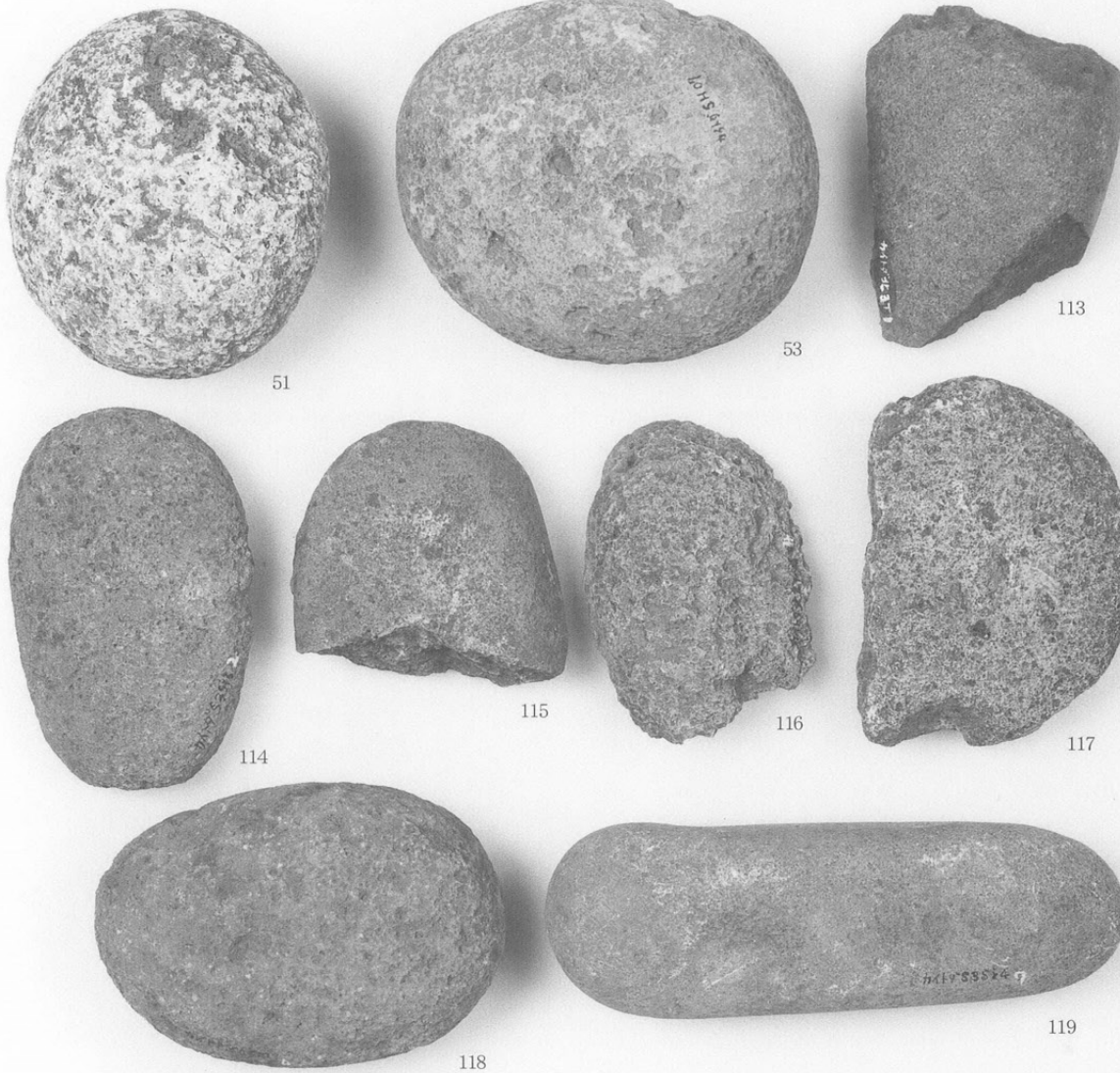






縄文時代の石器  
磨石類(2)、石棒





縄文時代の石器  
石皿(2)



石皿(3)



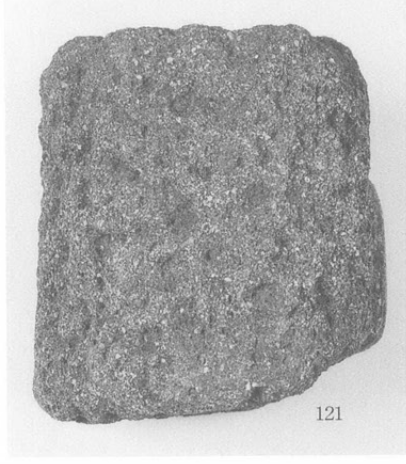
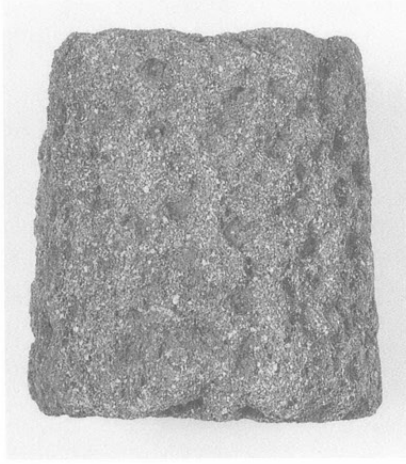
石皿(4)







縄文時代の石器  
多孔石



縄文時代の土製品等  
蓋、ミニチュア土器  
耳飾、匙





縄文時代の土器  
SB08-5



SQ群-8  
(SQ01)



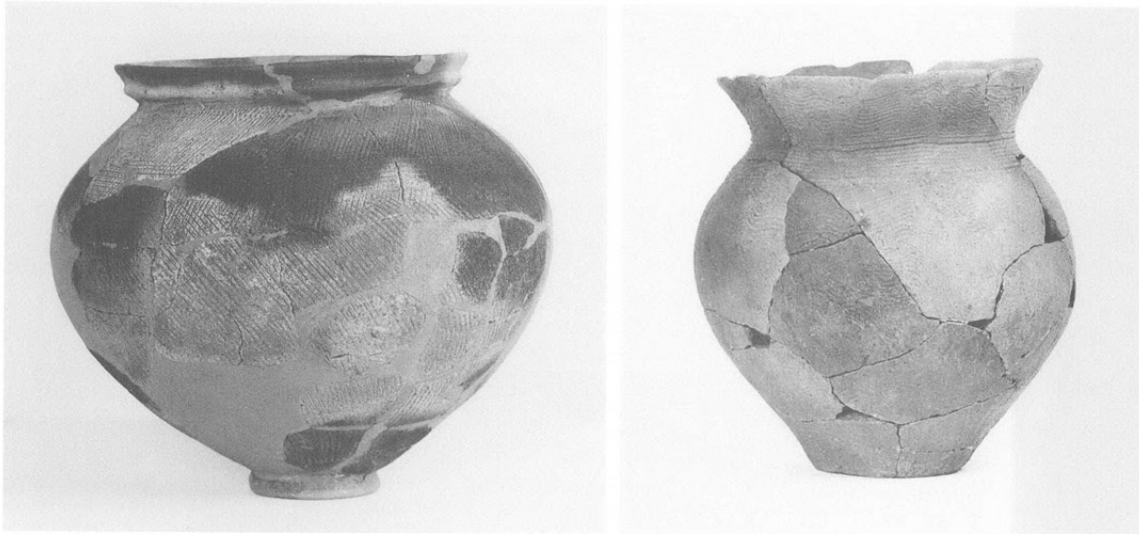
縄文時代の土器  
SB07-14



SB11-5



古墳時代の土器  
SB03-1



左：SB03-6  
右：SB03-2



SB05-33



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	かいとだえーいせき							
書名	海戸田A遺跡							
副書名	保健センター建設事業にかかる発掘調査							
シリーズ名	浅科村文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	上田 真、青木一男、百瀬長秀							
編集機関	浅科村教育委員会							
所在地	長野県北佐久郡浅科村甲1399							
発行年月日	平成14年 3月31日							
遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かいとだ 海戸田A	長野県北佐久郡 浅科村大字塩名 田字海戸田	3,254	14 (村番号)	36° 15′ 50″	138° 25′ 40″	平成10年 6月22日～ 8月12日	1,300㎡	保健センター建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
海戸田A	集落	縄文時代中期 ～後期  古墳時代前期  平安時代後期	敷石住居 5棟 墓坑 15前後 配石遺構 7基 竪穴住居 3棟  竪穴住居 3棟	縄文中期～後期土器 土製品 石器、剥片、石材 古墳前期～後期土器 炭化建築材 平安時代土器	良好な石棺墓あり  古墳前期土器で在来系譜他地域 系譜が混在			

浅科村文化財調査報告書

- 第1集 『土合1号墳の調査』(1969年)
- 第2集 『矢嶋城跡』緊急発掘調査報告書(1985年)
- 第3集 『五郎兵衛用水』矢嶋城跡腰曲輪部に開した用水路の調査(1987年)
- 第4集 『矢嶋城跡』第2曲輪部の建築遺構(1988年)
- 第5集 『矢嶋城跡』主郭部の試掘調査(1991年)
- 第6集 『砂原遺跡』洪水に埋もれた耕地と古代の村(1993年)
- 第7・8集 『矢嶋城跡』村道2-8号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
- 第9集 『御馬寄古城跡』村道北-50号線道路改良工事に伴う発掘調査(1996年)
- 第10集 『寺田遺跡』古東山道・中仙道沿いの村(1995年)
- 第11集 『入の沢遺跡』村道悪地山線農道改良工事に伴う発掘調査(1997年)
- 第12集 『大平遺跡』宅地造成に伴う発掘調査(1998年)
- 第13集 『原遺跡』宅地造成に伴う発掘調査(2001年)

浅科村文化財調査報告 第14集

海戸田A遺跡

保健センター建設事業にかかる発掘調査

発行 2002年3月31日  
発行者 浅科村教育委員会  
長野県北佐久郡浅科村甲1399  
TEL 0267-58-2001 FAX 0267-58-2897  
印刷 ほおずき書籍株式会社

